

令和元年度碧南市発達障害児者地域生活支援モデル事業 成果物

ＩＣＦ（国際生活機能分類）を活用した  
地域支援体制づくり（家庭、教育、福祉の連携）

令和２年３月

愛知県碧南市

## 目次

1	事業要旨	・・・ P 1
2	事業目的	・・・ P 4
3	事業の実施内容	
	(1) I C F 情報把握・共有ツールの概要	・・・ P 4
	(2) I C F 情報把握・共有パッケージ	・・・ P 4
	(3) パッケージを共有するためのクラウドシステム	・・・ P 7
	(4) クラウドシステムが有するデータ整理表出力機能	・・・ P 8
	(5) 情報共有フォーマットを生成するためのエクセルアプリケーション	・・・ P 1 5
4	モデル事業 I C F 研修の実施経過	
	(1) I C F 研修の内容	・・・ P 1 7
	(2) 参加者	・・・ P 1 7
	(3) 具体的内容と工夫点	・・・ P 1 8
5	モデル事業 I C F システム活用の実施経過	
	(1) モデル事業の実施単位	・・・ P 1 9
	(2) 利用者への参加協力依頼と参加協力親子	・・・ P 1 9
	(3) 事業の年間実施計画と実際の計画実施	・・・ P 1 9
	(4) I C F 情報把握・共有システムの実践活用	・・・ P 2 3
	(5) モデル事業の成果を検証する方法	・・・ P 3 6
<b>6</b>	<b>モデル事業の成果と考察</b>	
	(1) I C F 研修参加にかかわる質問票の結果	・・・ P 6 2
	(2) I C F 情報把握・共有システムの活用にかかわる質問票の結果	・・・ P 6 5
	(3) 本事業の振り返りアンケート（保護者および支援者）	・・・ P 7 3

(4) I C F 情報把握・共有システム活用前後での 個別支援計画の比較（企画推進委員）	・・・ P 7 6
(5) 支援会議の議事録内容の分析	・・・ P 8 2
(6) 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）	・・・ P 1 1 4
(7) 考察	・・・ P 1 1 5
付録	
1 企画・推進委員会の実施状況等	・・・ P 1 1 9
2 成果の公表実績・計画	・・・ P 1 2 6

令和元年度 碧南市発達障害児者支援モデル事業報告  
ICF（国際生活機能分類）を活用した地域支援体制づくり  
（家庭、教育、福祉の連携）

1 事業要旨

(1) 問題

碧南市では平成30年度に発達障害児者地域生活支援モデル事業を活用し、ICF(国際生活機能分類)を活用した療育支援事業を実施した。その結果、切れ目のない支援が実現、個別支援計画の具体性の向上、支援者の支援スキル向上、支援会議に参加した保護者が子育てに前向きとなり、子どもとのかかわりが改善した。ICFが支援の共通言語となることで、保護者と支援者が日常の具体的エピソードに基づいた子ども像を共通に描けたことが、結果に奏功したと考えられる。

一方で、幼児期、学齢期になると関係する支援機関が多くなり、ますます連携が難しくなるのが現状である。児童発達支援や放課後等デイサービスなどの福祉サービス利用児には担当者会議が位置付けられているが、その実際はそれぞれの状況をそれぞれの立場や視点から報告しあうだけで終わることが多い。そのため、子どもに関する情報、支援方法、支援の方向性等の共有が十分されにくく、提示された各場面での問題は子どもが引き起こす可能性のある問題リストと理解されやすく、各場面の環境要因の違いが子どもの状態像に与える影響を考慮する議論が起こりづらい。このことは子どもの育ち支援を環境調整の視点から検討することを妨げるだけに留まらず、保護者、各支援者を孤立させている現状もある。

そのため、今年度は対象児の年齢を幼児期、学齢期に上げ、文部科学省と厚生労働省による平成30年5月24日通知（教育と福祉の一層の連携等の推進について）で述べられているトライアングルプロジェクトを念頭に「家庭・教育・福祉の連携」をめざすことと、地域の支援者にICFの考えを広く周知するための研修を行うことで、地域の支援体制の充実を図ることを目的に、事業の実施を行った。

(2) 方法

方法の中核を成すのは、昨年度と同様にICF(International Classification of Functioning, Disability and Health;国際生活機能分類)の活用である。ICFは人間のあらゆる健康状態とその関連領域の諸要因を日常の用語で網羅的に分類・記

述したものであり、専門性や専門用語による壁に阻まれがちな支援の縦横連携を実現する共通言語として期待されている。今回の令和元年度事業でも企画推進委員会委員長が日本医療研究開発機構の平成 27 年度から 29 年度委託研究で開発を進めてきた「ICF 情報把握・共有システム（以下 ICF システムという）」（安達, 2018）を活用することとした。本システムはクラウド上に構成され、家族・本人を含む複数の支援者による分担入力を可能とするとともに、入力結果を支援に関連づけるためのデータ整理機能を有するものである。

今回の事業構成は ICF についての研修実施と、モデルケースへの活用の 2 本立てである。ICF 研修については、市内の子どもの発達に関わる支援者を対象に、3 日間の研修を実施した。昨年度の ICF の考え方や ICF システムについての座学の他、ICF システムの模擬情報収集や模擬支援会議を実施した。また、モデルケースとして児童発達支援を利用している幼稚園児 1 名と放課後等デイサービスを利用している小学生 2 名に ICF システム活用し、把握された情報に基づいて支援会議を実施し、支援計画を検討・策定・実施した。事業効果の検証方法として、ICF 研修会事後アンケート、支援チーム構築に関わる評価、システムの支援活用における評価、システムを活用した支援会議の評価、支援計画の実行と結果の評価、システム活用前後の個別支援計画の比較評価、保護者及び支援者の支援参加の振り返りアンケート、支援会議の議事録内容の分析などを行った。

### (3) 結果

ICF 研修会事後アンケートでは、支援の実効性につながる情報収集、把握された情報に基づく支援考案、支援会議の円滑な進行を実現する具体的な方法に加え、日常生活の具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さを理解したなど、地域の支援者の支援スキル向上を示す良好な結果が得られた。

モデルケースへの ICF システム活用による支援チーム構築の評価では、チーム構築および分担入力が連携支援に有用である等の、システム運用方法に対する良好な結果が得られた。

ICF システムの支援活用における評価は、医学的診断シートでは、医療と他分野が効果的に連携していける、活用することでさらにより支援計画となるなど良好な結果が得られた。健康関連情報シートでは、対象児の障害特性、困難性に影響する症状や機能不全などを支援者等に伝えることができる、それを共有することで、

支援計画の構築につながるなど良好な結果が得られた。活動と参加シートでは、対象児者の現状や有効・必要な支援がわかり、今後の支援計画に資する、連携支援の実現に有用である、記入の労力は得られた情報に見合う、など良好な結果が得られた。環境因子シートでは、対象児者の生活に影響する環境因子および必要な環境調整支援がわかり、今後の支援計画に資する、連携支援の実現に有用である、など良好な結果が得られた。

システムを活用した支援会議の評価では、参加者間のコミュニケーションが対等かつ良好となり、支援計画が具体的な情報把握に基づく対象児者の実態に沿ったものとなった、など良好な結果が得られた。

支援計画の実行と結果の評価では、計画はチームにも個人にも実行可能なものであり、目的の支援課題は解決して支援対象児の生活は改善し、計画実行によるチームの支援連携が向上する、など良好な結果が得られた。

保護者及び支援者の支援参加の振り返り評価については、保護者では、ICFの情報を見てできていることに気づき子どもの見方が変わった、精神的なゆとりがでた、考え方が前向きに変化した、相談しやすくなった、明るくなった、周りの支援者への感謝の念がわいた、など良好な結果が得られた。支援者では、他の機関での子どもの姿や以前の様子、本児の強みや苦手さ、うまくいく環境についての発見があった、環境と結び付けた支援や助言をできるようになった、支援計画が作りやすくなった、など良好な結果が得られた。

システム活用前後の個別支援計画の比較評価では、活用後の記載が活用前に比べて、支援者間で共通に思い描ける内容になり、より具体的で生活適応の改善に役立ち、評価しやすい内容になった、本人立場の表現が増え合理的配慮の記載も増えた、など良好な結果が得られた。

支援会議の議事録内容の分析では、ICFシステムの情報に基づいた支援会議を実施する中で、支援者が本人視点で考え本人の困り感を推測するようになった、子どもの姿だけでなく環境との関係を考えられるようになった、うまくいっている場面から支援方法を考えられるようになった、支援に対する考え方の統一がされるようになり、子どもの対応に困っていた支援者の意識が「支援ができそう」という方向に変化した、などの良好な結果が得られた。

#### 4) 考察

ICF 研修と ICF システムのモデルケースへの活用は良好な結果であった。ICF 研修と ICF システム活用により情報収集の質、支援会議の質、支援会議および支援の質の向上、家庭・教育・福祉の連携に効果があった。加えてそれらが子どもの姿の変化につながり、保護者も子どもの見方が変化し、精神的にゆとりが生まれ、孤立感が解消された。ICF 研修、ICF システムの活用により、支援者の子どもを見る視点が変わり、場面や環境との関係で子どもを捉えられるようになってきたことは、地域の支援体制強化につながった。「共通視点による子どもの網羅的な情報把握（ICF システム）の活用」と「把握された情報を共有する場（支援会議）」の設置が、今回の結果に奏功したと考える。

#### 2 事業目的

①市内の支援者向けに ICF 研修を実施し、ICF の考え方と ICF システム活用について普及を図る。

②相談支援専門員を軸に児童発達支援または放課後等デイサービス利用児に対し、モデル的に ICF ツールを活用し、研修参加者と実施方法、成果等を共有することで、碧南市の地域支援体制の充実を図る。

#### 3 事業の実施内容

##### (1) ICF 情報把握・共有ツールの概要

ICF 情報把握・共有ツールは、ICF の視点に基づく情報把握・共有パッケージ、パッケージを構成する情報把握・共有シート、情報把握・共有パッケージをインターネットで共有するためのクラウドシステムから構成される。クラウドシステムは支援会議での活用を企図した形のデータ整理票を出力する機能を有している。以下、それぞれについての説明を記載する。

##### (2) ICF 情報把握・共有パッケージ

###### ア 情報把握・共有パッケージのシート構成

ICF 情報把握・共有パッケージは「医学的診断」（ICF の健康状態と対応）、「健康関連情報」（心身機能・構造と対応）、「活動と参加」、「環境因子」、「支援対象者情報」（個人因子に対応）の情報把握シートに支援経過を記録するシートとして「支援課題・情報・方針・結果」を加えた 6 シートで構成される。

医学的診断シートは①精神科疾患の主診断と併存診断、②精神科以外の疾患の主

診断と併存診断、③医師の所見（診断と本人の状態像との関連）、④医学的治療方針（含：投薬内容）から成る。精神科以外の疾患を含めたのは、一般的な疾患の適応状態への影響を把握するためである。

健康関連情報シートは、①現在までの健診や医療受診に関する情報、②-1 専門的評価が必要と思われるエピソード、②-2 当該エピソードに関わる評価結果と所見、から成り、生育歴の把握とともに不適応への気づきが専門的評価につながる仕組みとなっている。

活動と参加シートは、ICF-CY（国際生活機能分類－小児・青少年に特有の心身機能・構造、活動等を包含－）の第2レベルを中心に第3レベルの項目を一部加えて構成するとともに、複数の項目をまとめて見出しと見出し説明を付記し、各項目にも簡単な説明文を付した。項目総数は127、見出し総数は58である。

環境因子シートについても、複数項目をまとめて見出しと見出し説明、項目説明を付した。項目総数は84、見出し総数は43となった。

支援対象者情報シートは、①性別と年齢、②同居者、③結婚、④職業、⑤資格、⑥

宗教、⑦特技や趣味、⑧医療サービス利用経過、⑨学校教育の経過（特別支援の有無）、⑩福祉サービスの利用経過、から成る。本ツールはクラウド利用を前提とするため秘匿性の高い個人情報は除外した。

図3-1は、以上のパッケージ構成をICF図式に準ずる形で示したものである。

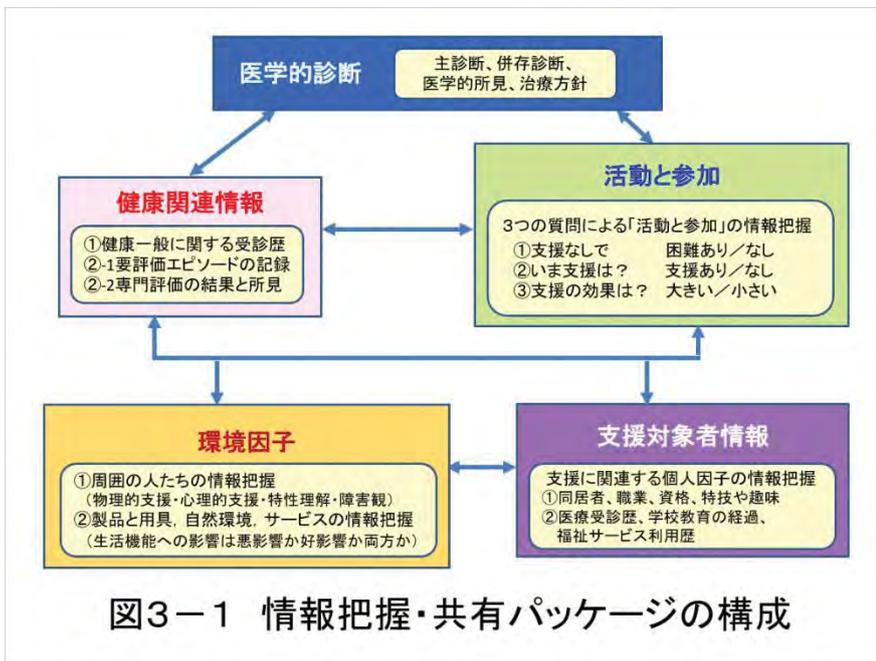


図3-1 情報把握・共有パッケージの構成

### イ 活動と参加シート及び環境因子シートの情報把握手順と回答カテゴリー

活動と参加シートでは、各項目に対する3つの質問を通じた情報把握が行われる手順とした。質問1が「支援なしの場面で：1)困難あり、2)困難なし、3)詳細不

明・非該当」の3択、質問2が「いま支援があるかどうか：1)支援あり、2)支援なし、3)スキップ」の3択、質問3が「支援の効果は：1)大きい、2)小さい、3)スキップ」の3択である。これら3つの質問に対する回答パターンによって、各項目を図3-2に示す5つの回答カテゴリーに位置づけることができる。

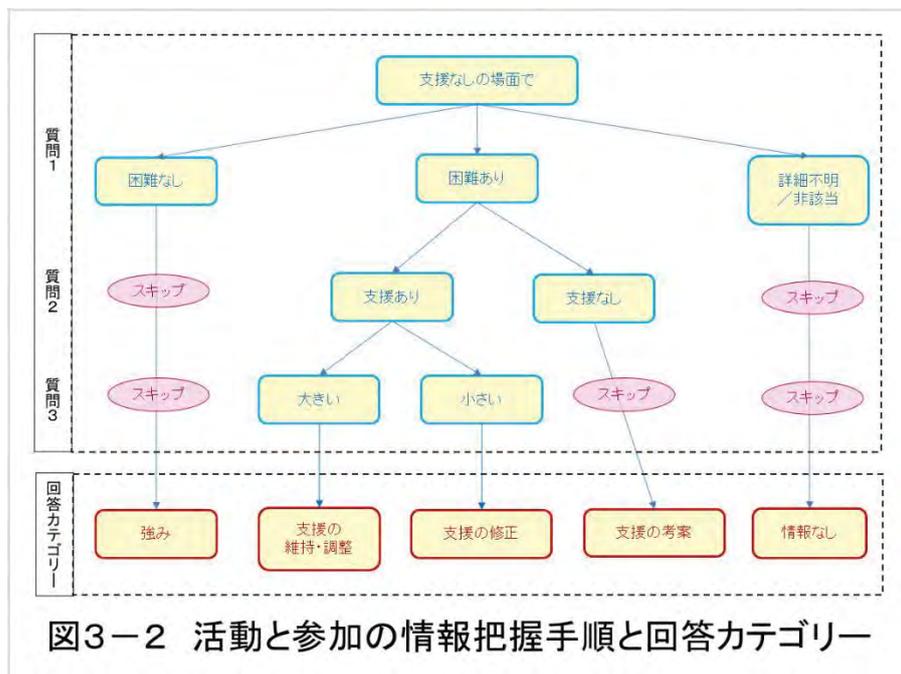


図3-2 活動と参加の情報把握手順と回答カテゴリー

環境因子シートについては、人に由来する環境因子を記述している「第3章 支援と関係」

および「第4章 態度」の情報を把握するために知的・発達障害支援の観点から支援と態度の定義をそれぞれ考案した。定義は、支援を a)「物理的支援」(支援ツールなど具体物などによる支援や直接手助けするなどの身体的な支援)と b)「心理的支援」(ほめる、なぐさめるなど、心理的な安定につながる支援)の2視点、態度を c)「特性理解」(児者の困難性を特性の観点から理解すること)と d)「障害観」(障害への拒否的/受容的態度)の2視点の計4視点で構成した。情報把握に関わる選択肢は a)、b)、c)については「1)支援ニーズあり、2)支援ニーズなし、3)詳細不明・非該当」とし、d)については「1)抵抗感あり、2)抵抗感なし、3)詳細不明・非該当」とした。加えて当該項目に関わる支援対象者の具体的状況の補足情報記入欄を全項目に設けた。なお、この場合の「支援ニーズ」とは当該の人たちに対する支援ニーズである。例えば、物理的支援が不十分であれば、その充実に向けて当該の人たちを支援する必要があることを意味する。具体的には、養育者について「物理的支援と特性理解は十分なため支援は必要ないが、障害への抵抗感があるため心理的支援の充実に向けて支援の必要がある」といった情報把握ができる。このため、家族支援の方向性を検討していくことができる。

人以外の環境因子である「第1章 製品と用具」、「第2章 自然環境と人間がもたらした環境変化」、「第5章 サービス・制度・政策」は、生活への阻害因子であるか促

進因子であるかの2視点で情報を把握する仕組みとした。ただしその表現は、生活への悪影響（阻害）、生活への好影響（促進）として、回答のしやすさを工夫し、「日常生活への悪影響が：1)あり、2)なし、3)詳細不明・非該当」、「日常生活への好影響が：1)あり、2)なし、3)詳細不明・非該当」という2つの質問を設定した。加えて、当該項目に関わる支援対象者の具体的状況を記載する補足情報欄を全項目に設けた。この情報把握手順により、例えば「音」の環境因子について「電気掃除機の音は阻害因子だが、繰り返す波の音は促進因子となる」といった情報把握ができる。

### (3) パッケージを共有するためのクラウドシステム

クラウドシステム上でのツール構築により、インターネット環境とパソコンがあればどこでも把握情報の入力と閲覧が可能であり、データ入力の中断と再開も可能なシステム構成とした。クラウドアクセスのためのIDは、管理者IDと利用者IDの2段構成となっており、また、クラウドシステムへのアクセスURLも管理者URLと利用者URLに分かれている。

管理者URLに装備された機能は、ユーザー設定（利用者IDおよび管理者IDの発行）、入力データのダウンロード、パスワード変更（各ユーザーIDのパスワード）である。利用者URLに装備された機能は、クラウドへの情報入力である。複数の関係者による分担入力を可能とするため、入力途中での中断機能による中間登録機能を有し、すべての入力が完了した段階で完全登録を行うことによって、入力データがサーバーに固定される。

管理者IDは利用者および管理者の両方のURLへのアクセスが可能である。利用者IDは利用者URLのアクセスに加え、当該利用者が情報入力を行ったことのある支援対象者のデータのみをダウンロードするために管理者URLへのアクセスも可能となっている。

本クラウドシステムは、一般的なファイル共有システムであるDropboxを活用したアプリケーションを新たに開発したものである。本アプリケーションはDropbox内にデータベースファイルを置く形で稼働するものであり、情報把握経過をクラウド上に保存できるため支援経過の履歴を確認することができる。また上述したように支援会議での利用を企図したデータ整理票の出力機能を有する。なお、Dropboxはすべてのデータを高度に暗号化して蓄積しているため、アカウントを経由せずに不正な手段

で得られたデータを解読することはできず、高い情報セキュリティを有している。

#### (4) クラウドシステムが有するデータ整理表出力機能

クラウドシステムが出力するデータ整理表の実際を、以下、医学的診断シート（表 3-1）、健康関連情報シート（表 3-2 a, b）、活動と参加シート（表 3-3 a ~ e）、環境因子シート（表 3-4 a ~ f）、支援対象者情報シート（表 3-5）のそれぞれについて示す。なお、各表の記載情報は仮想ケースのサンプルデータによるものである。

### ア 医学的診断シート

表 3-1 医学的診断シート 整理表サンプル

医学的診断				
精神科疾患	主診断 1		主診断 2	
	"自閉症"		"注意欠陥多動性障害"	
	ICD-コード	ICD-版	ICD-コード	ICD-版
	"F84.0"	"10"	"F90.0"	"10"
	併存診断 1		併存診断 2	
	ICD-コード	ICD-版	ICD-コード	ICD-版
精神科以外の疾患	主診断 1		主診断 2	
	併存診断 1		併存診断 2	
医師の所見	自閉症と注意欠陥多動性障害の両症状が併存していることによって、状況理解の難しさが衝動性や不注意と相乗的に、本人の適応不全の背景となっている。			
医学的治療方針	情報処理の負荷が少ない、できるだけシンプルな環境において、本人が関心を示すテーマの活動の中で、注意をコントロールする感覚を体験してもらうことを大切に発達支援が求められる。また、場面に応じて本人の困り方を保護者に伝えることも重要である。			

イ 健康関連情報シート

表 3 - 2 a 健康関連情報シート 記入欄 A 整理表サンプル

健康関連情報 (記入欄A)	
A. 健診や医療受診にかかわる情報 (過去から現在までの情報)	
1. 幼年期(0～4歳)	1歳6ヶ月健診では指摘がなかったが、3歳時健診で指摘あり。言葉の多少の遅れと、一人遊び、集団に入ろうとしないこと。
2. 少年期(5～14歳)	就学時健診で、教や言葉など学習にかかわる基本的事項が十分ではないこと、および対人面の問題が把握された。就学は特別支援学級。
3. 青年期(15～24歳)	非該当
4. 壮年期(25～44歳)	非該当
5. 中年期(45～64歳)	非該当
6. 老年期(65歳以上)	非該当

表 3 - 2 b 健康関連情報シート 記入欄 B 整理表サン

健康関連情報 (記入欄B_01-02)							
B. 専門的評価が必要と思われるエピソード/専門職による評価結果と所見							
エピソード01	記入者ID	temp1423	記入日	2017.10.25			
エピソード内容	他児とのコミュニケーションがなかなか通じず、他児からの働きかけに対して場面に合わないことを言ったりする。						
専門評価01	評価者ID	temp0034	職種	心理職	評価法	絵画語彙発達検査	
	評価目的	言葉の発達				評価日	2018.03.15
評価結果と所見	知っている語彙は多い。ただし、同じ対象をある名称で呼称すると、別の名称で呼称することに時間がかかる。言葉の早期の切替に苦手さがありそう。						
エピソード02	記入者ID		記入日				
エピソード内容							
専門評価01	評価者ID		職種		評価法		
	評価目的					評価日	
評価結果と所見							

## ウ 活動と参加シート

活動と参加シートのデータ整理表は、図2に示す回答パターンによるカテゴリ別に各カテゴリの該当項目を示すものであり、各項目の補足情報も提示するものとした。表3-3a～eに、各回答カテゴリの整理表サンプルを示す。

表3-3a 活動と参加 「強み」 該当項目 整理表サンプル

【強み（支援なしで困難なし）】					
	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_45	d331) 声による情報伝達	困難なし	スキップ	スキップ	①発声での要求や拒否は両側の人も理解できる。
項目_56	d410) 姿勢を変える	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_57	d415) 同じ姿勢を保つ	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_58	d420) 同じ姿勢で移動する	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_59	d429) その他の姿勢の交換と保持	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_60	d430) 物(人)を持ち上げる・運ぶ	困難なし	スキップ	スキップ	足を使って物を動かすことはない。
項目_63	d445) 手・腕の協調動作で物を扱う	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_66	d450) 歩行	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_67	d455) 移動すること	困難なし	スキップ	スキップ	
項目_68	d460) 屋内・外の移動	困難なし	スキップ	スキップ	

表3-3b 活動と参加 「支援の維持・調整」 該当項目 整理表サンプル

【支援の維持・調整（支援効果は大きい）】					
	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_15	d1310-2) 物を扱う遊びを通して学ぶ	困難あり	支援あり	大きい	①積木などの物を並べる遊びはするが、それ以上の扱いにはならない。②本児の遊び方によって積木と一緒に並べながら、時々積み方に変化を入れる。③しばらく同じ遊びをした後で縦積みを入れるなどすると、嫌がらず、促すとやろうとする。
項目_20	d161) 課題(作業)完了までの注意持続	困難あり	支援あり	大きい	①遊びなどの活動が続かない。②活動から離れようとしたときに間髪入れず、次の活動の物を見せる。声かけは控える。③活動に戻れることが多い。
項目_35	d250) 場面に応じた行動コントロール	困難あり	支援あり	大きい	①児童館での絵本読みで座っていられたことがない。②一番前の席にして、ページのめくり役をしてもらう。③5分以内で読み終わる絵本であれば、座って読み聞かせに参加できている。

表3-3c 活動と参加 「支援の修正」 該当項目 整理表サンプル

【支援の修正（支援効果は小さい）】					
	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_5	d130) まねをして学ぶ	困難あり	支援あり	小さい	"①手遊びなどの真似はしない。②向かい合って拍手などの単純な行動は少し真似ができる。③それ以上の模倣はできない。 ①言葉の模倣もしない。②一音一音であれば、少し真似ができる。③それ以上の模倣はできない。"
項目_17	d155) 必要な生活スキル(行為)の習得	困難あり	支援あり	小さい	①バイバイは逆さバイバイになる。②横に並んで一緒にバイバイする。③動作を見せて促すと普通のバイバイをするときもある。
項目_78	d540a) 衣服・履き物の着脱	困難あり	支援あり	小さい	①ボタンやホックのないパジャマの脱ぎ着のみできる。②普段着の着脱は手伝っている。③パジャマ以外は協力動作をしない。

表 3 - 3 d 活動と参加 「支援の考案」 該当項目 整理表サンプル

【支援の考案（困難ありで支援なし）】					
	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_1	d110) 目的をもって見る	困難あり	支援なし	スキップ	①注意深く物を見ることをせず、目移りが激しい。一方、興味のあるTVキャラクターなどはじっと見ている。
項目_2	d115) 目的をもって聞く	困難あり	支援なし	スキップ	①名前を呼んでも反応しないことが多い。一方、お菓子の包み紙を開ける音はすぐに察知して振り向く。
項目_6	d132) 知らないことを質問する	困難あり	支援なし	スキップ	
項目_7	d133) ことばの習得と使用	困難あり	支援なし	スキップ	①好きなお菓子の名前は覚えていてる。
項目_10	d137a) 物の特徴の概念学習	困難あり	支援なし	スキップ	①まだまったくできないが、おやつは大きい方を取る。
項目_11	d137b) 心の状態の概念学習	困難あり	支援なし	スキップ	②できない。
項目_16	d1313-4) 見立てやフリを通して学ぶ	困難あり	支援なし	スキップ	①まったくやろうとしない。
項目_25	d175) 問題を解決すること	困難あり	支援なし	スキップ	①遊びの中で物がうまく操作できずうまく行かなくなると愚痴をこぼす。
項目_34	d240) ストレスを伴う作業(活動)遂行	困難あり	支援なし	スキップ	①はやくしなさいと言っても、やろうとしない。何度も言うとうと、愚痴をこぼす。

表 3 - 3 e 活動と参加 「情報なし」 該当項目 整理表サンプル

【情報なし（詳細不明・非該当）】					
	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	補足情報
項目_4	d129) 目的を持つその他の感覚経験	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_8	d134) 代替・補足的言語手段の習得と使用	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_9	d135) 繰り返しして練習する	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_12	d140) 読むことの意味と習得	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_13	d145) 書くことの意味と習得	情報なし	スキップ	スキップ	
項目_14	d150) 計算の意味と習得	情報なし	スキップ	スキップ	

エ 環境因子シート

環境因子シートのデータ整理表は、回答パターンに基づいて、環境因子としての周囲の人たち、悪影響と好影響が見られる項目、悪影響が見られる項目、好影響が見られる項目、影響が見られない項目、情報なし（悪影響・好影響の再確認）の各カテゴリに該当する項目を示すものであり、各項目の補足情報も提示するものとした。表3-4 a～fに、各回答カテゴリの整理表サンプルを示す。

表3-4 a 環境因子 周囲の人たち 整理表サンプル

【周囲の人たち】							
	項目タイトル	物理的支援	心理的支援	補足情報	特性理解	障害観	補足情報
項目_1	e3-410) 家族や近い親族	助言が必要	助言は不要	①トイレの手伝い、衣服の着脱など身体的支援が行われている。自立に向けての環境調整の工夫が必要。 ②両親とも、見がうまくなってきた場合には、必ず、ほめている。祖父母はよくわからないようだが、見のこを受けとめてはいる。	助言が必要	抵抗感なし	①特性の観点から、男の生活の標準を捉え直す機会が必要。
項目_2	e3-415) 親族	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_3	e3-420) 友人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_4	e3-425) 知人、同僚、地域の人など	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_5	e3-430) 教師や雇用主など上の立場の人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_6	e3-435) 組織の中で下の立場にある人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_7	e3-440) 対人サービス提供者	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_8	e345.e445) 一時的に関わる人	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_9	e355-450) 医療・保健・福祉の専門職	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_10	e360-455) その他の専門職	詳細不明	詳細不明		詳細不明	詳細不明	
項目_11	e3-496-9) その他の周囲の人たち	助言は不要	助言は不要		助言は不要	抵抗感なし	

表 3 - 4 b 環境因子 好悪両影響の因子 整理表サンプル

【悪影響と好影響の両側面を検討】				
	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_25	e465) 社会全体の価値観、習慣、慣行、宗教教義など	あり	あり	①療育を特別な子育てと感じやすい部分がある ②どんな子どもでも受け入れて育てていくという信念がある。
項目_32	e1200) 屋内外の移動のための乗り物や公共の交通手段（改造や特別な設計なし）	あり	あり	①三輪車はまだ乗れない、バスは振動が嫌で乗れない。 ②自家用車であれば乗れる。

表 3 - 4 c 環境因子 悪影響の因子 整理表サンプル

【悪影響の側面を検討】				
	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_26	e110 a) 食べ物や飲み物	あり	なし	①カレーなど、いろいろな具が混ざっている物は食べづらい。
項目_47	e165) 資産	あり	なし	①家庭の経済状況が多少不安定。
項目_49	e240) 光	あり	なし	①まぶしい光や明るすぎる場所は苦手で目をつぶって開けようとしなない。
項目_50	e250) 音	あり	なし	①突然の大きな音や高い金属音は苦手で、しばらく耳を塞いでいる。
項目_53	e2251) 湿度	あり	なし	①梅雨時など湿度が上がってくるとイライラし始めることが多い。
項目_56	e255) 振動	あり	なし	①バスの揺れや信号でスピードが落ちて止まるのが苦手で乗ろうとしない。
項目_79	e585) 教育と訓練の関連サービス	あり	なし	①本児を受け入れてくれる幼稚園がなかなか見つからない。

表 3 - 4 d 環境因子 好影響の因子 整理表サンプル

【好影響の側面を検討】				
	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_30	e11520) 一般的な遊び用の製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	②くるくるチャイムやイタズラボックスが大好きで、集中して遊んでいられる。
項目_34	e1250) 情報の受信や発信、コミュニケーションのための製品や用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	②幼児向けのテレビを見て、歌などを覚えている。
項目_36	e1300) 学習のための一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	なし	あり	②タブレットの動く絵本が好きで言葉を覚えたりしている。
項目_55	e2253-5) 天気の状態や四季の変化	なし	あり	①春と秋は比較的落ちついて過ごせる。

表 3 - 4 e 環境因子 影響なしの因子 整理表サンプル

【当該因子の影響なし】				
	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_28	e1150) 日常生活で使う一般的な製品と用具 (改造や特別な設計なし)	なし	なし	
項目_44	e155) 自宅の暮らしやすさや安全性 (設計や設備について)	なし	なし	
項目_45	e150) 公共の建物の使いやすさ (設計や設備について)	なし	なし	
項目_46	e160) 屋外環境の整備状況 (道路や街灯、公園の整備など)	なし	なし	
項目_48	e198-9) その他の製品と用具	なし	なし	
項目_51	e260) 空気	なし	なし	
項目_52	e2250) 気温	なし	なし	
項目_54	e2252) 気圧	なし	なし	
項目_57	e245) 昼夜の移り変わりや月の満ち欠け	なし	なし	

表 3 - 4 f 環境因子 情報なしの因子 整理表サンプル

【悪影響・好影響の有無を再確認】				
	項目タイトル	悪影響	好影響	補足情報
項目_23	e350) ペットや家畜など	詳細不明	詳細不明	
項目_24	e460) 団体やグループの障害観	詳細不明	詳細不明	
項目_27	e110 b) 薬や栄養補助剤	詳細不明	詳細不明	いま、薬は飲んでいない。
項目_29	e1151) 日常生活での使いやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	詳細不明	詳細不明	
項目_31	e11521) 遊びやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	詳細不明	詳細不明	
項目_33	e1201) 屋内外の移動や公共交通の利用を支援するために工夫・改造された製品や用具	詳細不明	詳細不明	
項目_35	e1251) 情報の受信や発信、コミュニケーションを支援するために工夫・改造された製品と用具。	詳細不明	詳細不明	

オ 支援対象者情報シート

表 3 - 5 支援対象者情報 整理表サンプル

支援対象者情報												
氏名	氏名漢字		氏名カナ		性別		年齢		職業		家族の状況の などの	
	姓	名	姓	名	男	女	0～4歳	5～14歳	15～24歳	25～44歳		
	姓	名	姓	名	あり	なし	あり	なし	あり	なし		
性別	男											
特技 趣味	あり	「文字がわかるブロックが好きで、これがあればずっと一人で遊んでいられる。」 「パソコンが得意。裏返しができる。」 「国語の小学校の学年向けの冊子からいろいろな言葉を覚えていっている。」									特技や 趣味の などの	
医療 サービスの 利用状況	0～4歳	受診あり	補正	「4歳6ヶ月の時に障害診断を受けた。自閉症の診断があった。」								医療 利用状況 などの
	5～14歳	非該当	補正									
	15～24歳	非該当	補正									
	25～44歳	非該当	補正									
	45～64歳	非該当	補正									
学校教育 (特別支援教 育)の 経過	幼稚園	特になし	補正									学校教育 のなどの
	小学校	非該当	補正									
	中学校	非該当	補正									
	高校	非該当	補正									
	専門学校・大学	非該当	補正									
福祉サービスの 利用経過	幼稚園	利用なし	補正									福祉 サービスの などの
	小学校	非該当	補正									
	中学校	非該当	補正									
	高校	非該当	補正									
	専門学校・大学	非該当	補正									
福祉サービスの 利用経過	幼稚園	利用なし	補正									福祉 サービスの などの
	小学校	非該当	補正									
	中学校	非該当	補正									
	高校	非該当	補正									
	専門学校・大学	非該当	補正									
福祉サービスの 利用経過 (学校教育後)	事業所名1			事業所名・制度名1			事業所名2			事業所名・制度名2		
	事業所名3			事業所名・制度名3			事業所名4			事業所名・制度名4		
	事業所名5			事業所名・制度名5			事業所名6			事業所名・制度名6		
	事業所名7			事業所名・制度名7								
支援対象者情報 全体のなどの												

(5) 情報共有フォーマットを生成するためのエクセルアプリケーション

情報共有フォーマットとは、(4) で記載した、各情報把握・共有シートの整理表を ICF 図式に準じて配置するためのアプリケーションである。情報共有フォーマットを概観することによって、ICF 情報把握・共有パッケージで得られた支援関連情報を包括的に捉え、支援対象児者の全体像を検討することができる。なお、本アプリケーション(4)で述べた各シートのデータ整理表のデータを反映するために、情報共有フォーマットを生成するためには、(4)で述べた、各シートのデータ整理表を、先行して生成しておく必要がある。図 3 - 3 に、情報共有フォーマット(サンプルデータ)を示す。

ICT評価システム 情報共有フォーマット

資料ID	4539a418-00a
資料種別	20240521250
種類	協議レポート

項目名	項目	項目内容	項目属性	項目	項目属性
資料ID	4539a418-00a	20240521250	協議レポート		
資料種別	20240521250	協議レポート			
種類	協議レポート				

項目名	項目	項目内容	項目属性	項目	項目属性
資料ID	4539a418-00a	20240521250	協議レポート		
資料種別	20240521250	協議レポート			
種類	協議レポート				

項目名	項目	項目内容	項目属性	項目	項目属性
資料ID	4539a418-00a	20240521250	協議レポート		
資料種別	20240521250	協議レポート			
種類	協議レポート				

項目名	項目	項目内容	項目属性	項目	項目属性
資料ID	4539a418-00a	20240521250	協議レポート		
資料種別	20240521250	協議レポート			
種類	協議レポート				

項目名	項目	項目内容	項目属性	項目	項目属性
資料ID	4539a418-00a	20240521250	協議レポート		
資料種別	20240521250	協議レポート			
種類	協議レポート				

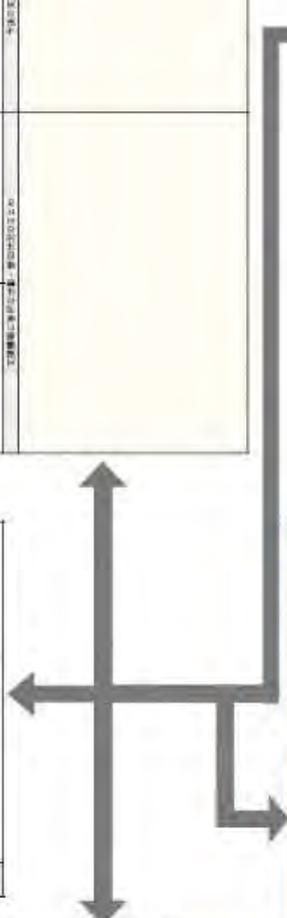


図 3-3 情報共有フォーマット (サンプルデータ)

#### 4 モデル事業 ICF 研修の実施経過

##### (1) ICF 研修の内容

###### ア 目的

ICF をもちいた地域支援体制づくり

市内福祉サービス事業所、相談支援事業所、保育園、幼稚園、学校等の支援者に ICF ツールの活用研修を実施し、碧南市の地域支援体制の充実を図る。

###### イ 研修題名

「ICF（国際生活機能分類）って知っていますか？」

###### ウ 日時

第1回：情報収集編 令和元年7月12日(金)9時30分から15時まで

第2回：第1回目支援会議編 令和元年8月22日(木)9時30分から  
15時まで

第3回：第2回目支援会議編 令和元年11月8日(金)9時30分から  
15時まで

###### エ 講師

北海道大学大学院教育学研究院 安達 潤教授

###### オ 周知先

市内福祉サービス事業所(児童以外の事業所も含む)、相談支援事業所、幼稚園、保育園、学校、保護者の会(親子の会カラフル)、にじの学園、こども課、健康課、福祉課

##### (2) 参加者

(児童)福祉サービス事業所 9名(児発管、支援員)

相談支援事業所 3名(相談支援専門員)

保護者団体 5名(保護者)

モデル事業対象児保護者 3名

幼稚園、保育園 4名(園長、モデル事業対象児担当教諭)

親子通園施設 1名(保育士)

行政(こども課、福祉課) 4名(指導主事、指導保育士、保育士、主事)

オブザーバー参加：学校教育課2名、あいち発達障害者支援センター2名

(3) 具体的内容と工夫点

	内容	工夫した点等
1 回 目	<p>&lt;情報収集編&gt;</p> <p>①子どものよさを伸ばすには</p> <p>②ICF 情報収集・共有システム活用の 具体的効果</p> <p>③ICF 情報収集・共有システムを使った情 報収集の方法</p> <p>④情報収集の実践</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場面とセットで状況把握する (どんな場面なら「できる」かを見 つける) ことが大切)</li> <li>・ICF のキャッチコピー (「いいと こ ちゃんと ふえてくる」)</li> <li>・「活動と参加」「環境因子」を、情 報収集シートを用い実際に記入</li> </ul>
2 回 目	<p>&lt;第1回支援会議編:「会議資料作成」&gt;</p> <p>①第1回支援会議の事前準備 (情報の分析、支援検討項目の決定方法、 支援会議資料の作成方法)</p> <p>②第1回支援会議の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度のモデル事業のデータを 活用し、支援に活用する具体的な 手がかりの見つけ方、支援方法の 立案をグループワークで体験</li> </ul>
3 回 目	<p>&lt;今年度のモデル事業の状況報告&gt;</p> <p>①ミニシンポジウム: 3 ケースの概要報 告と ICF 活用し良かった点、分かった点、 課題の報告</p> <p>&lt;会議進行テクニックの紹介&gt;</p> <p>&lt;第2回支援会議編:「うまくいく条件、 いかない条件を見出す」&gt;</p> <p>①第2回支援会議の事前準備 (情報の再把握、支援会議資料の作成方 法)</p> <p>②うまくいく条件、いかない条件の抽出 方法</p> <p>③第2回支援会議の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段の支援会議の振り返り</li> <li>・第1回支援会議の様子を相談支 援専門員と福祉課から報告</li> <li>・支援会議を含めた会議進行の一 般的なテクニックの紹介</li> <li>・昨年度のモデル事業のデータを 活用し、「うまくいく条件、いか ない条件」の抽出体験</li> </ul>

## 5 モデル事業 I C F システム活用の実施経過

### (1) モデル事業の実施単位

#### < ケース 1 >

- ・ 幼稚園年長 男児

- ・ 診断名：自閉症

- ・ 支援チーム構成：相談支援専門員、幼稚園教諭、児童発達支援事業所支援員、主治医、保護者

#### < ケース 2 >

- ・ 小学校特別支援級 1 年 男児

- ・ 診断名：自閉症スペクトラム、注意欠陥多動症

- ・ 支援チーム構成：相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所支援員、児童クラブ支援員、主治医、保護者

#### < ケース 3 >

- ・ 小学校普通級 6 年 男児

- ・ 自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害

- ・ 支援チーム構成：相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所支援員、主治医、保護者

### (2) 利用者への参加協力依頼

参加協力者へは事業説明の後、参加協力同意書に記名を依頼した。

### (3) 事業の年間実施計画と実際の計画実施

図 5 - 1 a ~ c に示すのは、モデル事業の年間実施計画である。

#### ア 6 月 ~ 8 月

6 月 ~ 8 月の実施計画を図 5 - 1 a に示す。

6 月は、企画・推進委員会を開催し、年間計画について協議。

7 ~ 8 月は、I C F の詳細について学習する必要があるため、事業に参加する支援者をはじめ、市内の子どもに関わる支援者を対象に、I C F の研修を実施する。事業に参加する相談支援事業所、事業所、幼稚園、学校の担当者は、6 月から

I C F 情報把握・共有システムの使用の練習を行い、7 月の I C F 研修会後に情報収集を開始し、8 月下旬に支援会議資料の作成を行う。

愛知県碧南市 発達障害児者 地域生活支援モデル事業 事業計画	令和元年			
	6月	7月	8月	
	6月14日	7月12日	8月16日	8月22日
(企画・推進委員会) (全3回)	午後：第1回企画・推進委員会 内容) 研修会内容について、学校、幼稚園との連携について			
ICF研修会 (全3回)		9:30~15:00 会議室1 第1回ICF研修会 (情報収集編)		9:30~15:00 会議室1 第2回ICF研修会 (支援会議編) / 午前：支援会議資料の作成、午後：資料作成実践演習
委員長の動き	6月14日) 午前) 打ち合わせ参加 午後) 企画・推進委員会	7月11日) システムの使い方講習会 7月12日) 研修会講師	8月16日頃にデータ整理表の共有	8月22日) 研修会講師
マネージャーの動き	企画・推進委員会開催	研修会開催	8月16日頃にデータ整理表の共有	研修会開催
相談支援専門員	6月17日から) 情報把握・観察の練習開始 (紙ベース)	7月12日の研修) 情報把握・観察について 疑問点の確認 7月12日から) > 情報把握・観察の追加・修正 > システムへの情報入力 > 入力完了後、入力データチェック > 把握データ整理		8月22日の研修) 支援会議についての疑問点の確認 8月22日から) (支援会議に向けての準備) > 支援検討項目の確定 (関係機関の調整) > 支援会議資料の作成
事業所、学校、幼稚園	6月17日から) 情報把握・観察の練習開始 (紙ベース)	7月12日の研修) 情報把握・観察について 疑問点の確認 7月12日から) > 情報把握・観察の追加・修正 > システムへの情報入力 > 入力完了後、把握データ整理		8月22日の研修) 支援会議についての疑問点の確認 8月22日から) (支援会議に向けての準備) > 支援検討項目の確定 > 支援会議資料の作成

図5-1a 年間の実施計画の流れ(1)

イ 9月～12月

9月～12月の実施計画を図5-1bに示す。

9月は、第1回支援会議で支援計画を立てるとともに、会議に基づいた支援を開始する。11月には第3回ICF研修会を実施し、第2回目支援会議の実施について方法について学ぶ。また、第2回企画・推進委員会を開催し、途中経過報告と、その後の進め方を協議する。

愛知県碧南市 発達障害児者 地域生活支援モデル事業 事業計画	令和元年				
	9月	10月	11月		12月
			11月8日	11月22日	
(企画・推進委員会) (全3回)				午後：第2回企画・推進委員会内容)研修会の報告、支援会議の報告、第2回支援会議にむけて	
ICF研修会(全3回)			9:30～15:00 あいくるデイルーム1 第3回ICF研修会 (第2回目支援会議編)		
委員長の動き	検討)必要に応じてスカイプ会議		11月8日) 研修会講師	11月22日) 午前 打ち合わせ参加 午後 企画・推進委員会	検討)必要に応じてスカイプ会議
マネージャーの動き	支援会議参加		研修会開催		
相談支援専門員	9月下旬) 第1回支援会議の開催 >司会	支援計画に基づく支援の実施を継続	11月8日の研修) 第2回支援会議についての疑問点の確認	支援計画に基づく支援の実施を継続	12月下旬) <b>支援経過の振り返り</b> >観察・情報把握(変化のあった部分のみ入力)
事業所、学校、幼稚園	9月下旬) 第1回支援会議に出席 >支援案、役割の確定	支援計画に基づく支援の実施を継続	11月8日の研修) 第2回支援会議についての疑問点の確認	支援計画に基づく支援の実施を継続	12月下旬) <b>支援経過の振り返り</b> >観察・情報把握(変化のあった部分のみ入力)

図5-1b 年間の実施計画の流れ(2)

ウ 1月～3月

令和2年1月～3月の実施計画を図5-1cに示す。

1月は、第2回支援会議に向けて、情報の再収集を行い支援会議資料の準備をする。2月は第2回支援会議を行い、支援効果と引継ぎ書類の内容を確認する。

2月～3月は、事業全体の成果を、経過全体を振り返る質問票により評価。企画推進委員会を開催し、事業報告書まとめの確認を実施。

愛知県碧南市 発達障害児者 地域生活支援 モデル事業 事業計画	令和2年		
	1月	2月	3月
			3月16日
(企画・推進委員会) (全3回)			午後：第3回企画・推進委員会 内容) 事業まとめ、今後の方針
ICF研修会 (全3回)			
委員長の動き			午後) 企画・推進委員会
マネージャーの動き		支援会議参加	
相談支援専門員	1月中旬) 第2回支援会議の資料準備 >入力完了後、データチェック >把握データ整理、確認 >支援会議資料作成	2月) 第2回支援会議 >司会 >チーム全体で支援効果の確認 >引継ぎ書類の内容	
事業所、学校、幼稚園	1月中旬) 第2回支援会議の資料準備 >入力完了後 >把握データ整理、確認 >支援会議資料作成	2月) 第2回支援会議 >司会 >チーム全体で支援効果の確認 >引継ぎ書類の内容	

図5-1c 年間の実施計画の流れ(3)

エ 計画の実施について

図 5 - 1 a ~ c に示す通り、ほぼ計画通りに進行・完了した。

(4) ICF 情報把握・共有システムの実践活用

図の 5 - 2 に実践活用の手順を示す。

ア	ICF情報把握・共有システムによる情報把握と情報共有
	(ア) チームで情報収集の役割分担
	(イ) ICF情報把握シートにて情報収集
	(ウ) ICF情報把握データ整理表で全体像を把握
イ	支援検討項目についての絞込み
ウ	第 1 回支援会議の事前準備 (支援会議資料の作成)
エ	第 1 回支援会議の開催および支援計画の検討
オ	支援計画の実施と ICF 情報把握・共有システムによる情報の再把握と再共有
カ	第 2 回支援会議の事前準備
キ	第 2 回支援会議の開催および支援計画の検討

図 5 - 2 ICF 情報把握・共有システムの実践活用の流れ

ア ICF 情報把握・共有システムによる情報把握と情報共有

(ア) 支援チームによる情報収集の役割分担

a 情報収集項目

	活動と参加シート	環境因子シート
ケース 1	9 3 項目	5 7 項目
ケース 2	9 4 項目	5 8 項目
ケース 3	9 4 項目	5 8 項目

ICFシステムによる情報把握では、活動と参加シートについては、幼児期、学齢期には非該当になると思われる項目（ケース1は34項目、ケース2, 3は33項目）を予め除外し残りの項目について、協力児1人に対し項目ごとに担当者を決め情報収集を実施した。除外項目には、ディスカッション、健康に注意すること、住居・家具・家電の入手、調理をすること、家族や他者の世話、などを選択した。

環境因子シートについても、予め建築、電気・ガス・水道、土地開発、労働と雇用などの項目を除外し残りを担当者が情報収集をした。

### c 支援チームの構成

支援チーム構成を表5-1a～表5-1cに示す。保護者を含む10名程度で構成した。

表5-1a 支援チーム構成（ケース1）

対象児 ケース1 (年長児)			
	立場	職種等	所属
1	リーダー	社協相談支援専門員	相談支援事業所
2	メンバー	児発管	児童発達支援事業所
3	メンバー	保育士	児童発達支援事業所
4	メンバー	保育士	児童発達支援事業所
5	メンバー	精神保健福祉士	児童発達支援事業所
6	メンバー	児童指導員	児童発達支援事業所
7	メンバー	幼稚園教諭	幼稚園
8	メンバー	児童精神科医	病院
9	メンバー	作業療法士	児童発達支援事業所
10	メンバー	家族(母親)	保護者

表5-1b 支援チーム構成（ケース2）

対象児 ケース2 (小学校1年生)			
	立場	職種等	所属
1	リーダー	社協相談支援専門員	相談支援事業所
2	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
3	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
4	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
5	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
6	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
7	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
8	メンバー	理事	放課後等デイサービス事業所
9	メンバー	作業療法士	保育所等訪問支援事業所
10	メンバー	児童精神科医	病院
11	メンバー	教諭	小学校
12	メンバー	家族(母親)	保護者

表 5 - 1 c 支援チーム構成 (ケース 3)

対象児 ケース 3 (小学校 6 年生)			
	立場	職種等	所属
1	リーダー	社協相談支援専門員	相談支援事業所
2	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
3	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
4	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
5	メンバー	児発管	放課後等デイサービス事業所
6	メンバー	児童指導員	放課後等デイサービス事業所
7	メンバー	理事	放課後等デイサービス事業所
8	メンバー	主治医	病院
9	メンバー	教諭	小学校
10	メンバー	家族(母親)	保護者

d 各情報把握シートへの回答

各情報把握シートへの回答者を表 5 - 2 に示す。活動と参加は項目数が多いため、さらに表 5 - 3 に示す分担体制とした。環境因子に関しては児発または放デイ事業所が情報収集をし、家庭でしか把握できない項目は、児発管または事業所理事が要約して保護者に聞き取りを実施した。

表 5 - 2 a 各情報把握シートへの回答者(ケース 1)

親子通園施設 各情報把握シートへの回答者	
医学的診断シート	主治医
健康関連情報 記入欄 A	保護者に聞き取り (児発事業所)
健康関連情報記入欄 B 1	別の児発事業所 (作業療法士)
活動と参加	支援チームメンバー&情報把握分担表
環境因子	支援チームメンバー&情報把握分担表
支援対象者情報	保護者に聞き取り (児発事業所)

表 5 - 2 b 各情報把握シートへの回答者(ケース 2)

親子通園施設 各情報把握シートへの回答者	
医学的診断シート	主治医
健康関連情報 記入欄 A	保護者に聞き取り (放デイ事業所)
健康関連情報記入欄 B 1	保育所等訪問支援事業所(作業療法士)
活動と参加	支援チームメンバー&情報把握分担表
環境因子	支援チームメンバー&情報把握分担表
支援対象者情報	保護者に聞き取り (放デイ事業所)

表 5 - 2 c 各情報把握シートへの回答者(ケース 3)

親子通園施設 各情報把握シートへの回答者	
医学的診断シート	主治医
健康関連情報 記入欄 A	保護者に聞き取り (放デイ事業所)
健康関連情報記入欄 B 1	なし
活動と参加	支援チームメンバー&情報把握分担表
環境因子	支援チームメンバー&情報把握分担表
支援対象者情報	保護者に聞き取り (放デイ事業所)

表 5 - 3 活動と参加の役割分担表(ケース 1 ~ 3)

【活動と参加】 領域一覧 (章)	ケース1	ケース 2, 3
内容	担当	担当
第 1 章 学習と知識の応用	幼稚園、児発	小学校、放デイ
第 2 章 生活の中で求められる課題	保護者聞き取り	小学校、放デイ
第 3 章 コミュニケーション	児発	小学校、放デイ
第 4 章 運動・移動	児発	放デイ
第 5 章 セルフケア	保護者聞き取り	小学校、放デイ
第 6 章 家庭生活	保護者聞き取り	放デイ
第 7 章 対人関係	児発	小学校、放デイ
第 8 章 遊び、教育、仕事や経済活動	幼稚園、児発	小学校、放デイ
第 9 章 コミュニティライフ・社会生活・市民生活	保護者聞き取り	放デイ

#### イ 支援検討項目についての絞り込み

I C F 情報把握・共有システムは協力児の状態像を多くの視点で包括的に捉えることができるが、同時に、支援検討の対象となる項目数も多くなる。それらすべての項目に支援を検討することは、支援計画の構築及び実施において現実的な選択とは言えない。そのため、本事業では、支援会議に先立って、支援を検討する項目を絞り込む作業を行った。

活動と参加シートによる把握情報から得られた「支援の修正」の項目を確認し、以下の、a, b, c, d の 4 つの視点で、支援検討項目の絞り込みを行った。なお、これら 4 つの視点は、絞り込みの大凡の手順を現しているが、協力児の状況に応じて手順を前後するなどして、調整を図った。

- a 支援の修正によって生活機能の改善が見込めそうな項目を選択する。
- b 支援の修正は難しいが生活機能の改善が強く求められる項目を選択する。  
※a、bについては、発達段階を踏まえて考慮する。(同じ章でできていないところは、発達の基礎になる部分から選択する。関連する章についても確認し、発達の基礎となる部分から選択する。)
- c 絞り込み項目構成は「aを多く、bを少なく」して支援修正の負担を大きくしすぎない。
- d 総項目数については、支援会議の時間を考えまずは少なめ(2項目程度)に設定した。

なお、ケース1は、支援者が全員ICF研修を受講しており、絞り込み手順について理解していたため、全員の投票で決めた。ケース2, 3は、相談支援専門員と放課後等デイサービスの支援員とで上記の方法を用い、項目を決定した。

ウ 第1回支援会議の事前準備(支援会議資料の作成)

図5-3に示すのは、支援検討対象となった1つの項目に関わる支援会議資料の一例である。本資料は、支援会議を実施し、支援方法を導出し、記載したものとなっている。なお、支援会議資料は、児発または放デイ事業所と相談支援専門員が作成した。

項目タイトル	選択理由	補足情報	具体的な手がかり	課題	支援の方向性	支援方法案	いつ・誰が
項目15 d240 ストレスを伴う作業(活動)遂行	この項目の内容が、本人の日常生活での活動や行動の全般に関連していたり、影響してくるものと思われるため。	①やりたくないことを強制されたり、行動を制止されると大声を出し寝転ぶ。 ②仮面ライダーなど好きなキャラクターを近くに置いたり、好きなフレーズ、動きを繰り返すことで取り組みやすい状況を作る。 ③気持ちの切り替えのきっかけとなる	【活動と参加】 項目1 d110, d115 自分の興味がある物なら、長い時間見たり、聞いたりできる。 項目6 d137b 自分の嫌な事や嬉しいことは分かる。 項目10 d160 大勢の中で特定の話を聞くのは難しい。注目するときは動きがある時で、注目しない時は動きがない時。 D161 制作・片付け・給食を待つなど出来る時と出来ない時がある。同じことでも気分やコンディションによってやらないことがある。 項目14 d230a 朝の準備は来てすぐできる。視覚で「1」と示しながら伝えることで取り組む順番がわかるようになってきている 項目17 d310a 好きな遊び(ライダーフィギュア、お絵かき等)がやりたい!等欲求が強い時ほど、周りからの「お仕度をします。」等の別の行動にうつせる。 項目21 d331 興奮すると(楽しい・怒る等様々)大きな声ができる。	・制限や制止をされると、ワーッとになってしまいそれ以上次の作業(活動)に進めていけなくなってしまう。 ・ワーッとになってしまった時には「本人も」「周りも」どうしたらいいかわからず、手がつけられない。 ・ストレスと思われるものが好きな活動に変化したり、本人のストレスとなるものはそもそも何なのか分かりづらい。 ・気持ちの切り替えスイッチが切りづらい	・本人がストレスに感じるものが分かりづらい。言葉での表出がない分、本人の様子や行動を見て周囲が読み取る必要がある。 ・本人は好きな事、楽しいことを見つけたら。工夫もできる。	①興味のある物を通して、作業や活動を行っていく。少しずつ取り組める時間を伸ばしていく。 ②我慢して取組めたら「楽しいことが待っていた!!」経験を積み上げる。 →遊びの中で「待つ」部分を短時間入れてみる。 →食事やおやつ準備時間を待てれば、好きなものが食べられる。 ③活動の参加人数を少しずつ増やす。 ④ジュスチャーなどを用いて本人の理解を促す(ちょっと待って→どれだけ待つ?の理解につなげる) ⑤家庭、幼稚園、ぶちま〜で、統一したご褒美(ほめること)を実施	
	a	b	c	d	e	f	

図5-3 支援会議資料の一部(ケース1)

以下、支援会議資料の作成手順を記載する。なお、下線部分と各手順のアル

ファベットは図 5 - 3 の記載欄タイトルおよび図下部の丸囲みアルファベットと対応している。

- a 支援検討対象の項目タイトルと選択理由を記入する。
- b 絞り込んだ項目の補足情報(クラウドに入力されている補足情報欄の記載内容)を支援会議資料に記入し、支援修正に必要な基本情報を確認する。図 5 - 3 に示すように、①困難の状況、②支援の内容、③支援の効果を記載するが、③の支援の効果は十分な結果が得られていない。そのため、次の c の手順で支援を修正するための手がかりを得ていく。
- c 支援修正アイデアを得るための具体的な手がかりの検討

支援検討対象の項目内容と関連する「活動と参加」および「環境因子」の他の項目から支援のヒントを探す。具体的な検討手順例を図 5 - 3 の内容に沿って、以下に示す。

(a) 活動と参加シートの把握情報については、「ストレスを伴う作業(活動)遂行」が関わる内容、

「ストレスを伴う作業(活動)遂行」とほぼ同じ機能が関係していると思われる内容なので、困難さの軽い、あるいは認められない項目をリストアップする。

(b) リストアップは「強み」や「支援の維持・調整」の項目から探して

いく。この手順を効率よく進めるために、活動と参加の把握情報を展開した整理表で、本児の強みやできている部分にマーカーなどでチェックをしておく。また、その他の項目にも手がかりが記載されている場合があるので、確認していく。

(c) リストアップした項目の補足情報を項目番号と合わせて具体的な手がかり欄に記載する。リストアップした項目の補足情報に記載されている支援の内容や記載エピソードから当該項目がよい状態にある理由を検討し、支援のヒントや手がかりとなる内容を確認する。

(d) 「環境因子シート」の把握情報については、支援修正項目の達成に好影響や悪影響をもたらす「環境因子」項目の確認をし、それらの項目について好影響因子の提供あるいは悪影響因子の除去・低減を検討する。また、それに関連する「周囲の人たち」項目については、助言あるいは傾聴などのアプローチを検討する。

d 上記のプロセスを経た後に、支援検討対象となった項目に対する課題と支援の方向性を確認する。

e 支援検討対象となった項目に対する支援方法（案）を、(b)、(c)での検討をベースに考案していく。

その際、医学的診断シート、健康関連情報シートの内容も参考にした。参考手順は以下のとおり。

- ① その支援修正、支援考案項目の課題を具体的な生活エピソードとして記述する。
- ② その生活エピソードと障害特性の関連の有無を検討する。
- ③ 関連ありの場合、障害特性に適した支援方法の利用可能性を検討する。

f 「いつ・誰が」の欄はこの時点では空欄で記載なし。

## エ 第1回支援会議の開催および支援計画の検討

### (7) 支援会議開催状況

表5-4に3名の協力児に関わる支援会議の詳細を示す。支援会議には、支援チームメンバーに加えて、学校教育課や児童クラブ支援員、さらに協力児の保護者も参加した。検討項目数は1項目で、支援会議の所要時間は1時間30分～2時間であった。

	ケース1	ケース2	ケース3
情報収集時期	令和元年7月中旬～8月中旬	令和元年7月中旬～8月中旬	令和元年7月中旬～8月中旬
支援案等会議資料作成	9月上旬	9月上旬	9月上旬
開催時期	令和元年9月24日	令和元年9月26日	令和元年9月17日
参加者	保護者(母親)、相談支援専門員、児童発達支援事業所児発管、保育士、幼稚園長、幼稚園教諭、福祉課	保護者(母親)、相談支援専門員、放課後等デイサービス理事、小学校教諭、児童クラブ支援員、福祉課	保護者(母親)、相談支援専門員、放課後等デイサービス理事、小学校教諭、福祉課、(オブザーバー：学校教育課)
所要時間	2時間	1時間半	1時間45分
検討項目数	1項目	1項目	1項目

表5-4 3名の協力児にかかわる支援会議の詳細

## (イ) 会議の進め方

支援会議参加者は、事前に医学的診断、健康関連情報、活動と参加、環境因子、支援対象者情報の全ての情報を確認した。また、支援会議において初めに情報共有フォーマットで協力児の状況の共有を行い、その後支援会議資料に基づき協議した。

支援会議は、図5-3に例示したものと同様の支援会議資料に基づいて、支援会議資料の内容を確認しつつ、支援会議資料作成時点と支援会議開催時点の間に観察された協力児の発達上の変化を補足する形で開催された。支援会議では、図5-3の最右欄にある「いつ・誰が」への記載内容を決定し、支援チームメンバーの責任に基づいて支援を実行できることを保障した。以下、支援会議を進める手順を記載する。なお、各手順のアルファベットは図5-3の記載欄タイトルおよび図下部の丸囲みアルファベットと対応している。

(a) 検討項目、選択理由の確認

(b) 補足情報から支援会議までの変化の確認

補足情報入力時点から支援会議開催までに1か月ほど経過しているため、その間の変化がみられれば報告し共通理解をする。

また、うまくいった時、いかなかった時の理由についての意見交換を参加者で行う。

(c) 「具体的な手がかり」に対する質疑、具体的な手がかりの追加

項目cの「具体的な手がかり」について、うまくいった（できる）時、うまくいかなかった（できない）時の理由について参加者で意見交換する。

(d) 課題、支援の方向性に関する検討

(e) 支援案についての検討、支援案の追加

(f) いつ・誰が実施するかを決定

以上の手順で進めた支援会議の内容は、第6章モデル事業の成果と考察の「支援会議の議事録内容の分析」に示す。

図5-4に示すのは、支援会議で検討され確定した支援方法および支援方法の実施をいつ・誰が行うか、である。下線部分は支援会議で新たに追加された支援内容である。

支援方法	いつ・誰が
①興味のある物を通して、作業や活動を行っていく。少しずつ取り組める時間を伸ばしていく。 ②我慢して取組めたら「楽しいことが待っていた！！」経験を積み上げる。 →遊びの中で「待つ」部分を短時間入れてみる。 →食事やおやつの準備時間を待てれば、大好きなものが食べられる。 ③活動の参加人数を少しずつ増やす。 ④ジェスチャーなどを用いて本人の理解を促す(ちょっと待って→どれだけ待つかの理解につなげる) ⑤家庭、幼稚園、ふちま〜るで、統一したご褒美(ほめること)を実施 <u>→1つ1つ、できていることを具体的にほめる。</u> <u>→目線を合わせ、「できたね」タッチなどで触れ合う。</u> ⑥事前予告をする。 <u>→初めての事は口頭説明に視覚(画像実物)も付け足す。</u> ⑦取り掛かりから強制せず、支援者がゆとりを持って接する。 ⑧初めての場所や初めての事は、まず本児の行動に合わせて支援者が動く。	①から⑧保護者、園、事業所

図5-4 支援会議で検討され確定された支援方法

#### オ 支援計画の実施とICFツールによる情報の再把握と再共有

第1回支援会議の支援計画に基づき、学校や幼稚園、福祉サービス事業所、家庭等において、支援会議で確定した支援方法を実施した。支援実施後の協力児の変化を把握し、支援をPDCAサイクルに載せていくため、情報の再把握・再共有を実施した。

情報の再把握・再共有の手順は、1回目の情報把握・共有と同じである。

#### カ 第2回支援会議の事前準備

##### (ア) 第2回支援会議までの事前準備経過

表5-5に3名の協力児の1回目と2回目の支援会議の経過を示す。

表 5 - 5 3名の協力児にかかわる第2回支援会議の経過

	ケース1	ケース2	ケース3
1回目情報収集時期	令和元年7月中旬～8月中旬	令和元年7月中旬～8月中旬	令和元年7月中旬～8月中旬
支援案等会議資料作成	9月上旬	9月上旬	9月上旬
第1回支援会議開催時期	令和元年9月24日	令和元年9月26日	令和元年9月17日
2回目情報収集時期	令和元年12月下旬～令和2年1月中旬	令和元年12月下旬～令和2年1月中旬	令和元年12月下旬～令和2年1月中旬
支援案等会議資料作成	令和2年2月上旬	令和2年2月上旬	令和2年2月上旬
参加者	保護者(母親)、相談支援専門員、児童発達支援事業所児発管、保育士、幼稚園長、幼稚園教諭、福祉課、(オブザーバー：こども課指導主事)	保護者(母親)、相談支援専門員、放課後等デイサービス理事、小学校教諭、児童クラブ支援員、福祉課、(オブザーバー：学校教育課)	保護者(母親)、主治医、相談支援専門員、放課後等デイサービス理事、小学校教諭、学校教育課、保健師(オブザーバー：企画・推進委員長、学校教育課)
所要時間	1時間半	1時間半	1時間45分
検討項目数	1項目	1項目	2項目

(イ) 第1回支援会議後、第2回支援会議に向けた作業

- ①第1回支援会議で決定した支援を実施しつつ、ICFシステムによる情報把握と共有を進める。
- ②第2回支援会議に向けて、支援方法を考案した支援検討対象の項目及びその他の項目で、児の状態に変化のあった部分の補足情報を更新する。
- ③第2回支援会議資料を作成する。

図5-5に示すのは、第2回支援会議資料である。資料は「第1回支援会議後の支援実施の経過中に把握された情報と新たな手がかり」と「1回目に立てた支援の実施結果と支援の方向性・修正案」の2つから構成されている。なお、各手順のアルファベットは図5-5の記載欄タイトルおよび図下部の丸囲みアルファベットと対応している。

- (a) 支援検討対象項目の補足情報について前回に付加する内容を確認・補足して、今回の補足情報欄に記載する。
- (b) 支援検討対象の項目の支援に関連する具体的な手がかりを、その他の



- ⑥ 参加者全体うまくいく条件、うまくいかない条件を共有する。
- ⑦ 提出された支援案について、案の修正や追加等を検討する。

ク うまくいく条件、うまくいかない条件

図5-6に示すのは、第2回支援会議で検討されたケース1のうまくいく条件、うまくいかない条件の一覧である。

うまくいく条件	うまくいかない条件
<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きなこと(粘土や絵)を取り入れる</li> <li>・継続する、繰り返す</li> <li>・事前予告</li> <li>・<u>支援者がゆとりを持って接する</u></li> <li>・具体的に1つずつほめる</li> <li>・楽しいと思うことを最初にやる</li> <li>・初めてのことは視覚情報を取り入れる</li> <li>・活動の流れを決めておく</li> <li>・みんなと同じ空間で過ごす</li> <li>・全体の流れを見せる</li> <li>・好きすぎるものは、事前にしまっておく</li> <li>・本児のタイミングでやる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・強制する</li> <li>・制止する</li> <li>・知らない状況</li> <li>・初めてのこと</li> <li>・見通しがもてないこと</li> <li>・怒られた時</li> <li>・予測がたたない時(事前予告がない)</li> <li>・支援者とやりとりが少ない時</li> <li>・支援者がイライラしている時</li> </ul>

※支援者のゆとりを持つことがとても効果があったとの意見。また、これは本児のどの支援でも共通する事項であると参加者全員の見解。

図5-6 第2回支援会議で検討されたうまくいく条件、うまくいかない条件

ケ 第2回支援会議の参加者の感想(一部抜粋)

相談支援専門員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>すごく効果が出た。他の“活動と参加”の項目でも効果が出たことが多くあった。</u>支援会議で主語が本人に切り替わったので支援がよくなった。当初は支援者が困っていたから本児をどうしようとなっていた。<u>本児が不安にならないようにという、意思統一ができたのが大きい。</u></li> </ul>
---------	--

<p>児童発達支援</p>	<p>・本児はもともとやれることがいっぱいあった。<u>支援者側ができる場面を共有し、支援方法を共有することがよかった。</u>本児に寄り添って活動することもよかった。</p>
<p>幼稚園</p>	<p>・担当した当初はどのように対応してよいかわからなかった。最初は、「年長なんだから」と考えてしまっていた。支援会議で本児主体なんだと気づき自分の心のゆとりにつながった。<u>本児のことも、自分のこともプラス思考で前向きに考えられるようになった。</u>効果が絶大であった。</p>
<p>幼稚園長</p>	<p>・<u>加配の先生は、自分が支援しなければという孤独感がある。</u>保護者も事業所の支援者も同様だと思う。みんな同じ悩みを抱えているが、<u>一番困っているのは本児ということを共通理解</u>できたことが、心に余裕をもてたのではないか。<u>1つ1つ検証し明確になり、支援方法も統一されたのでこれだけ効果が出たのだと思う。</u></p>
<p>こども課(指導主事)</p>	<p>・加配の先生は一生懸命であるが故に、無理をさせてしまいがちである。<u>このような会議で“子ども主体”と気づけ、支援にゆとりをもってできる人が増えてくるといいと思う。</u></p>
<p>保護者</p>	<p>・<u>先生方のゆとりと、スキルアップが本児にとっても良い影響を与えた</u>と思う。子どものことをとても理解していただけて、ありがたい取り組みであった。</p>

図5-7 第2回支援会議の参加者の感想（一部抜粋）

(5) モデル事業の成果を検証する方法

ア ICF研修にかかわる質問票

ICF研修に対する地域支援体制づくりにおける活用の有用性を評価することを目的として、研修参加者を対象に第2回と第3回終了後に質問票を実施した。

碧南市 ICF 研修 第2回研修会(190822) 事後アンケート	
<u>1. 補足情報の書き方について</u> (あてはまる□にチェック☑願います)	
Q 1) 曖昧に補足情報を書くのではなく、具体的な情報を書くことの大切さがわかった。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 2) ネガティブな(マイナス視点の)書き方ではなく、できるだけポジティブに(プラス視点で)書くことの大切さがわかった。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 3) 情報を具体的に書くことは支援会議の効率化につながると思う。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 4) 情報を具体的に書く方法、ポジティブに表現する方法がわかった。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 5) 情報を具体的に書くこと、ポジティブに表現することは、支援の検討に有用だと思う。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
<u>2. 支援検討対象の絞り込みについて</u> (あてはまる□にチェック☑願います)	
Q 1) 研修で学んだ支援検討対象項目の絞り込み方法は効率的で、使いやすいと思う。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 2) 研修で学んだ支援検討対象項目の絞り込み方法はチームメンバーの意見を公平に反映できると思う。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
<u>3. グループでの支援会議資料の作成について</u> (あてはまる□にチェック☑願います)	
Q 1) 子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 2) 文字資料だけだったが、実際の子どもの姿をイメージして具体的な支援を考えられた。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない
Q 3) 文字資料だけだったが、イメージした子どもの姿はチーム内でほぼ同じだった。	<input type="checkbox"/> そう思う ----- <input type="checkbox"/> 少し思う ----- <input type="checkbox"/> あまり思わない ----- <input type="checkbox"/> 思わない

図5-8 a ICF研修第2回研修会 参加者事後アンケート (表)

Q 4) 子どもの日常生活の中にある支援の手がかりを探す個人作業はとても大変だった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 5) 各メンバーが見つけた手がかりを出し合うことは新たな発見につながった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 6) 具体的な手がかりから支援を考えるグループ作業は楽しくできた。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 7) 具体的な手がかりから支援を考えるグループ作業は支援スキルの向上につながる。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 8) 具体的な手がかりから支援を考えるグループ作業は支援者の連携を高めると思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 9) 医学的診断情報シートは子どもの姿のイメージ作りと支援方法の検討に有用だった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 10) 健康関連情報シートは子どもの姿のイメージ作りと支援方法の検討に有用だった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 11) 今回の方法で検討された支援方法は、子どもの実際の生活にフィットすると思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 12) 今回の方法で行う支援会議は、実際の支援現場でも実施できると思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

※ Q 12の回答について、そのように考えた理由を簡単にお書きください。

※ 「思わない、あまり思わない」と回答された方は、現場での実施を可能とするために解決すべき課題を合わせて記載下さい。

図 5 - 8 b I C F 研修第 2 回研修会 参加者事後アンケート (裏)

>>あてはまる□にチェック☑、四角枠には自由記述をお願いします<<

1. 他機関との“いつもの支援会議”を振り返る

Q 1) 振り返りを通じて、支援会議の改善すべき点がわかった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 2) 振り返りを通じて、支援会議改善のために参加者はどうすればいいかがわかった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 3) あなたは“いつもの支援会議”をもっと良いものにしていくべきだと考えますか？

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

2. ミニシンポジウムについて

Q 1) ICF システムによる支援には、これまでの支援とはちがう良さがあると思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q1-a) Q1 の質問で [そう思う・少し思う] と回答した方

ICF システムによる支援の良さと感じたことを簡単にお書き願います。

--

Q 2) ICF システムによる支援会議を効果的に進める際の課題がわかった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 3) ICF システムによる支援会議を効果的に進める際の課題の解決策がわかった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 4) 会議進行のテクニックは、効率的・効果的な支援会議の実現に有用だと思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 5) 「支援計画の話し合いに役立つ支援会議資料」がどのようなものがわかった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

3. 第 2 回支援会議の実施方法について (あてはまる□にチェック☑願います)

Q 1) 第 2 回支援会議をどのように進めていくかがわかった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 2) 第 1 回支援会議の結果を第 2 回支援会議で振り返ることは支援に有用だと思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 3) 支援がうまくいく条件/いかない条件を考えることは、対象児の理解につながる。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 4) 支援がうまくいく条件/いかない条件を考える個人作業はとても大変だった。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 5) 支援がうまくいく条件/いかない条件を考えるグループ作業は支援連携につながる。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 6) 支援がうまくいく条件/いかない条件を考えるグループ作業は楽しくできた。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 7) 支援がうまくいく条件/いかない条件を考えるグループ作業は支援スキルの向上につながる。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 8) 第 2 回支援会議の支援方法の修正プロセスは、子どもの実生活の様子を反映できるやり方だと思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

Q 9) 今回の方法で行う第 2 回支援会議は、実際の支援現場でも実施できると思う。

そう思う -----  少し思う -----  あまり思わない -----  思わない

※ Q9の回答について、そのように考えた理由を簡単にお書きください。

※ 「思わない、あまり思わない」と回答された方は、現場での実施を可能とするために解決すべき課題を合わせて記載下さい。

図 5 - 9 b I C F 研修第 3 回研修会 参加者事後アンケート (裏)

## イ ICF 情報把握・共有システムの活用にかかわる質問票

ICF 情報把握・共有システムに対する地域支援体制づくりにおける活用の有用性や実践支援へのインパクトを評価することを目的として、事業参加者を対象に質問票を実施した。以下、今回の事業で実施した質問票を図 5-10 から図 5-19 b に示す。

ICF 情報把握・共有シートの質問票には記入者用と閲覧者用があるが、以下に示すのは記入者用である。閲覧者用の質問票では、記入の労力に関する質問を伏せているが、その他の質問項目は記入者用と同じである。



A0-2. (t-member) 「支援チーム形成・パート分担・入力チェック」質問紙

(チームメンバー用)

回答者記号(  )

>> 回答前に確認して下さい<<

- a) 本評価シートにかかわる支援チーム形成は  初回評価  再評価 のチーム形成 です。  
 b) 情報記入の方法は  自分で記入した  インタビューに答えた。

1. あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。
  - 1) 支援チーム内の役割は  チームメンバー です。 (確認のためチェック願います)
  - 2) 立場は 当事者 :  家族  本人  
 支援者 :  医師  コメディカル  福祉職  教育職  その他  
 (支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)
2. 支援チーム全体で支援対象児者の支援関連情報を把握・共有することについて
  - 1) 支援チームをリーダーとメンバーで構成することは連携支援の実現に効果的だと思いますか? 該当する□にチェック☑して下さい。  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない
  - 2) 支援チームで分担して支援関連情報を把握することは連携支援の実現に効果的だと思いますか? 該当する□にチェック☑して下さい。  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない
3. 「活動と参加」および「環境因子」の入力パート分担について該当する□にチェック☑して下さい。
  - 1) 「活動と参加」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか?  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない
  - 2) 「環境因子」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか?  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない
  - 3) 情報入力の方法(回答前確認b)で回答した方法)は自分にあっていると思いますか?  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない
4. 個人情報に留意しながら情報を入力することについて
  - 1 a) 個人情報の混入などを回避しながらの入力作業はかなり労力を使いましたか?  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない
  - 1 b) 「そう思う・多少そう思う」と回答された方へ、個人情報の混入を回避することが難しいと感じた入力場面を具体的に記載してください。
  - 2) リーダーが個人情報等の不適切情報の最終チェックをすることは必要不可欠だと思いますか?  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

図 5 - 1 1 支援チーム形成・パート分担・入力チェック チームメンバー用

A1rev3. 「医学的診断」シートの記入者への質問票

(シート記入者用)

回答者記号 ( )

1. あなたの役割と立場について該当する□にチェック☑して下さい。
  - 1) 支援チーム内の役割は  チームリーダー  チームメンバー
  - 2) 記入された医師の診療科を記載願います。 → ( )
2. 「医学的診断」シートへの記入について該当する□をチェック☑して下さい。
  - 1) シートの記入にどの程度の労力が必要だったかを5段階(少ない～多い)で評価して下さい。  
 少ない  -----  -----  -----  -----  多い
  - 2) シートの記入に大凡どの程度の時間を必要としたかを以下に沿って評価して下さい。  
15分以内      15～30分      30～45分      45～60分      60分以上  
 -----  -----  -----  -----
3. 「診断名」の記入欄について該当する□をチェック☑して下さい。
  - 1) 「精神科疾患」と「精神科以外の疾患」の両方があり、それぞれに「主診断」と「併存診断」の記入欄があることで、他分野(福祉、教育、労働など)の支援者や本人・家族に対して対象児者の医学的状态をより正確に伝えることができる。  
 そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない
  - 2) 「精神科疾患」と「精神科以外の疾患」の両方があり、それぞれに「主診断」と「併存診断」の記入欄があることで、よりよい支援計画につながる情報を支援者や本人・家族に提供できる。  
 そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない
  - 3) 「精神科疾患」と「精神科以外の疾患」の両方があり、それぞれに「主診断」と「併存診断」の記入欄があることで、必要な診療科間や医療機関間の連携を促進できる。  
 そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない
4. 「医師の所見」の記入欄について該当する□をチェック☑して下さい。
  - 1) 「医師の所見」への記入内容を通じて、対象児者の医学的状态を他分野(福祉、教育、労働など)の支援者や本人・家族により正確に伝えることができる。  
 そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない
  - 2) 「医師の所見」への記入内容を支援チームや本人・家族が共有することは、よりよい支援計画の構築につながる。  
 そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない
  - 3) 前問で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
どのような点で支援計画がさらによくなると思うか、具体的に記載下さい。

図 5 - 1 2 a 「医学的診断」シートの記入者への質問票 (表)

5. 「医学的治療方針」の記入欄について該当する□をチェック☑して下さい。

1) 「医学的治療方針」への記入内容によって、対象児者の医学的状态を他分野（福祉、教育、労働など）の支援者や本人・家族により正確に伝えることができる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

2) 「医学的治療方針」への記入内容を支援チームや本人・家族が共有することは、よりよい支援計画の構築につながる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

3) 前問で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。

どのような点で支援計画がさらによくなると思うか、具体的に記載下さい。

6. 現在および今後の連携支援について、以下の質問の該当する□をチェック☑して下さい。

1) 本シートを活用することで、医療と他分野がもっと効果的に連携していける。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

2) 本シートを活用することで、支援対象児者の医学的状态を、支援者や家族がより理解しやすいように伝えていくことができる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

3) 本シートを活用することで、現在および今後の支援計画はさらによりよい支援計画となっていく。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

4) 本シートを活用することで、今後、主たる医療機関が変更されたとしても、医療情報の引継ぎが円滑になされていく。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

5) 本シートを活用することで、年金申請など福祉サービスに関する手続の作業労力が軽減される。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

6) 本シートの活用の際に把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

図 5 - 1 2 b 「医学的診断」シートの記入者への質問票（裏）

(シート記入者用)

## A2rev4. 「健康関連情報」シートの記入者への質問票

回答者記号 ( )

>>回答前に確認して下さい<<

わたし(回答者)が記入した健康関連情報シートの記入欄は

A(健診情報等) B1(エピソード) B2(評価結果) です。

(注：質問2～質問5は上記のチェックに応じて、あなたが記入した記入欄の質問にのみ回答して下さい)

1. あなたの役割と立場について該当するにチェックして下さい。

1) 支援チーム内の役割は チームリーダー チームメンバー

2) 立場は 当事者 : 家族 本人  
支援者 : 医師 コメディカル 福祉職 教育職 その

他

(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください: )

2. 「健康関連情報」シートの記入にかかる労力について該当するをチェックして下さい。

1) 情報記入にどの程度の労力が必要だったかを5段階(少ない～多い)で評価して下さい。

・記入欄 A	<input checked="" type="checkbox"/> 少ない	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> 多い				
・記入欄 B1	<input checked="" type="checkbox"/> 少ない	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> 多い				
・記入欄 B2	<input checked="" type="checkbox"/> 少ない	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> 多い				

3. 記入欄 A (健診や医療受診に関する情報) について該当するをチェックして下さい。

(注：回答者をご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください)

1) 記入欄 A への記入内容によって、対象児者(あるいは自分自身)の支援に必要な情報を支援者に伝えることができる。

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

2) 前の質問 1) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。

支援者に特に伝えたい「記入欄 A の記入内容」に該当するをチェックして下さい。

幼年期 (0～4 歳)  少年期 (5～14 歳)  青年期 (15～24 歳)

壮年期 (25～44 歳)  中年期 (45～64 歳)  老年期 (65 歳以上)

3) 記入欄 A への記入内容を支援チームが共有することは、よりよい支援計画の構築につながる。

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

4) 前の質問 1) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。

どのような点で支援計画がさらによくなると思うか、具体的に記載下さい。

図 5 - 1 3 a 「健康関連情報」シートの記入者への質問票 (表)

4. 記入欄 B1（専門的評価が必要と思われるエピソード）について該当する□をチェック☑して下さい。（注：回答者がご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください）

1) 記入欄 B1 への記入内容によって、対象児者(あるいは自分自身)の困難性にかかわるエピソードを忘れることなく専門家に伝えることができ、専門的評価の確実な実施につながる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

2) 記入欄 B1 への記入内容を支援チームが共有することは、よりよい支援計画の構築につながる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

3) 前の質問 1) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。

どのような点で支援がさらによくなると思うか、具体的に記載下さい。

5. 記入欄 B2（専門職による評価結果と所見）について該当する□をチェック☑して下さい。

1) 記入欄 B2 への記入内容によって、対象児者(あるいは自分自身)の障害特性、困難性に影響するさまざまな症状や機能不全などを他の支援者や本人・家族に伝えることができる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

2) 記入欄 B2 への記入内容を支援チームが共有することは、よりよい支援計画の構築につながる。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

3) 前の質問 1) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。

どのような点で支援計画がさらによくなると思うか、具体的に記載下さい。

6. 現在および今後の連携支援について、以下の質問の該当する□をチェック☑して下さい。

1) 本シートを活用することで、本人・家族や支援者の気づきが忘れられることなく確実に専門的評価につながっていく。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

2) 本シートを活用することで、対象児者(あるいは自分自身)の障害特性、困難性に影響するさまざまな症状や機能不全などを関係者間で共有することが効率よく実現していける。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

3) 本シートを活用することで、現在および今後の支援計画はさらによりよい支援計画となっていく。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

図 5 - 1 3 b 「健康関連情報」シートの記入者への質問票（裏）



7) 前の質問(6)で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
どのような点で現在および今後の支援計画がさらによくなっていくと思うか、具体的に記載下さい。

--

8) 支援に携わる人たちが、シートで把握された情報全体を共有すれば、多職種連携による支援が効果的に実現されていく。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

9) 前の質問(8)で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
多職種連携による支援が効果的に実現されていくと思う理由を具体的に記載下さい。

--

10) 本シートによる情報把握と引き継ぎが早期から継続できれば、二次障害につながる通称不全を事前に回避していただけるだろう。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

11) 前の質問(10)で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
通称不全の事前回避がどのような形で実現されていくと思うか、具体的に記載下さい。

--

12) 本シート全体による情報の把握は、担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)に要した労力に見合うものでしたか?

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

13) 本シート全体による情報把握は発達障害への気づきにつながると感じますか?

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

14) 本シートの活用に関して把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

--

図5-14b 「活動と参加」シートの記入者への質問票(裏)

(シート記入者用)

#### A 4 rev4. 「環境因子」シートの記入者への質問票

回答者記号 ( )

>> 回答前に確認・チェック☑して下さい<<

- a) 情報記入の方法は  自分で記入した  インタビューに答えた。  
b) わたくし(回答者)が実施した記入タイプは  初回実施  再実施 です。  
(注: 質問2はチェックに応じて、初回実施と再実施の両方またはいずれかに回答して下さい)

1. あなたの役割と立場について該当する☐にチェック☑して下さい。

- 1) 支援チーム内の役割は  チームリーダー  チームメンバー  
2) 立場は 当事者 :  家族  本人  
支援者 :  医師  コメディカル  福祉職  教育職  その他  
(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)

2. 「環境因子」シートの担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)にかかった労力について該当する☐にチェック☑願います。

1) 初回実施と再実施にどの程度の労力が必要だったかを5段階で「少ない～多い」評価して下さい。

- a) 初回実施  少ない  -----  -----  -----  -----  多い  
b) 再実施  少ない  -----  -----  -----  -----  多い

3. 「環境因子」シート全体による情報の把握について該当する☐をチェック☑して下さい。

(注: 回答者がご本人の場合には、「対象児者」を括弧内の「自分自身」と読み替えてください)

1) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活に影響する環境因子」があった。

- a) 「周囲の人たちにかかわる環境因子」について  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない  
b) 「製品と用具、自然環境、サービスにかかわる環境因子」について  
 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

2) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活しやすさにつながる環境因子」があった。

- そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

3) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)の生活しづらさにつながる環境因子」があった。

- そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

4) 本シートの活用で改めて気づいた「対象児者(自分自身)に必要な環境調整支援」があった。

- そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

5) 本シートによって把握された情報全体によって、現在および今後の支援計画はさらにより支援計画となっていく。

- そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない



裏面の質問に続けてお答え下さい

図5-15a 「環境因子」シートの記入者への質問票(表)

6) 前の質問 (5) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
どのような点で現在および今後の支援計画がさらによくなっていくと思うか、具体的に記載下さい。

7) 支援に携わる人たちが本シートで把握された情報全体を共有すれば多職種連携による支援が効果的に実現されていく。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

8) 前の質問 (7) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
多職種連携による支援が効果的に実現されていくと思う理由を具体的に記載下さい。

9) 本シートによる情報把握と引き継ぎが早期から継続できれば、二次障害につながる適応不全を事前に回避していけるだろう。

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

10) 前の質問 (11) で「そう思う」「多少そう思う」と回答された方にお尋ねします。  
適応不全の事前回避がどのような形で実現されていくと思うか、具体的に記載下さい。

11) 本シート全体による情報の把握は、担当部分の記入(あるいはインタビューへの回答)に要した労力に見合うものでしたか?

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

12) 本シート全体による情報把握は発達障害への気づきにつながると感じますか?

そう思う     多少そう思う     あまりそう思わない     そう思わない

13) 本シートの活用の際に把握された「改善すべき課題」があれば、具体的に記載下さい。

図 5 - 1 5 b 「環境因子」シートの記入者への質問票 (裏)

回答者記号( )

&gt;&gt;回答前に確認して下さい&lt;&lt;

本評価シートにかかわる支援チーム形成は  初回評価  再評価 のチーム形成 です。

1. あなたの役割と立場について該当する□にチェック回して下さい。

1) 支援チーム内の役割は  チームリーダー  チームメンバー です。2) 立場は 当事者 :  家族  本人  
支援者 :  医師  コメディカル  福祉職  教育職  その他  
(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)

2. 今回の支援チームで実施した支援会議におけるチーム協働について

1) あなたは自分の意見を十分に言えましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

2) 他の人たちはあなたの意見に十分に耳を傾けてくれましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

3) 同意できない意見に対してもお互い十分に耳を傾けていましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

4) ぶつかり合いや意見の食い違いを参加者全員で解消し、よい形にまとめあげることができていましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

5) 支援の方向性やアイデアについて、特定の人たちが自分たちの意見に頑なにこだわるということがありましたか？

 かなりあった  多少あった  あまりなかった  なかった

6) 支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

7) 支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

8) 本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

9) 本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

3. 支援計画の内容について

1) 支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

2) 支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

3) 支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

4) 支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

5) 本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？

 そう思う  多少そう思う  あまりそう思わない  そう思わない

図 5 - 1 6 「支援計画検討会議の質・チーム協働」の質問票

A8rev2. (team 共通)「支援計画の実行と結果」の質問紙

(チームリーダー・メンバー共通)

回答者記号( )

>>回答前に確認して下さい<<

本評価シートにかかわる支援チーム形成は  初回評価  再評価 のチーム形成 です。

1. あなたの役割と立場について該当するにチェック☑して下さい。

1) 支援チーム内の役割は チームリーダー チームメンバー です。

2) 立場は 当事者 : 家族 本人  
支援者 : 医師 コメディカル 福祉職 教育職 その他  
(支援者の方は職名(医師は診療科)を記載ください)

2. 支援計画の実行結果について

1 a) あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？

解決した 多少解決した あまり解決しなかった 解決しなかった

1 b) 「あまり解決しなかった・解決しなかった」と回答された方へ。

解決しなかった理由だと思われることを具体的に記載ください。

2 a) 支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？

改善した 多少改善した あまり改善しなかった 改善しなかった

2 b) 「あまり改善しなかった・改善しなかった」と回答された方へ。

改善しなかった理由だと思われることを具体的に記載ください。

3 a) 支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

3 b) 「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ

実行可能ではないと思った理由を具体的に記載して下さい。

4 a) あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

4 b) 「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ

実行可能ではないと思った理由を具体的に記載して下さい。



裏面の質問に続けてお答え下さい

図 5 - 1 7 a 「支援計画の実行と結果」の質問票 (表)

5 a) 設問4 a) で「あまりそう思わない・そう思わない」と回答された方へ。

支援計画の役割実行が難しくなった際に、チームの他のメンバーに相談したり助言を求めたりしましたか？

相談したり助言を求めたり → した しなかった

5 b) 「相談や助言を求めたりしなかった」と回答された方へ

その理由を具体的に記載して下さい。

--

6) 本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

7) 本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？

そう思う 多少そう思う あまりそう思わない そう思わない

図 5 - 1 7 b 「支援計画の実行と結果」の質問票（裏）

## ウ 事後アンケート（事業参加者）

事業に参加した支援者および保護者に対して、事業全体の経過を振り返っての事業に対する評価アンケートを実施した。アンケートは支援者用と保護者用を準備し、それぞれ、事業完了後の2月下旬から3月初旬に回答を求めた。

図5-18 a、bに支援者用のアンケートを、図5-19 a、bに保護者用のアンケートを示す。

ICFの活用したことでの変化等について(支援者用)	
職種：	
①ICFを活用したことで新たな発見はありましたか。	
ア 子どもに関すること	
⇒あり・なし	
⇒ありの場合 内容：	
⇒ありの場合 時期	
<u>a. それほどのタイミングですか（あてはまるもの全てに○をつけてください）</u>	
①情報を個人で収集した時	②全体の情報を紙ベースで見た時
③情報をもとに支援会議に参加した時	
<u>b. 上記の中で、一番気づきの大きかったタイミングはいつですか。</u>	
①情報を個人で収集した時	②全体の情報を紙ベースで見た時
③情報をもとに支援会議に参加した時	
イ 家族に関すること	
⇒あり・なし	
⇒ありの場合 内容：	
⇒ありの場合 時期	
<u>a. それほどのタイミングですか（あてはまるもの全てに○をつけてください）</u>	
①情報を個人で収集した時	②全体の情報を紙ベースで見た時
③情報をもとに支援会議に参加した時	
<u>b. 上記の中で、一番気づきの大きかったタイミングはいつですか。</u>	
①情報を個人で収集した時	②全体の情報を紙ベースで見た時
③情報をもとに支援会議に参加した時	

図5-18 a ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（支援者用：表）

② ICF を活用したことで、その後の自分の支援に変化がありましたか。

⇒あり・なし

⇒ありの場合 内容：

⇒ありの場合 時期

a. それはどのタイミングですか（あてはまるもの全てに○をつけてください）

①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時

③情報をもとに支援会議に参加した時期

b. 上記の中で、一番変化の大きかったタイミングはいつですか。

①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時

③情報をもとに支援会議に参加した時

③ 個別の支援計画への関わりについて

ア. ICF を活用することで、個別の教育支援計画、指導計画を作りやすくなると思いま  
すか。

はい⇒理由：

いいえ

イ. ICF を活用することで、個別の教育支援計画、指導計画がより具体的になると思い  
ますか。

はい⇒理由：

いいえ

④ ICF の活用の継続性について

ICF を支援の中で継続的に活用する必要があると思いますか

はい⇒理由：

いいえ

⑤ ICF の活用で得た本人、保護者、支援方法等の気づきを、他職員とも共有するにはどの  
ようにしたらよいと思いますか。

ア. 有効だと思うもの全てに○をつけて下さい。

①ICF 研修に参加 ②ICF の情報シートの共有 ③支援会議に参加

④支援会議結果の共有 ⑤その他（ ）

イ. 一番有効だと思うものに1つ○をつけて下さい。

①ICF 研修に参加 ②ICF の情報シートの共有 ③支援会議に参加

④支援会議結果の共有 ⑤その他（ ）

図5-18b ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（支援者用：裏）

ICFの活用したことでの変化について(保護者用)

①ICFを活用したことで新たな発見はありましたか。

ア 子どもさんに関すること

⇒あり・なし

⇒ありの場合 内容：

⇒ありの場合 時期

a. それはどのタイミングですか(あてはまるもの全てに○をつけてください)

- ①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時  
③情報をもとに支援会議に参加した時

b. 上記の中で、一番気づきの大きかったタイミングはいつですか。

- ①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時  
③情報をもとに支援会議に参加した時

イ ご自身も含めた家族に関することで、新たな発見はありましたか

⇒あり・なし

⇒ありの場合 内容：

⇒ありの場合 時期

a. それはどのタイミングですか(あてはまるもの全てに○をつけてください)

- ①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時  
③情報をもとに支援会議に参加した時

b. 上記の中で、一番気づきの大きかったタイミングはいつですか。

- ①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時  
③情報をもとに支援会議に参加した時

図5-19a ICF情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート(保護者用:表)

②ICF を活用したことで、子どもさんに関することで、ご自身の気持ちに変化がありましたか。

⇒あり・なし

⇒ありの場合 内容：

⇒ありの場合 時期

a. それはどのタイミングですか（あてはまるもの全てに○をつけてください）

①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時

③情報をもとに支援会議に参加した時

b. 上記の中で、一番変化の大きかったタイミングはいつですか。

①情報を個人で収集した時 ②全体の情報を紙ベースで見た時

③情報をもとに支援会議に参加した時

③ICF の活用の継続性について

ICF を支援の中で継続的に活用する必要があると思いますか

はい⇒理由：

いいえ

図 5 - 1 9 b ICF 情報共有・ツールを活用した支援の振り返りアンケート（保護者用：裏）

エ ICF 情報把握・共有システム活用前後での支援計画の比較(企画・推進委員)

ICF 情報把握・共有システムを活用する前後で、福祉サービス事業所の個別支援計画と相談支援事業所のサービス等利用計画・障害児支援計画が変化したか否かを検証するために、企画・推進委員を対象にアンケートを実施した。

図 5—20 に福祉サービス事業所の個別支援計画にかかわるアンケートを示す。

<b>企画・推進委員</b>
<b>事業所個別支援計画の ICF 活用前後評価</b>
<b>Aさん分</b>
ICF ツールを <u>活用する前の支援計画</u> と <u>活用した後の支援計画</u> を比較して、以下の質問項目にお答えください。
<b>具体的な支援内容の記載方法について</b>
Q1) 活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか?
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない
Q2) 活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか?
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない
Q3) 活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか?
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない
Q4) 活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか?
<input type="checkbox"/> 強く思う --- <input type="checkbox"/> 思う --- <input type="checkbox"/> 少し思う --- <input type="checkbox"/> あまり思わない --- <input type="checkbox"/> 思わない --- <input type="checkbox"/> まったく思わない

図 5—20 福祉サービス事業所個別支援計画の変化に関する質問票 (企画・推進委員用)

企画・推進委員は、福祉サービス事業所(児童発達支援、放課後等デイサービス)が作成した各協力児の活用前後の個別支援計画を閲覧した後、1人分ずつ図 5—20 のアンケート票に回答した。

図 5 - 2 1 相談支援事業所のサービス等利用計画にかかわるアンケートを示す。

**企画・推進委員**  
**サービス等利用計画・障害児支援利用計画案の ICF 活用前後評価**

今回、ICF 事業の対象となった 3 名の児童それぞれの障害児支援利用計画案について、全体を確認した上で ICF 活用前と活用後と比較して、以下の設問にご回答下さい。

①-a) ICF 活用後に具体的内容が増えた記載欄はありますか？（ある/ない 何れかに ）

ある                       ない → 設問 ①-b)に進んで下さい

↓

※それはどの記載欄ですか？ 該当する記載欄の番号（別紙番号見本を参照）をすべてチェック () して下さい。

①（利用者及びその家族の生活に対する意向）  
 ②（総合的な援助の方針）       ③（長期目標）       ④（短期目標）  
 ⑤（解決すべき課題 1）  ⑥（課題 2）       ⑦（課題 3）       ⑧（課題 4）  
 ⑨（支援目標 1）       ⑩（目標 2）       ⑪（目標 3）       ⑫（目標 4）  
 ⑬（本人の役割 1）       ⑭（役割 2）       ⑮（役割 3）       ⑯（役割 4）  
 ⑰（留意事項 1）       ⑱（留意事項 2）       ⑲（留意事項 3）       ⑳（留意事項 4）

①-b) ICF 活用後に具体的内容が減った記載欄はありますか？（ある/ない 何れかに ）

ある                       ない → 設問②-a) に進んで下さい

↓

※それはどの記載欄ですか？ 該当する記載欄の番号をすべてチェック () して下さい。

①（利用者及びその家族の生活に対する意向）  
 ②（総合的な援助の方針）       ③（長期目標）       ④（短期目標）  
 ⑤（解決すべき課題 1）  ⑥（課題 2）       ⑦（課題 3）       ⑧（課題 4）  
 ⑨（支援目標 1）       ⑩（目標 2）       ⑪（目標 3）       ⑫（目標 4）  
 ⑬（本人の役割 1）       ⑭（役割 2）       ⑮（役割 3）       ⑯（役割 4）  
 ⑰（留意事項 1）       ⑱（留意事項 2）       ⑲（留意事項 3）       ⑳（留意事項 4）

②-a) ICF 活用後に本人立場の表現が増えた記載項目はありますか？（ある/ない 何れかに ）

ある                       ない → 設問②-b) に進んで下さい

↓

※それはどの記載欄ですか？ 該当する記載欄の番号をすべてチェック () して下さい。

①（利用者及びその家族の生活に対する意向）  
 ②（総合的な援助の方針）       ③（長期目標）       ④（短期目標）  
 ⑤（解決すべき課題 1）  ⑥（課題 2）       ⑦（課題 3）       ⑧（課題 4）  
 ⑨（支援目標 1）       ⑩（目標 2）       ⑪（目標 3）       ⑫（目標 4）

図 5 - 2 1 a : 相談支援事業所のサービス等利用計画の変化に関する質問票（企画推進委員用：表）

②-b) ICF 活用後に本人立場の表現が減った記載項目はありますか？ (ある/ない 何れかに )

ある                       ない → 設問③-a) に進んで下さい



※それはどの記載欄ですか？ 該当する記載欄の番号をすべてチェック () して下さい。

- ① (利用者及びその家族の生活に対する意向)
- ② (総合的な援助の方針)                       ③ (長期目標)                       ④ (短期目標)
- ⑤ (解決すべき課題 1)    ⑥ (課題 2)    ⑦ (課題 3)    ⑧ (課題 4)
- ⑨ (支援目標 1)    ⑩ (目標 2)    ⑪ (目標 3)    ⑫ (目標 4)
- ⑬ (本人の役割 1)    ⑭ (役割 2)    ⑮ (役割 3)    ⑯ (役割 4)
- ⑰ (留意事項 1)    ⑱ (留意事項 2)    ⑲ (留意事項 3)    ⑳ (留意事項 4)

③-a) ICF 活用後に合理的配慮の内容が増えた記載項目はありますか？ (ある/ない 何れかに )

ある                       ない → 設問③-b) に進んで下さい



※それはどの記載欄ですか？ 該当する記載欄の番号をすべてチェック () して下さい。

- ① (利用者及びその家族の生活に対する意向)
- ② (総合的な援助の方針)                       ③ (長期目標)                       ④ (短期目標)
- ⑤ (解決すべき課題 1)    ⑥ (課題 2)    ⑦ (課題 3)    ⑧ (課題 4)
- ⑨ (支援目標 1)    ⑩ (目標 2)    ⑪ (目標 3)    ⑫ (目標 4)
- ⑬ (本人の役割 1)    ⑭ (役割 2)    ⑮ (役割 3)    ⑯ (役割 4)
- ⑰ (留意事項 1)    ⑱ (留意事項 2)    ⑲ (留意事項 3)    ⑳ (留意事項 4)

③-b) ICF 活用後に合理的配慮の内容が減った記載項目はありますか？ (ある/ない 何れかに )

ある                       ない → これで終わりです。ありがとうございました。



※それはどの記載欄ですか？ 該当する記載欄の番号をすべてチェック () して下さい。

- ① (利用者及びその家族の生活に対する意向)
- ② (総合的な援助の方針)                       ③ (長期目標)                       ④ (短期目標)
- ⑤ (解決すべき課題 1)    ⑥ (課題 2)    ⑦ (課題 3)    ⑧ (課題 4)
- ⑨ (支援目標 1)    ⑩ (目標 2)    ⑪ (目標 3)    ⑫ (目標 4)
- ⑬ (本人の役割 1)    ⑭ (役割 2)    ⑮ (役割 3)    ⑯ (役割 4)
- ⑰ (留意事項 1)    ⑱ (留意事項 2)    ⑲ (留意事項 3)    ⑳ (留意事項 4)

図 5 - 2 1 b : 相談支援事業所のサービス等利用計画の変化に関する質問票 (企画推進委員用 : 裏)

企画・推進委員は、相談支援事業所が作成した各協力児の活用前後のサービス等利用計画を閲覧した後、1人分ずつ図5-21のアンケート票に回答した。

オ 支援会議の議事録内容の分析

3ケースの第1回支援会議の議事録内容を表記し、分析した。

カ 企画・推進委員の評価（企画推進委員会での発言から）

第1回から第3回までの企画・推進委員会で議論された主な意見を会議の音声記録から抜粋した。

6 モデル事業の成果と考察

(1) ICF研修にかかわる質問票の結果

以下、実施した結果を示す。

ア 第2回ICF研修会事後アンケート

表6-1 第2回ICF研修会事後アンケート結果まとめ

設問1 補足情報の書き方について		1	2	3	4	中央値	回答数
選択肢 >>	1:そう思う 2:少し思う 3:あまりそう思わない 4:思わない	度数				中央値	回答数
	(1)	曖昧に補足情報を書くのではなく、具体的な情報を書くことの大切さがわかった。	19	1	0		
(2)	ネガティブな(マイナス視点)書き方でなく、できるだけポジティブ(プラス視点で)書くことの大切さがわかった。	19	1	0	0	1	20
(3)	情報を具体的に書くことは支援会議の効率化につながる。	20	0	0	0	1	20
(4)	情報を具体的に書く方法、ポジティブに表現する方法がわかった。	11	9	0	0	1	20
(5)	情報を具体的に書く方法、ポジティブに表現することは、支援の検討に有用だと思う。	17	3	0	0	1	20
設問2 支援検討対象の絞り込みについて		1	2	3	4	中央値	回答数
選択肢 >>	1:そう思う 2:少し思う 3:あまりそう思わない 4:思わない	度数				中央値	回答数
	(1)	研修で学んだ支援検討対象項目の絞り込み方法は効率的で、使いやすいと思う。	12	7	1		
(2)	研修で学んだ支援検討対象項目の絞り込み方法はチームメンバーの意見を公平に反映できると思う。	11	9	0	0	1	20
設問3 グループでの支援会議資料の作成について		1	2	3	4	中央値	回答数
選択肢 >>	1:そう思う 2:少し思う 3:あまりそう思わない 4:思わない	度数				中央値	回答数
	(1)	子どもの日常的で具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。	19	1	0		
(2)	文字資料だけだったが、実際の子どもの姿をイメージして具体的な支援を考えられた。	15	5	0	0	1	20
(3)	文字資料だけだったが、イメージした子どもの姿はチーム内ではほぼ同じだった。	13	6	0	0	1	19
(4)	子どものに日常生活の中にある支援の手がかりを探す個人作業はとても大変だった。	8	9	3	0	2	20
(5)	各メンバーが見つけた手がかりを出し合うことは新たな発見につながった。	17	3	0	0	1	20
(6)	具体的な手がかりから支援を考えるグループ作業は楽しくできた。	13	4	2	0	1	19
(7)	具体的な手がかりから支援を考えるグループ作業は支援スキルの向上につながる。	18	2	0	0	1	20
(8)	具体的な手がかりから支援を考えるグループ作業は支援者の連携を高めると思う。	16	4	0	0	1	20
(9)	医学的診断情報シートは子どもの姿のイメージ作りと支援方法の検討に有用だった。	8	8	2	0	2	18
(10)	健康関連情報シートは子どもの姿のイメージ作りと支援方法の検討に有用だった。	6	11	1	0	2	18
(11)	今回の方法検討でされた支援方法は、子どもの実際の生活にフィットすると思う。	6	14	0	0	2	20
(12)	今回の方法で行う支援会議は、実際の支援現場でも実施できると思う。	8	7	5	0	2	22

イ 第3回ICF研修会事後アンケート

表6-2 第3回ICF研修会事後アンケート結果まとめ

設問1		他機関との“いつもの支援会議”を振り返る															
選択肢	>>	1：そう思う		2：少し思う		1	2	3	4	中央値	回答数						
		3：あまりそう思わない		4：思わない								度数					
(1)		振り返りを通じて、支援会議の改善すべき点がわかった。										11	5	0	0	1	16
(2)		振り返りを通じて、支援会議改善のために参加者はどうすればいいかがわかった。										11	4	1	0	1	16
(3)		あなたは“いつもの支援会議を”をもっと良いものにしていくべきだと考えますか？										14	2	0	0	1	16
設問2		ミニシンポジウムについて															
選択肢	>>	1：そう思う		2：少し思う		1	2	3	4	中央値	回答数						
		3：あまりそう思わない		4：思わない								度数					
(1)		ICFシステムによる支援には、これまでの支援とはちがう良さがあると思う。										15	1	0	0	1	16
(2)		ICFシステムによる支援会議を効率的に進める際の課題がわかった。										8	8	0	0	1.5	16
(3)		ICFシステムによる支援会議を効率的に進める際の解決策がわかった。										6	10	0	0	2	16
(4)		会議進行のテクニックは、効率的・効果的な支援会議の実現に有用だと思う。										13	3	0	0	1	16
(5)		「支援計画の話し合いに役立つ支援会議資料」がどんなものかわかった。										12	3	1	0	1	16
設問3		第2回支援会議の実施方法について															
選択肢	>>	1：そう思う		2：少し思う		1	2	3	4	中央値	回答数						
		3：あまりそう思わない		4：思わない								度数					
(1)		第2回支援会議をどのように進めていくかがわかった。										11	5	0	0	1	16
(2)		第1回支援会議の結果を第2回支援会議で振り返ることは支援に有用だと思う。										14	2	0	0	1	16
(3)		支援がうまくいく条件/いかない条件を考えることは、対象児の理解につながる。										15	1	0	0	1	16
(4)		支援がうまくいく条件/いかない条件を考える個人作業はとても大変だった。										4	6	5	1	2	16
(5)		支援がうまくいく条件/いかない条件を考えるグループ作業は支援連携につながる。										16	0	0	0	1	16
(6)		支援がうまくいく条件/いかない条件を考えるグループ作業は楽しくできた。										14	2	0	0	1	16
(7)		支援がうまくいく条件/いかない条件を考えるグループ作業は支援スキルの向上につながる。										16	0	0	0	1	16
(8)		第2回支援会議の支援方法の修正プロセスは、子どもの実生活の様子を反映できるやり方だと思う。										12	4	0	0	1	16
(9)		今回の方法で行う第2回支援会議は、実際の支援現場でも実施できると思う。										9	6	1	0	1	16

## ウ アンケート結果自由記述まとめ

### (1) ICF 研修の効果

- ① 具体的な情報を書くことの大切さと、それが支援の効率化につながることをわかった。
- ② ネガティブな（マイナス視点）書き方でなく、できるだけポジティブ（プラス視点で）に書くことの大切さがわかった。
- ③ 具体的な情報に基づいて支援を考えることの大切さがわかった。
- ④ 普段実施している、いつもの支援会議をもっと良いものにしていくべきだ。

### (2) ICF システムに関して

- ① 子どもの姿の共有ができる：文字資料だけでも実際の子どもの姿をイメージし、具体的な支援を考えられた。イメージした姿はチーム内でほぼ同様。
- ② 支援者のスキル向上となる：具体的な情報の手ごかりから支援を考える作業や、支援がうまくいく条件、いかない条件を考える作業は支援スキルの向上になる。
- ③ これまでの支援とは違うよさがある。

### (3) 第2回支援会議の実際の支援現場での実施可能性

(実施できそう)

- ・具体的な情報を伝え合うことで現場での支援時にイメージしやすく、共通理解することができたから。
- ・作業は大変なところもあるが、共通理解して支援方法を探ると明確な支援法が分かり有効。
- ・いろいろな視点で支援方法を試す事で、支援者自身の発見や子どもを知るための方法としてとてもよいから。
- ・具体的な支援の手ごかりを共通理解することで、子どもの育ちにつながるから。

(実施できない)

- ・支援者の個人的な問題（能力の高さや経験による難しさ）
- ・本人支援には有効だと思うが支援現場の忙しさを考えると現実的ではない。
- ・個別支援計画の他に新たな書類を作成するのは大変なため。
- ・時間を要する会議だと思うから。

## エ アンケート結果の考察

ICF 研修により、情報収集の際のポイント(具体的に、ポジティブに記入する)や支援考案のポイント(具体的な情報に基づき考える)を学ぶことができた。

研修内容の、『情報収集時に「場面とセットで把握すること」や「環境をみること』、『会議をスムーズに進める方法』『うまくいかない条件、うまくいく条件をみつける(次へ支援先の引継ぎ)こと』は、ICF システムの活用に限ったことではなく、普段の支援に重要なことである。このような研修を実施することは、地域の支援者のスキルアップにつながると考える。

実際の支援として取り入れていくには、通常業務の中で可能な方法を検討していく必要がある。

## (2) ICF 情報把握・共有システムの活用にかかわる質問票の結果

以下、実施した質問票の結果を示す。

### ア 支援チーム形成・パート分担・入力チェックの質問票

#### (ア) チームリーダー用質問票

チームリーダー 3 名に支援チームにかかる労力について聞いた結果を以下に示す。

表 6 - 3 支援チーム形成・パート分担(チームリーダー用)質問票 回答結果まとめ

支援チームの形成にかかる労力について												
選択肢 >>	1 2 3 4 5					回答数	1	2	3	4	5	回答数
	少ない	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	多い	度数			
2	支援に携わっている人たちの所属や職種を把握することにかかった労力は？						2	1				3
3(1a)	「活動と参加シート」の分担検討にかかった労力は？							1	2			3
3(1b)	「活動と参加シート」の分担入力の依頼にかかった労力は？							1	2			3
3(2a)	「環境因子シート」の分担検討にかかった労力は？							1	1			3
3(2b)	「環境因子シート」の分担入力の依頼にかかった労力は？							1	1			3
選択肢 >>	1 2 3 4 5					回答数	1	2	3	4	5	回答数
少ない	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		多い	度数				
5	個人情報の混在など不適切情報のチェックに要した労力は？							1	1	1		3

支援チームの形成については、労力は多くも少なくない。

(1) チームメンバー用質問票

チームメンバー19名にチーム全体で支援関連情報を共有することについて聞いた結果を示す。

表6-4 支援チーム形成・パート分担(チームメンバー用)質問票 回答結果まとめ

設問2 チーム全体で支援関連情報を共有することについて						
選択肢 >>	1: そう思う	2: 多少そう思う			回答数	
	3: あまりそう思わない	4: そう思わない	度数			
(1)	支援チームをリーダーとメンバーで構成することは連携支援の実現に効果的だと思いますか?	15	1			16
(2)	支援チームで分担して支援関連情報を把握することは連携支援の実現に効果的だと思いますか?	14	2			16
設問3 「活動と参加」および「環境因子」の入力パート分担について						
選択肢 >>	1: そう思う	2: 多少そう思う			回答数	
	3: あまりそう思わない	4: そう思わない	度数			
(1)	「活動と参加」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか?	10	4	1		15
(2)	「環境因子」であなたが分担した項目は自分の経験や専門にあっていると思いますか?	4	2	1		7
(3)	情報入力の方法(回答前確認b)で回答した方法は自分にあっていると思いますか?	4	3			7
設問4 個人情報に留意しながら情報を入力することについて						
選択肢 >>	1: そう思う	2: 多少そう思う			回答数	
	3: あまりそう思わない	4: そう思わない	度数			
(1)	個人情報の混入などを回避しながらの入力作業はかなり労力を使いましたか?		1	7	1	9
(2)	リーダーが個人情報等の不適切情報の最終チェックをすることは必要不可欠だと思いますか?	4	2	2		8

- ・ 支援チームを構成することは連携支援の実現に効果的である。
- ・ 支援チームで分担して情報把握を行うことは連携支援の実現に効果的である。

イ 医学的診断シートの活用にかかわる質問票

医学的診断シートの活用にかかわる筆問票には閲覧者用と記入者用があるが、これら両方を併せた結果を示す。

表 6 - 5 医学的診断シート質問票 回答結果まとめ

設問	「精神科疾患／精神科以外の疾患」×「主診断／併存診断」の記入欄構成によって、	1	2	3	4	回答数
		度数				
設問 3	(1) 他分野の支援者や本人・家族に医学的状態をより正確に伝えられる	7	5	1		13
	(2) よりよい支援計画につながる情報を支援者や本人・家族に伝えられる	7	6			13
	(3) 必要な診療科間や医療機関間の連携を促進できる	8	4		1	13
設問 4	「医師の所見」への記入内容を					回答数
	度数					
	(1) 通じて、他分野の支援者や本人・家族に医学的状態をより正確に伝えられる	17	3			20
(2) 支援チームや本人・家族が共有することは、よりよい支援計画の構築につながる	17	2	1		20	
設問 5	「医学的治療方針」への記入内容を					回答数
	度数					
	(1) 通じて、他分野の支援者や本人・家族に医学的状態をより正確に伝えられる	16	4			20
(2) 支援チームや本人・家族が共有することは、よりよい支援計画の構築につながる	16	4			20	
設問 6	医学的診断シートを活用することで、					回答数
	度数					
	(1) 医療と他分野がもっと効果的に連携していける	12	7	1		20
	(2) 支援対象児者の医学的状態を、支援者や家族がより理解しやすいように伝えていくことができる	15	5			20
	(3) 現在および今後の支援計画はさらによりよい支援計画となっていく	13	7			20
	(4) 今後、主たる医療機関が変更されたとしても、医療情報の引継ぎが円滑になされていく	8	10	1		19
(5) 年金申請など福祉サービスに関する手続の作業労力が軽減される	9	5	3	1	18	

- ・ 医師の所見を通じて、他分野の支援者や本人・家族に医学的状態をより正確に伝えられる。
- ・ 医学的診断シートを活用することで、医療と他分野が効果的に連携していける。
- ・ また、活用することでさらによりよい支援計画となる。

ウ 健康関連情報シートの活用にかかわる質問票

健康関連情報シートの活用にかかわる筆問票には閲覧者用と記入者用があるが、これら両方を併せた結果を示す。

表 6 - 6 健康関連情報シート質問票 回答結果まとめ

選択肢	1 : そう思う      2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない      4 : そう思わない						回答数
	記入欄B2（専門職による評価結果と所見）について、		1	2	3	4	
設問 5	(1)	記入欄B2への記入内容によって、対象児の障害特性、困難性に影響するさまざまな症状や機能不全などを他の支援者や本人・家族に伝えることができる。	4	3			7
	(2)	記入欄B2への記入内容を支援チームが共有することは、よりよい支援計画の構築につながる。	4	3			7
設問 6	健康関連情報（B2）シートを活用することで、		1	2	3	4	回答数
	(1)	本人・家族や支援者の気づきが忘れられることなく確実に専門的評価につながっていく	2	6	1		9
	(2)	対象児の障害特性、困難性に影響するさまざまな症状や機能不全などを関係者間で共有することが効率よく実現していける。	4	5			9
	(3)	現在および今後の支援計画はさらにより支援計画となっていく	5	3	1		9
(4)	支援機関が変わっても、必要なアセスメント情報の引継ぎと共有が円滑になされていく。	4	4			8	

・健康関連情報（専門職による評価結果と所見）によって、対象児の障害特性、困難性に影響する症状や機能不全などを支援者等に伝えることができる。  
それを共有することで、支援計画の構築につながる。

エ 活動と参加シートの活用にかかわる質問票

活動と参加シートの活用にかかわる質問票には閲覧者用と記入者用があるが、これら両方を併せた結果を示す。

表 6 - 7 活動と参加シート質問票 結果まとめ

選択肢 >> 1 (少ない) --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 (多い)		1	2	3	4	5	回答数
		度数					
設問2 ※記入者 のみ	(1)-a 記入労力の程度 (初回実施)	0	1	3	2	12	18
選択肢	1 : そう思う                      2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない      4 : そう思わない						
設問3 (項目12は 記入者の み)	本シートの活用で改めて気づいた		1	2	3	4	回答数
			度数				
	(1)	「対象児者のできていること」があった	16	4	1	0	21
	(2)	「対象児者のできていないこと」があった	15	5	0	0	20
	(3)	「対象児者に有効な支援」があった	15	5	0	0	20
	(4)	「対象児者に必要な支援」があった	16	4	2	0	22
	(5)	「対象児者が身につけるべきスキル」があった	14	4	3	0	21
	本シートによって把握された情報全体によって		1	2	3	4	回答数
			度数				
	(6)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	15	7	0	0	22
	(8)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	18	4	0	0	22
	(10)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	4	15	0	3	22
	「活動と参加」シート全体の情報把握は		1	2	3	4	回答数
		度数					
(12)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	11	6	0	0	17	
(13)	発達障害への気づきにつながると思う	12	9	1	0	22	

- ・活動と参加シートの活用で対象児のできていること、できていないこと、有効な支援など改めて気づくことがあった。
- ・このシートの活用で、支援計画はさらによくなり、多職種連携が効果的に実現される。
- ・記入の労力が多いが、情報把握は労力と時間に見合うものであった。

オ 環境因子シートの活用にかかわる質問票

環境因子シートの活用にかかわる質問票の閲覧者用と記入者用を併せた結果を示す。

表 6 - 8 環境因子シート質問票 結果まとめ

選択肢 >> 1 (少ない) --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 (多い)		1	2	3	4	回答数				
		度数								
設問2 ※記入者 のみ	(1)-a 記入労力の程度 (初回実施)		1	1		2				
	(1)-b 記入労力の程度 (再実施)									
選択肢	1 : そう思う                      2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない      4 : そう思わない									
設問3 (項目11は 記入者の み)	本シートの活用で改めて気づいた					1	2	3	4	回答数
						度数				
	(1)a	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (周囲の人たちに関わる環境因子)	12	6	2	1	21			
	(1)b	「対象児者の生活に影響する環境因子」があった (製品と用具、自然環境、サービスに関わる環境因子)	10	8	1	1	20			
	(2)	「対象児者の生活しやすさにつながる環境因子」があった	10	7	2	1	20			
	(3)	「対象児者の生活しづらさにつながる環境因子」があった	10	7	0	1	18			
	(4)	「対象児者に必要な環境調整支援」があった	7	9	1	1	18			
	本シートによって把握された情報全体によって					1	2	3	4	回答数
						度数				
	(5)	現在および今後の支援計画はさらによくなっていく	11	8	1	0	20			
	(7)	そして情報共有によって多職種支援連携が効果的に実現される	10	7	1	0	18			
	(9)	そして早期からの引継ぎによって適応不全を事前に回避できる	3	8	1	4	16			
「環境因子」シート全体の情報把握は					1	2	3	4	回答数	
					度数					
(11)	担当部分の記入に必要な労力と時間に見合うものだった	1	1	0	0	2				
(12)	発達障害への気づきにつながると思う	4	8	1	0	13				

- ・ 環境因子シートの活用で、対象児の生活のしやすさ、しづらさにつながる環境因子 (周囲の人、製品と用具、自然環境など) について改めて気づくことがあった。
- ・ このシートの活用で、支援計画はさらによくなり、多職種連携が効果的に実現される。

カ 支援計画検討会議の質・チーム協働にかかわる質問票

表 6 - 9 支援計画検討会議の質・チーム協働の質問票 結果まとめ

設問 1 支援会議におけるチーム協働について						
選択肢 >	1 : そう思う 2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない 4 : そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(1)	あなたの意見を十分に言えましたか？	5	7	1	0	13
(2)	他の人たちはあなたの意見に十分に耳を傾けてくれましたか？	7	5	1	0	13
(3)	同意できない意見に対してもお互い十分に耳を傾けていましたか？	8	3	1	1	13
(4)	ぶつかり合いや意見の食い違いを参加者全員で解消し、よい形にまとめあげることができていましたか？	5	4	0	4	13
選択肢 >	1 : かなりあった 2 : 多少あった 3 : あまりなかった 4 : なかった	1	2	3	4	回答数
		度数				
(5)	支援の方向性やアイデアについて、特定の人たちが自分たちの意見に頑なにこだわるということがありましたか？（逆転項目）	0	0	6	7	13
選択肢 >	1 : そう思う 2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない 4 : そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(6)	支援方針の決定に、特定の人たちが強い影響力を持っていましたか？（逆転項目）	2	3	3	5	13
(7)	支援計画実施のための役割分担はチーム全員の合意の上で決定されましたか？	4	9	0	0	13
(8)	本人・保護者・支援者にとって有用で建設的な話し合いが参加者全員でできましたか？	5	6	0	2	13
(9)	本システムを活用することによって支援会議の質が活用前よりも向上したと思いますか？	9	4	0	0	13
設問 2 支援計画の内容について						
選択肢 >	1 : そう思う 2 : 多少そう思う 3 : あまりそう思わない 4 : そう思わない	1	2	3	4	回答数
		度数				
(1)	支援計画は具体的な情報把握に基づくものでしたか？	10	3	0	0	13
(2)	支援計画は支援対象者の実態に合致したものでしたか？	10	3	0	0	13
(3)	支援計画は支援対象児者の支援ニーズを包括的に捉えたものでしたか？	7	6	0	0	13
(4)	支援計画は支援対象である当事者・家族の納得を得られるものでしたか？	7	6	0	0	13
(5)	本システムを活用することによって支援計画の内容が活用前よりも向上したと思いますか？	9	4	0	0	13

- ・ 支援会議では、ほとんどの人が自分の意見を十分言え、他人の意見にも耳を傾けた。
- ・ 会議で作られた支援計画は、具体的な情報把握に基づくものであり、対象児の実態に合致したものであり、家族の納得を得られるものであった。
- ・ 本システムの活用で支援計画の内容が以前より向上した。

キ 支援計画の実行と結果にかかわる質問票

表 6 - 1 0 支援計画の実行と結果の質問票 結果まとめ

設問		支援計画の実行結果について				
選択肢 >>	1 : 解決した	2 : 多少解決した			回答数	
	3 : あまり解決しなかった 4 : 解決しなかった					
		度数				
(1a)	あなたが分担した支援計画の実行によって、目的の支援課題は解決したと思いますか？	3	8	0	0	11
(2a)	支援計画全体の実行によって支援対象児者の生活は改善したと思いますか？	2	9	0	0	11
選択肢 >>	1 : そう思う	2 : 多少そう思う			回答数	
	3 : あまりそう思わない 4 : そう思わない					
		度数				
(3a)	支援計画は支援チーム全体にとって実行可能なものでしたか？	9	2	0	0	11
(4a)	あなたが分担した支援計画の役割はあなたにとって実行可能なものでしたか？	8	3	0	0	11
選択肢 >>	1 : そう思う	2 : 多少そう思う			回答数	
	3 : あまりそう思わない 4 : そう思わない					
		度数				
(6)	本システムを活用することによって支援計画の実行におけるチーム連携は活用前よりも向上しましたか？	5	4	0	0	9
(7)	本システムを活用することによって支援計画の全体構成と役割分担は活用前よりも明確になりましたか？	4	5	0	0	9

- ・ 約 5 か月間の支援の実行で、支援課題、生活の改善がある程度解決、改善した。
- ・ 支援計画については、チーム全体、個人において実行可能なものであった。
- ・ ICF システムの活用により、チーム連携が向上した。

(3) 本事業の振り返りアンケート（保護者および支援者）

ICF 情報把握・共有システムを活用した支援への参加を振り返ってのアンケートについて、保護者の結果を図 6 - 1 に、支援者の結果を図 6 - 2 に示す。

<p>ICFシステム活用後の<b>保護者</b>の振り返りアンケート</p>
<p>1 ICF を活用したことで<b>新たな発見</b>はありましたか。</p>
<p>(1) 子どもに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・できていることが増えていた。</li><li>・学校でのトラブル以外の情報を知ることができた。どうしてもできないことばかりに目がいきがちで、これまでも「できることたくさんある」と言われていたが疑心暗鬼であった。しかし、ICF の活用で、出来ているが多くあることに気づき、子どもへの見方が変わった。</li></ul>
<p>(2) 保護者自身も含めた家族に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・父親が、ICF の情報からパニック時の対応がわかるようになった。本児の理解が深まった。</li></ul>
<p>(3) 保護者の気持ちの変化</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・改めて子どもの特性を理解し、対応にゆとりを持って接することができた。</li><li>・できることがたくさんあると気づき、前向きに考えられるようになった。</li><li>・多くの支援者が労力を使って取り組んでくれたことがありがたく、さらに頑張ろうと思った。</li><li>・今まで以上に学校や他機関に相談しやすくなった。</li><li>・家族もより明るくよい方向になり、毎日を過ごせるようになった。</li><li>・本児だけでなく家族も多くの人に支えられていると改めて気づき、感謝の念がわいた。</li></ul>
<p>(4) ICF 継続の必要性があると考える理由</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・成長とともに環境も支援者も変わるが、継続することで対処方法が知れるから。</li><li>・今後、まだまだ困難なことがありそうだから。</li></ul>
<p>(5) その他よかったこと</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・母親(自分)以外の方が本児の特性に気づいてもらえた。本当にこのシステムに感謝している。周りの協力がこれほど心強いものだと思わなかった。</li><li>・支援する側の対応がとても上手になった。支援者が団結することで心にゆとりがうまれ、子どもも理解しやすくなったように思う。「ICF やばい、素晴らしすぎる、神！」です</li></ul>

図 6 - 1 本事業の振り返りアンケートの結果（保護者）

<ul style="list-style-type: none"><li>・ ICF の情報を見て、できていることに気づき、子どもの見方が変わった</li><li>・ 精神的なゆとりがでた、考え方が前向きに変化、相談しやすくなった、明るくなった。</li><li>・ 周りの支援者への感謝、ICF への感謝、支援者のスキルアップを実感した。</li></ul>
---

ICFシステム活用後の支援者の感想(自由記述アンケート)

1 ICF を活用したことで新たな発見はありましたか。

(1) 子どもに関すること

- ・本児の苦手さが見えてきた。放デイでの様子や対応がわかり、どんな支援だとできるかということがわかった。
- ・入学前の姿も知ることができた。
- ・医療情報が明確になった。各生活場面を把握できた。
- ・本児の特性や強み、各機関でどのような姿なのかを知ることができた。
- ・うまくいくときの環境について知ることができた。

(2) 保護者に関すること

- ・家庭環境や家族の思いについて知ることができた。
- ・母が本児への対応に自信を持っていることがわかった。不安や心配事はたくさんあるが、本児のよい所をたくさん知っており、関係機関に聞きながら実践していることがわかった。
- ・保護者が家で頑張っていることや、これまでの本児の小さいころからの努力を知れたのはよかった。自分も頑張らないといけないと思った。

(一番変化の大きかったタイミング)

支援会議

2 ICF を活用後の自分の支援の変化

- ・適切な支援をすればできる子だということがわかった。支援が必要なところは、どのような手立てをどううまくいくかを考えるようになった。
- ・これまで以上に本児を取り巻く環境を踏まえた助言、介入を考えられるようになった。
- ・支援会議でうまくいく条件、いかない条件を取り入れた支援をするようになった。
- ・本児の好きなことを取り入れた支援をするようになった。支援者が「待とう」という気持ちがわいてきた。
- ・家や園での様子を取り入れた環境を整えることに力をいれるようになった。

(一番変化の大きかったタイミング)

支援会議

3 ICF を活用することで個別支援計画等が作りやすくなると思うか。

全員が「作りやすくなる」と回答

(理由)

- ・本児の強み・課題が明確になるので、どんな課題にどのようにアプローチしていくかが検討しやすくなる。
- ・本児の苦手な部分をはっきりし、短期目標や支援方法が具体的に書ける。
- ・支援者の困り事ではなく、本人の困り事として記載できる。
- ・医学的診断、健康関連情報、環境因子など様々な情報をもとに考えられるため。
- ・行動をおおまかではなく、細分化して様々な状況・場面で検討していくので、特にどの場面で支援が必要かわかりやすくなるため。

(その他：条件)

- ・計画を作成するものが、支援会議に参加し、子ども視点でアセスメントができないといけない。

#### 4 ICF の活用の継続性について

- ・全員が「継続して活用する必要がある」と回答

(理由)

- ・効果があるため。
- ・支援の効果が分かりやすくなり、支援者の中で共有共感するきっかけとなるため。
- ・本児の成長とともに長い目で見ていく事ができる。

(その他：条件等)

- ・関係者が皆、ICF の基本的な理解や知識を持っているのであれば、継続活用は有効だと思う。
- ・ICF の考え方に慣れていないため、何回か繰り返していく必要があると思う。
- ・児を知るにはとてもよい手段だが、日常的に活用するには項目が多く大変。モデルの児に対して ICF を活用し続けることで、自然と他の児に対しても、子ども中心の見方ができるようになるとよい。

図 6 - 2 本事業の振り返りアンケートの結果（支援者）

【子どもに対して】他の機関での本児の姿、以前の様子、本児の強みや苦手さ、うまくいく環境について発見があった。

【保護者に対して】家庭環境、家族の思い、これまでの頑張りを知れた。

【支援の変化】環境と結び付けた支援や助言、本児の好きなことを取り入れた支援、子どもを「待とう」という気持ちがでてきた。

【個別支援計画等の作りやすさ】本児の強みや苦手が明確になる、本児の困り感に気づける、どの場面で支援が必要か明確になり、支援計画が作りやすくなる。

【ICF 活用の継続】継続することで支援の効果がわかりやすくなる、成長とともに見ていける、情報の共有・検討に有効であり、継続して活用することが必要。

【ICF システム活用の条件】ICF の基本的な理解や知識がベースにあることが大切。モデルケースで ICF システムを活用し、自然と他児の見方も変化するとよい。

(4) ICF 情報把握・共有システム活用前後での個別支援計画の比較（企画・推進委員）

本システム活用前後の放課後等デイサービスの個別支援計画を図 6-3 に、相談支援事業所のサービス等利用計画、障害児支援計画を図 6-4 に示す。これらの図で示した個別支援計画はそれぞれ前後の変化がわかりやすいものとした。ただし、他児についても前後の変化は認められている。

表 6-11 は、これら参加協力児の個別支援計画等を 1 ケースずつ前後比較して、その変化を企画推進委員が評価した結果である。

## さんの個別支援計画

施設名 :  
作成日 : 2019年6月20日

受給者番号		作成回数	3	回
開始日	2019年6月15日	終了日	2019年12月1日	
本人・家族の意向	<p>(本人) 友達と楽しく遊びたい。今まで仲の良かった友達とまた遊んだり喋れるようになるといい。</p> <p>(家族) 必要な療育を受けて、色々と成長ができるといい。また、お金の計算が苦手なので一人で買い物に行けるようになるといい。</p>			
総合的な支援方法	療育支援や色々な経験を積むことで、他者との関わり方や身の回りのことなど一つ一つできるように支援する。			
長期目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを伝えたり、友達との関わりがうまくでき、楽しい学校生活を送れる。</li> <li>・いろいろな活動に参加し、自身を積み重ね全体的な成長が図れる。</li> </ul>			
短期目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラシバンドなどに参加し、楽しみを持ちながら学校生活を過ごせる。</li> <li>・新しいことも少しずつチャレンジできる。</li> </ul>			
送迎	<p>迎え： 碧南市中央小学校</p> <p>送り： なし</p>			
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別支援計画見直しのため、半年に1回面談を行います。</li> <li>・学校その他関係機関との連携を行います。</li> </ul>			

項目 (本人のニーズ等)	具体的な達成目標	支援内容・留意事項	達成期間
発達支援	気持ちをコントロールする方法の幅を広げる。	イライラした時は、指導員が話を聞き、共感しそれでもなおらない時は、本を読む、絵を描く、深呼吸をするなど、手立てを増やしていくことで、方法の幅を広げていく。	6ヶ月
発達支援	達成感を得ることで自己肯定感を高める。	本児にしかできない生き物の世話や工作などの準備をしてもらい、褒められ感謝されることで、達成感を感じてもらい自己肯定感を高めていく。	6ヶ月
家族支援	情報を共有する。	・事業所での様子をお伝えしたり、またご家庭での様子も話していただくことで、本児により良い支援方法を共有する。	6ヶ月
地域支援	地域との触れ合いの経験をすす。	・様々なイベントを通して地域のお店や施設の人など、様々な人たちとの関わりを持つ。	6ヶ月

図 6 - 3 a システム活用前の放課後等デイサービスの個別支援計画

## Cさんの個別支援計画

施設名 :  
作成日 : 2019年9月23日

受給者番号		作成回数	4	回
開始日	2019年10月1日	終了日	2020年3月31日	
本人・家族の意向	(本人) 友達と楽しく遊びたい。今まで仲の良かった友達とまた遊んだり喋れるようになるといい。 (家族) 必要な療育を受けて、色々と成長ができるといい。また、お金の計算が苦手なので一人で買い物に行けるようになるといい。			
総合的な支援方法	療育支援や色々な経験を積むことで、他者との関わり方や身の回りのことなど一つ一つできるように支援する。			
長期目標	・自分の思いを伝えたり、友達との関わりがうまくでき、楽しい学校生活を送れる。 ・いろいろな活動に参加し、自身を積み重ね全体的な成長が図れる。			
短期目標	・ブラスバンド部などに参加し、楽しみを持ちながら学校生活を過ごせる。 ・新しいことも少しずつチャレンジできる。			
送迎	迎え： 碧南市中央小学校 送り： なし			
備考	・個別支援計画見直しのため、半年に1回面談を行います。 ・2020年2月 保護者・学校を含めた関係機関全体の担当者会議を行います。 ・ICFモデルに基づいた収集データ・情報共有フォーマットについては保管しています。			
項目 (本人のニーズ等)	課題	具体的な支援方法	達成期間	
発達支援	実生活で計算をすること	・ホワイトボードにあるスケジュールを見ながら行動させる。 ・不安感を訴えられた場合 指導員が声かけを行う。 ・行動前には時間の確認を行う。 ・帰りのお支度音楽係をやらせよう。帰り時間が近くなったらタイマーを首から下げてもらい都度確認する声かけを行う。 ・忘れ物ないか係をやらせよう他児・自身の忘れ物がないか確認させる。 ・デジタル時計と現状の時計を意識させる。 ・普段と違う場所に出かける際・活動を行う際・不安がっている場合は、タオルを濡らすよう声かけをしクールダウンさせる。	5ヶ月	
発達支援	状況に応じた衣服と履物の選択	・季節ごとの服装の組み合わせ・中学入学に向けルールを具体的に不安の軽減を行う。(ソーシャルストーリートレーニング等) ・暑そうだったり、寒そうだったりしていた場合衣服の調整を促し現状を確認させる。(汗など) 2つとも家庭でも行なってもらおう支援方法となる。	5ヶ月	
家族支援	ICFモデルに基づいた情報の更新を都度を行うことで現状を把握し家庭環境面の充実を図る	・収集したデータの更新を行うことにより、現状どのような支援が必要か・支援に修正をかけた方が良いかなど情報共有を行う。 ・共通情報を元に具体的に本児・保護者の負担の軽減を行う。	1年	
地域支援	ICFモデルに基づき本児に関わる関係機関との情報共有を行い地域全体で支援を行う	・担当者会議で共通のツールを使用し本児の困りごとの共有をする。 ・当事業所・他機関で行なっている支援内容の共有を行うことで保護者を含めた関わる機関全体で本児の地域生活改善を行う。	1年	

図 6 - 3 b システム活用後の放課後等デイサービスの個別支援計画

サービス等利用計画・障害児支援利用計画

利用者氏名(児童氏名)	C	障害支援区分	なし	相談支援事業者名				
障害福祉サービス受給者証番号		利用者負担上限額	4600円	計画作成担当者				
地域相談支援受給者証番号		通所受給者証番号		利用者同意署名欄				
計画作成日	平成30年12月1日	モニタリング期間(開始年月)	平成31年5月、11月					
利用者及びその家族の生活に対する意向(希望する生活)	本人:友達と楽しく遊びたい。今までの良かった友達とまた遊んだりしゃべれるようになるという。 母:必要な療育を受けて、色々と成長が出来るという。また、お金の計算が苦手なので一人で買い物に行けるようになるという。							
総合的な援助の方針	療育支援や色々な経験を積むことで、他者との関わり方や身の回りのことなど一つ一つできるように支援する。							
長期目標	・自分の思いを伝えたり、友達との関わりがうまくでき、楽しい学校生活を送れる。 ・色々な活動に参加し、自信を積み重ね全般的な成長が図れる。							
短期目標	フラスハンド部などに参加し、楽しみを持ちながら学校生活を過ごせる。 新しいことにも少しずつチャレンジできる。							
優先順位	解決すべき課題(本人のニーズ)	支援目標	達成時期	福祉サービス等 種類・内容・量(頻度・時間)	提供事業者名 (担当者名・電話)	課題解決のための 本人の役割	評価 時期	その他留意事項
1	新しいことや苦手なことに取り組むとイヤしたり怖れてしまうことがある。事業所や学校での経験を積み重ねながら、少しずつ自信が持て、成長が図れるとよい。	新しいことに少しずつ取り組んでいく。活動の流れに沿って参加できる。	12か月			初めてのことや自信がないことでも少しずつ取り組んでいきたいと思います。好きなことにも参加していきたいと思います。	平成31年11月	
2	言葉を間違えてしまったり、自分の思いがうまく伝えられないことがある。遊んでもルールを忘れてしまったりするたためトラブルになってしまおう。	他者との関わり方やコミュニケーション方法を身に付けていく。遊んだりルールなどは視覚化し本人が分かりやすい形で参加できるように支援する。	12か月	①放課後等サービス 6日/月 ②小学校、フラスハンド部		学校や事業所で他者との関わり方を覚えていきたいと思います。	平成31年11月	
3	時計を読むのが苦手。時間が分かると自宅や学校でも安心して過ごせる。	学校や事業所等日常生活の中で時間の理解ができるよう支援していく。	12か月			普段の生活の中で少しずつ時計を意識して過ごせるようになりましょう。	平成31年11月	
4	身の回りのことで自分でできることが増え、少しずつ成長できるとよい。	支援を受けながら、できることが少しずつ増える。	12か月			支援を受けながら少しずつ身の回りのことのできるようになりましょう。	平成31年11月	

図 6 - 4 a システム活用前のサービス等利用計画・障害児支援利用計画

サービス等利用計画案・障害児支援利用計画案

利用者氏名(児童氏名)	C	障害支援区分	なし	相談支援事業者名			
障害福祉サービス受給者証番号		通所受給者証番号		計画作成担当者			
地域相談支援受給者証番号		モニタリング期間(開始年月)	令和2年5月、11月	利用者同意署名欄			
計画作成日	令和1年11月29日						
利用者及びその家族の生活に対する意向(希望する生活)	<p>本人: 学校に楽しく安心して通いたい。友達とも楽しく遊びたい。今まで仲の良かった友達とまた遊んだりしゃべれるようになるという                      母: 本人が笑顔で楽しく感じて過ごしてくれたらいい。不安がなく安心して学校に通えるようになるという。</p>						
総合的な援助の方針	<p>支援者間で連携し、本人が安心して過ごせるような支援や環境の調整を行う。</p>						
長期目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校に楽しく、安心して通う。</li> <li>・自分の思いを伝えたり、友達との関わりがうまくでき、楽しい学校生活を送れる。</li> </ul>						
短期目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援を受けながら、少しずつ不安なことが少なくなり、安心できる時間が増える。</li> <li>・友達や先生に自分の思いを伝えてみる。</li> </ul>						
優先順位	解決すべき課題(本人のニーズ)	支援目標	達成時期	福祉サービス等種類・内容・量(頻度・時間)	課題解決のための本人の役割	評価時期	その他留意事項
1	少しずつ分らないことを友達に聞いたり、不安なことを先生に伝えるように。不安なことが、まだまだ不安な気持ちには強い。	本人が安心できるような声掛けや先の見通しをつけてあげることや安心して過ごせるよう支援する。支援者間で本人の特性や対応を共有する。できていることは褒める。	12か月	・放課後等デイサービス 5日/月 ・小学校、プラスバンド部	不安なことや分らないことは担任の先生や支援者、友達に聞く。	令和2年11月	
2	友達とも少しずつ放課に遊ぶようになってきた。もつと色々な子と楽しく遊びたい。	必要時支援者が間に入り、友達とうまく関わられるよう支援する。ルールなどは明確化し本人が分かりやすい形で参加できるように支援する。	12か月	・放課後等デイサービス 5日/月 ・小学校、プラスバンド部	放課後に友達に声をかけ、一緒に遊ぶ。	令和2年11月	
3	アナログ時計をみて時間を把握することが苦手。授業の終わりや放課の終わりなどが分からず、学校生活で不安感が強い。	デジタル時計やタイマーを上手に活用する。通級などで時計の勉強をする。	12か月	・放課後等デイサービス 5日/月 ・小学校、プラスバンド部	時計の勉強をする。分らない時は聞いてみる。	令和2年11月	
4	季節に合った着替えを用意したり、汗をかいたら着替えるなど状況に応じて対応するのが苦手。また何かに集中するとトイレ時間も合わないうちもある。	支援を受けながら、できることが少しずつ増える。	12か月	・放課後等デイサービス 5日/月 ・小学校、プラスバンド部	支援を受けながら少しずつ身の回りのことができるようになる。	令和2年11月	

図 6-4b システム活用後のサービス等利用計画・障害児支援利用計画

表 6-1 1 システム活用前後の児発・放デイ個別支援計画の比較結果（企画推進委員）

アンケート 児童発達支援、放課後等デイサービス 個別支援計画								
設問 具体的な支援内容の記載について								
選択肢 >>	1：強く思う	2：思う	3：少し思う				回答数	
	4：あまり思わない	5：思わない	6：まったく思わない	度数				
Q1)	活用前と比べて活用後の記載内容は、より具体的になったと思うか？	13	13	1	0	0	0	27
Q2)	活用前と比べて活用後の記載内容は、それに基づいて支援者が同じ内容を共通に思い描けるものになったと思うか？	8	17	2	0	0	0	27
Q3)	活用前と比べて活用後の記載内容は、生活適応の改善により役立つものになったと思うか？	9	14	4	0	0	0	27
Q4)	活用前と比べて活用後の記載内容は、支援の効果を評価しやすい内容になったと思うか？	7	12	8	0	0	0	27
アンケート 相談支援事業所 サービス等利用計画・障害児支援計画								
設問1 ①-a) ICF活用後に具体的内容が増えた記載欄はありますか？								
選択肢 >>	1：ある	2：ない					回答数	
	度数							
Q1)	ICF活用後に具体的内容が増えた記載欄はありますか？	18	0	具体的に増えた項目：解決すべき課題、目標、役割				
Q2)	ICF活用後に具体的内容が減った記載欄はありますか？	8	19					
Q3)	ICF活用後に本人立場の表現が増えた記載項目はありますか？	24	3	具体的に増えた項目：解決すべき課題、目標、役割				
Q4)	ICF活用後に本人立場の表現が減った記載項目はありますか？	2	25					
Q5)	ICF活用後に合理的配慮の内容が増えた項目はありますか？	21	6	具体的に増えた項目：短期目標、解決すべき課題、留意事項				
Q6)	ICF活用後に合理的配慮の内容が減った記載項目はありますか？	1	26					

- ・ ICF システムの活用後は、支援間で共通に思い描ける内容になり、より具体的で生活適応の改善に役立ち、評価しやすい内容になった。
- ・ 本人立場の表現が増え、合理的配慮の記載も増えた。

(5) 支援会議の議事録内容の分析

以下に示すのは、3ケースの実際の第1回7支援会議の議事録内容を表記し、分析したものである。

1 ケース1 概要

対象児	Aくん 幼稚園年長（加配対象児）、男児
診断名及び ICF 活用前の状況	自閉症、療育手帳B判定 園では担当の先生がつきっきりで対応していた。 興味関心が移りやすく求められる課題とは異なることをしてしまう。 支援者は本児のストレス原因がわからない。特にパニック時にどのように支援してよいかわからずに困っていた。
情報収集機関等	幼稚園、相談支援専門員、児童発達支援事業所、保護者
情報収集期間	第1回：7月下旬から8月下旬
支援会議日	第1回：9月24日10時～12時 第2回：2月26日10時～11時半
支援会議参加者	保護者、幼稚園長、加配教諭、相談支援専門員、児童発達支援：児発管、保育士、児童支援員、こども課、福祉課発達支援係（司会）
支援検討項目	ストレスを伴う(作業)活動の遂行
第1回支援会議の結果等	本児の「ストレスを伴う活動」の課題を考えた際に、困っているのは支援者であることに全員が気づく。収集した情報を具体的に確認していくと、また、本児は支援者が困って止めてしまうために、乱れ、さらに支援者が困るといふ悪循環となっていたことも気づき、どういふ場面であれば、本人がうまくいくのかを共通理解した。その結果、事前に説明をし、職員がゆとりを持ち、本人に合わせた行動をすると落ち着いて行動できることがわかった。また、ほめられるとできることが増えていたため、できたこと、取り組めたことに対して、まずはほめることを支援者間で統一することになった。支援会議前は本児の支援に「困っていた」支援者が、支援会議後には「すぐにできることがたくさん見つかった」と支援に前向きな気持ちに変わった。
第2回支援会議の結果等	支援を行った結果、「好きなことを取り入れたり、事前予告をすることで、活動や行事に参加することが増えた」、「みんなと同じ空間で過ごす時間を少しずつ増やすことで、園でお友達と遊ぶことが増え、あいさつをすることが増えた」、「繰り返しサインをやり続けたら、トイレのサインをするようになった」、「具体的にほめることで、落ち着いて過ごすことができた」など、本児に大きな変化が見られた。また、園の学芸会では本児が参加できそうな内容を考えたところ、本児も参加できたが、他児にもわかりやすいものとなった。 支援会議後の参加者の感想によると、このような成果が出たのは、支援者が「子ども主体」で考えるようになり、各機関で情報共有し、同じ方向で支援ができたため、ということであった。

## 2 実際の第1回支援会議内容と解説等

実際の会議内容	会議の解説等
<p><b>【支援項目について】</b></p> <p>1 今回の支援項目検討内容の確認 『ストレスを伴う(作業)活動の遂行』</p> <p>2 選択理由 支援者全員で投票をし、一番票の多かったこの項目に決めた。 支援者が本人のストレスになる原因をよくわからないことと、本児がパニックになると支援者もどのように支援してよいかわからないため選択した。</p> <p><b>【支援項目内容(ストレスを伴う作業)の各機関での様子】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者：支援学級の体験入学の時など、座りたくないのに座らされる時や、それをやりたくないのにやらされる時にワーッと寝そべってしまう。順番を待てないので、違う事をやりたいがやらせてもらえずにストレスになる。</li> <li>・児発管：やりたい事が目の前にあると、全体の活動も取組みにくい。活動が始まって、興味関心が視覚に飛び込むと後追いでやれるが、みんなと一斉にはできない。みんなと一緒に活動も欲求と合致すると最初から取り組めることもある。</li> </ul> <p><b>【具体的な手がかりの追加や質問など】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・司会：何か追加などあるか？ ないようなので、手がかりの追加として、次の事もてがかりになると思うがどうか。 d 115) 短い言葉でいうと、聞く事が多い。 d 130) 1対1でやってみせるとマネをする。動きがあると理解しやすい。 d 135) 短い言葉で声かけをするとやる。 d 1313-4) <u>仮面ライダー</u>になりきる。⇒見立て遊びはまだ出来てないが、フリ遊びはできていると思った。</li> <li>・保護者：最近、変身をし、仮面ライダーの歌を歌うようになった。</li> <li>・児発管：ブイスリーと手で示してくれる。支援者も覚えます。</li> <li>・司会：好きなものから遊びがいろいろ広がっているのですね。 また、d 175) 困った時は教師を頼るようになった、とある。頼れるのはいい事だと思う。 d 340) サインで伝える場面が増えているとある。言葉はまだ少ないようだが、サインで伝える事ができているので支援に使えるそうだと思う。</li> <li>・保護者：マカトンサインで「トイレ」はずっとやっているが、なかなか定着しないので、サインはどうかなと思う。</li> <li>・司会：わかりました。それから、作業療法士の健康関連情報で、「視覚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援者は本児の状態(姿)だけに注目しており、環境についての視点が少なかった。</li> <li>・課題への支援考案のために、情報収集した情報から手がかりとなる情報を事前にピックアップした。事前に事業所が支援会議資料に手がかりをあげており、それ以外の追加項目がないか検討した。</li> </ul>

情報をヒントにすると応じやすい。体を動かしている時だと、目的を維持させることが難しい。1つ1つの動作をイメージすることは得意」とあるので、これも念頭に置くと良いとおもった。

- ・児発管：本児は、音楽を鳴らし、段差の高いところをステージに見立て、そこで1曲踊りきる。
- ・相談支援専門員：それで「見て」とジェスチャーで要求する。
- ・児発管：上手に踊れる職員は選ばれて挙げられるが、そうでない職員は下ろされて観客となる。
- ・司会：おもしろいですね。

D-110 で自分の興味のあるものなら長い時間見たりできるとあるが、「興味のあるもの」とは何か。

・幼稚園：ヒーローもの。音楽系。最近では、交通安全教室の人がゴレンジャーに教えてくれたら、最後までずっと座っていた。ヒーロー物で、動きがあるものが一番興味がある。

・児発管：絵本だとだるまさんシリーズがよい。テンポの良く、繰り返し、体も動かせるものは全体的に好き。

- ・保護者：だるまさんの絵本は、親子通園施設からずっと読んでいる。
- ・司会：今の話で継続してやることは、何か関係するか？テンポがよく、繰り返し、体もつかうものでも、初めてのものは興味を示すか。
- ・保護者：初めてだとダメですね。
- ・司会：何回か繰り返すことがいいのか。
- ・保護者：そのとおり。何回か繰り返し興味につながっていき、最終的に好きにつながる。

・司会：繰り返すことも大事なのですね。

・事業所保育士：一時期、表情に関して興味を持っている時期があり、その時は顔の表情の絵本を良く見ていた。その後、鏡に保育士の顔を書いてあるものを見ては、自分も同じ表情をしていた。絵本は物語性のあるものは入っていかないが、テンポがいいものや、表情のあるもの、動物がかくれているものなど、絵本の中に繰り返しがあるものは興味がある。

・児発管：顔の表情も“泣く”だけに興味があったが、最近“笑う”にも興味を持ってきた。

・司会：興味広がってきましたね。

では、その次、同じ d-110 に「自分の嫌いな事はやらない」と書いてあるが、嫌いな事は何か。

- ・幼稚園：基本は、やりたくないこと。
- ・司会：やりたくない事は嫌いな事だと思うが、具体的にみんなで共有したほうがいいと思うので教えてください。
- ・幼稚園：嫌いな事は待つ事。苦手かもしれないが、それから、無理やりやらされるのは嫌いだと思う。「行くよ」とひっぱられると「いや」となる。
- ・保護者：事前に言っておくといい。急にやられるのはすごく嫌がる。

・全員で共通理解しやすくするため、収集された情報で、具体的でないものについては具体的に確認した。

「興味のある物」の具体的内容を共有



- ①ヒーロー物で、動きのあるもの。
- ②絵本は、テンポよく、繰り返しがあがり、体がうごかせるもの、表情のあるもの
- ③何回か繰り返し行うことで「好き」につながる。

・具体的に確認していくことで、本児の成長している点も見えてきた。

・「本児の嫌いなこと」の具体的内容を共有



- ①待つ事
- ②無理やりやらされる事

・司会：すごくいい事が意見ですね。事前に言っておくといいですね。

・保護者：多少はいい。1番幼稚園、2番ぶちま〜る、3番お家に帰りますと言っておくと、朝の仕度は少しスムーズになる。

・司会：家でそのようにやっているのですね。いいことですね。参考になりますね。最後にもう一つ、d161に同じことでも気分やコンディションによってやらないとあるが、具体的にどんな時か。例えば、眠いとか、空腹とか、どんな時か分かる人いますか。

・幼稚園、保護者：暑いとダメ。

・児発管：まず視覚に情報が入ってきてしまうと、そこにまっしぐらになる。通常であればできていることも、視覚情報が入った時はできなくなる。また、来る前から事業所でしたいことが決まっている時がある。それがあると、“その日の気分”になる。

・司会：まとめると「気分やコンディションによる」というのは、“暑い”とか“これしたいという自分の思いと違う”とか“視覚情報が入った時”ということか。

・児発管：あとは疲れている時。

・司会：ありがとうございます。みなさんで情報共有すると苦手な理由や、できる時の手がかりがわかってきましたね。

【課題について】

・相談支援専門員：事業所と相談して、下記内容を課題の案として考えた。

1 課題について説明

①制限や制止をされると、ワーッとなくなってしまいそれ以上次の作業(活動)に進めていけなくなってしまう。

②ワーッとなくなってしまった時には「本人も」「周りも」どうしたらいいか分からず、手がつけれない。

③ストレスと思われたものが好きな活動に変化したり、本人のストレスとなるものはそもそも何なのか分かりづらい。

④気持ちの切り替えスイッチが分かりづらい。

2 課題についての意見交換

・司会：今、課題を4つあげてくれたがこれに対して意見はあるか。

・幼稚園、保護者：そのとおりだと思う。

・司会：あげてくれた内容について、具体的に聞きたい。①の制限、制止をされるとはどんな場面でどんな行動か。

・幼稚園：テラスがあるがそこは危ないので走ってはいけない。しかし、テラスで走ってしまうので、加配が大きい声で「走ってはいけません、歩きます」というとワーッとになってしまう。さらに「先生と手をつないで歩きます」というと、また大声を出していた。その時は、その行動の前が誕生日会でずっと同じ場所に居続けたストレスがあったと思う。早く外に行きたかったと思う。

・保護者：一緒に歩くと行っても、ワーッとなる。母が追いかけると、本人

③急にやらされる事

・「気分やコンディションによってやらない」という具体的場面を共有



- ①暑い時
- ②自分のやりたいものと違う時
- ③最初に視覚情報が入った時
- ④疲れている時

・事前に事業所と相談支援員が考えた「ストレスを伴う活動」についての課題を参加者に提示し、意見を聞いた。

・課題①の「制限、制止される」場面を具体的に確認した。



その場面を思い浮かべると、自然と参加者より本児の心情を推測する意見がでてきた。

は楽しくなる。

- ・司会：わかりました。事業所では制限されることがあるのか。
  - ・児発管：療育材料を置いてある場所には子どもは入れないが、本児の興味あるものがあるのでそこに入りたくなるので止められる。待っていてねという声かけで待てることもあるが、入ってしまうこともあり、それを制止するとワーッとになってしまう。
  - ・保護者：食事の際、おにぎりにお茶をいれることがあるが、その行動がエスカレートしたときに止める。本人からしたらそれは、どこまでがいいのか区別がつきにくい。
  - ・司会：そのとおりですね。その基準は大人のもので、本人からしたら境目わかりにくいですね。
  - ・保護者：コップの中に食べ物を入れて粉々にして水を入れて遊ぶことがある。それを「食べ物だから」とやめさせるとワーッとなる。本人は「こぼしてないのに」とやめられた理由がわからない。母としては汚いからやめてほしい。
  - ・司会：そうですね。そう思うと、こぼしていないからいいじゃんという本人の理由があるんですね。そして、本人に大人の事情は伝わってないですよね。なるほど、具体的によくわかってきましたね。
  - ・保護者：このようなわかりにくさが、パニックの元になっているのではないか。
  - ・司会：そうですね。さすがお母様。本人にとって、わかりにくいのが1つの原因でしょうか。
  - ・保護者：あと、気づきにくいということもある。周りに友達がいるのを気づかずにぐるぐるまわり友達に当たってしまうこともある。視野が狭い。だから、近くで伝えないと分からない。
  - ・司会：作業療法士の健康関連情報にも「動いていると気づきにくいということがある」。いろいろわかってきた。事情が本人にとってわかりにくかったり、気づきにくいためにわかっていなかったということですね。
  - ・保護者：成長すればわかるのか。
  - ・司会：そうですね。あと、伝え方もあると思うので、そこは支援方法でやっていけるとよい。
- 話は少し変わるが、課題を見て気づくことはないか。特に2つ目と、3つ目。この主語は誰か。
- ・児発管：支援者ですね。
  - ・司会：そうですね。本人の課題ではないですよ。
  - ・一同：あ、本当だ。
  - ・司会：4つ目の課題で「気持ちの切り替えスイッチが分かりづらい」とあるが、気持ちの切り替えはできにくいのか。切り替えはできるが、それを支援者がわからないのであればこれも支援者の課題ではないか。
  - ・相談支援員：そうですね。

・具体的に聞くことでパニック時の本人の気持ちを推測する意見がでてきた。



パニックの原因は、本児に制止される理由が伝わっていないこと、本児自体にも気づきにくさがあることではないかと、参加者が気づく。

・本児の「ストレスを伴う活動」についてあげた課題の半分以上は、実は支援者の課題(支援者自身の問題)であることに全員が気づく。

<p>・司会：そう思うと、1つ目だけが本人の課題なのか。</p> <p>・幼稚園：<u>気づけなかった</u>。そのとおり。</p> <p>・司会：支援者は確かに対応に困っていると思う。その中で、本人の困り感は1つ目だけか。支援者が困っている部分については、支援方法で考えていければいいと思う。</p> <p>・児発管：4つ目については、本人も気持ちの切り替えがしづらいので、本人の課題としてあがると思う。</p> <p>・司会：わかりました。</p> <p>【支援の方向性について 事業所と相談支援専門員が考案した案を伝える】</p> <p>1 支援の方向性(案)</p> <p>①言葉での表出がないので、本人の様子や行動を見て周囲が読み取る必要がある。</p> <p>②本人は楽しいことを見つける天才で工夫もできる。繰り返し行ったことは身に着ける力がある。真似や我慢する力が芽生えてきたのでそれを活かす。</p> <p>2 支援の方向性について検討</p> <p>・司会：皆さんすごく、本児のいいことをたくさんみつけている。繰り返し行くといいというのは先ほども話に出ていた。真似する力もあるので、そのあたりを活かしつつ、本人の状況を読み取りながらやっていくということですね。</p> <p>・幼稚園：楽しいことを見つけるのは天才。しかし、本人がワーッと<u>なった時は、自分もイライラしているし、本人もイライラしている。私、自分がイライラしていた。そこがいけなかった。</u></p> <p>・司会：すごい。いい気づきですね。</p> <p>・保護者：<u>園の行事が結構ストレス。いつもと違うことを、やらないといけない。</u></p> <p>・司会：そうですね。<u>本人がストレスと感じているものについて、今、保護者から行事がストレスとあったが、行事の何がストレスなのか。</u></p> <p>・保護者：<u>知らない人や知らない場所。</u></p> <p>・司会：知らない状況に急に置かれるということがストレスなんですね。他には？</p> <p>・保護者：<u>空気感。</u></p> <p>・幼稚園：<u>静かにしないといけないから、本人にとっては、なんで声をだしちゃいけないのと思うのではないか。</u></p> <p>・保護者：<u>やらなきゃいけないけどやりたくない時。</u></p> <p>・司会：やらなきゃいけないことがわかるのはすごい。</p> <p>・保護者：<u>「これをしなきゃいけない。だけどやりたくない」と泣いている。</u></p> <p>・司会：<u>やらなきゃいけない状況をわかり、自分の気持ちを添わせなきゃいけないことはわかっているのですね。</u></p>	<p>・支援の方向性の案を相談支援専門員が出し、参加者で検討した。</p> <p>・支援会議の初めに、本児の良さや強みを確認していたため、「楽しいことを見つける天才」という言葉に全員が同意した。</p> <p>・幼稚園の先生が自分の心情についても振り返り、自ら気づきを得た。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>・本児がストレスを感じる場面を具体的に考えた。</p> <p>①知らない人や知らない場所</p> <p>②静かにしないといけない雰囲気</p> <p>③やりたくないけど、やらないといけない時</p> <p>④怒られた時</p> <p>⑤やりたいことがすぐに満たされない時</p> <p>⑥いきなり注意される時</p> <p>⑦何をされるか、何をしたらいいか、わからないこと</p>
---	--

・保護者：他は、父親に怒られることがストレス。椅子に座って食べないから怒られ大泣きする。

・児発管：やりたいことやほしいことが、その場ですぐに満たされない時に強いストレスのようだ。例えば、庭で栽培しているトマトをすぐに収穫できない時。活動しているときにやりたい活動が出てきた時に、まだ時間じゃないので待てない時。

・事業所保育士：事業所で老人施設を訪問したことがあった。流しそうめんをやらせてもらった。はじめての場所であり走り回っていたので、支援員が止めようとしたら施設の職員が「このままで大丈夫」と言ってくれたので、支援員も本人と一緒に施設内を動いていた。それにより、本人は施設内に何があるか（食べ物など）を、自分で動きながら視覚で確認していき落ち着いていった。支援者が言葉でいってもそれは入らない。本人が初めて行った場所で、いきなり注意や制止（ここはさわりません、はしりません）をしても、ストレスが高ぶり、行動が大きくなる。少し時間をおき、本人が視覚で判断し納得するといい。

・保護者：自分の気持ち、ペースで落ち着きたいのだろう。

・司会：そうなんですね。知らない状況は怖いので、誰でもそうなる。自分で確認し大丈夫と安心できればいいのですね。これは、いい情報になるので支援に使えるそうですね。また、何をするか、何が起こるかわからないという事も一般的にストレスになると思うが、本児にはそういったことはないか。

・相談支援専門員：そうだ。特別支援学級の見学の時。大人がたくさんいて、知っている人は母親しかいなく、何をさせられるかわからなかった。それなのに、みんなに握手をしろといわれ、それでは本人は困っただろう。

・司会：そんな中、冷静を保てといわれても難しいですね。ギャーとなる。

・保護者：教室から脱走して、体育館に行ってしまったたり、大人もぐったりしていた。

・相談支援専門員：わからない場所で知らない人が来たら、脱走してしまうのも当たり前。

・一同：本当にそうですね。

・保護者：特別支援学校の見学の時は、脱走せず部屋の中をぐるぐる走り回っていた。何の違いがあるのだろう。

・相談支援専門員：止められてなかったのではないか。特別支援学級の時は、「座っていなさい」「見てなさい」と強制された。

・司会：初めから制止されていたのか。

・児発管：取り掛かりから制止されると、すぐに崩れる。

・司会：状況がわからない所で、いきなり強制的に制止されたら・・・嫌ですね。

・児発管：外出プログラムで、外食の際、事前に予告し、どこに行くのかを本人に伝えていた。また、店にも事前に伝え、多少歩き回っても大丈夫と言われており、職員にも心の余裕があった。初めての場所であったが、ずっと

・本児がストレスを感じる“初めての場所”でも、落ち着いた時の状況を共有した。

（視覚で確認し、納得すると落ち着いて過ごせる）

・本人視点で考えることで、本人の困り感を推測した。



“知らない大人がたくさんいる”

“何をされるかわからない”

“知らないみんなに握手してと、いわれた”

結果的に困って脱走したが、そうなるのも当たり前。

・支援会議開始直後の同様の話題では、支援者の困り感だけが出ていた。しかし、本人視点でみることで、支援者の気持ちに変化が出てきた。⇒そのような状況なら「脱走するのも当たり前」

座って食事が出てくるのを待っていた。ごちそうさまをするまで席をはなれなかった。

・司会：そう思うと、先ほどの話の本児が脱走しなかった特別支援学校は、先生が何としても座らせようという雰囲気はなかったのか。

・保護者：なかった。みんな笑顔で、本人を止める時もあるが、本人が嫌がったらすぐに離していた。だからよかったんだ。

・司会：特別支援学級の時はどうであったか。

・保護者：「座りますよ」いう圧が強かった。

・司会：同じ本人でも、環境が違えばそれだけ行動が違うのですね。

・一同：そのとおり。

・司会：今、支援方法もいくつか出てきた。「職員や大人の心のゆとり」「事前に説明する」「最初から強制しない」「本人に合わせて動いて見て、安心させる」などたくさん出てきた。これを支援の考案時に使っていけるといいのでは。

【支援方法について 事業所、相談支援員が事前に考案してきた案を伝える】

①興味のある物を通して、作業や活動を行っていく。少しずつ取り組める時間を伸ばしていく。

②我慢して取組めたら「楽しいことが待っていた！！」経験を積み上げる。

③活動の参加人数を少しずつ増やす。

④ジェスチャーなどを用いて本人の理解を促す。

⑤家庭、幼稚園、事業所で、統一したご褒美を実施する。

・司会：事業所と相談員から支援案をあげていただいたが、この内容や先ほどの話し合いの内容から幼稚園でも取り組めそうなことはあるか。また、他にも案があればあげてほしい。

・幼稚園：②の「がまんして取り組む時に楽しいことがある」ということに関して、集団活動なので、みんなと一緒にの場に長くいる（何をやってもいいがその場にいる）ということができたら、外で楽しく遊ぼうということをやってきた。そうすることで、運動会のダンスの練習も30分くらいその場でいられる。

・一同：30分その場にいられるのはすごい。

・幼稚園：これが終わったら外で遊ぼうねというわかる。

・司会：それは、先ほどの事前予告ですね。

・幼稚園：最近はわかることがとても増えた。言ったら納得してくれるので、できたら「できたね」とほめている。

・司会：情報データの中に見てほしがったり、賞賛を求めているという情報があったので、先生からほめられるという対応はととてもいいですね。

・幼稚園：保護者から「できたね」とわかりやすくすると、本人に入りやすいと教えてもらったのでやっている。それを増やしていったら、自分自身も

・支援者が“同じ子どもでも、環境が違えば行動（姿）も大きく違うこと”に気づいた。

・支援方法の案を事業所が出し、参加者で検討した。

・支援者が本児の生活年齢ではなく、本児の姿をみて成長を感じている。

・保護者が本児の状況をよく理解している。それを幼稚園と共有し、園もその効果を実感している。

本人対応がわかってきたし、本人もわかったきた。「支度が終わったらあそぼうね」というような支援を繰り返していたら、今日初めて、自分からシール帳にシールをはったとிட்டので「できたね！すごいじゃん」と言ったら本人もよろこんでいた。

・司会：1つ1つというのがいいですね。1つやったら、達成感を味わえる。園でも事業所でもほめてもらえていて、1日の多くの時間をほめてもらうようになっている。

・幼稚園：わかりやすいほめ方をするといい行動が持続している。具体的にほめていたら、自分からやることも増えてきている。水筒とひもを水筒にぐるぐる巻くことができ、それを「できたね！」とほめたら、次から自分でやれるようになったので「自分でできたね！」とまたほめた。得意げにしていた。

・司会：具体的にほめるというのはすごく効果があるのですね。

・幼稚園：生活年齢で見ずに、本児の成長という意味では本児が教室にいるだけですごいことだと思う。

・司会：できているところに焦点をあてて、ほめてもらえると嬉しいですね。

・司会：支援案で家庭と園と事業所で統一したご褒美の準備とあるが、何が一番よいか。

・相談支援専門員：ほめてあげること自体がご褒美なのではないか。

・司会：そうですね。先ほどの幼稚園の先生の話の聞くと、ほめられること自体が今の本児にとっていいご褒美であるようでしたね。

・児発管：できてきたことでは、朝の会も帰りの会も時間になると座れる時が増えてきた。この間は白玉団子づくりをやったが、こうやるんだよというと15分くらい先生のやるのを見ながら座って待っていられることもできる。

・司会：事前予告が効果的と先ほども出ていましたね。それが、口頭でいいのか、画像や実物などを見せたほうがいいのかどうですか。

・児発管：口頭だけでわかった。

・保護者：白玉団子作りは以前にもやったことがあるものか。

・児発管：前にも実施した。

・保護者：前にやったものだから、口頭だけでわかるのかも。

・司会：経験したものは、口頭の予告だけでわかるのですね。

・保護者：初めてのことは口頭だけでは無理。

・児発管：イメージがついてない。

・保護者：初めてのことは、視覚でも伝えたほうがよりわかりやすい。

・司会：ストレスを伴う作業（活動）遂行ということでは、よくよくみんなで読み込んでいくと、支援者が困っているのであって、支援者が最初によく説明し、強制せず、本人に合わせて付き添えば、新しいことでもできるということであった。

・ほめることも、具体的にほめることで、その行動が持続することに気づく。

・本児へのご褒美はほめること自体がご褒美であると共通認識した。

・事前予告の具体的方法を共有した。



初めての事は、視覚と口頭で伝える。  
経験したものは、口頭説明だけでよい。

繰り返しやってみるのもいいし、経験したものは口頭で伝えるだけでもいいという話であった。

・幼稚園：ご褒美がほめるということであったが、ご褒美（ほめ方）の仕方を統一するのはどうか。

・司会：どのようはほめ方がよいでしょうか。

・幼稚園：優しい言い方で「すごいじゃん」といい、手をたたき、目線をあわせ、タッチしておしまい。

・司会：タッチなどすることで、先生を頼るようになったと情報データにも書いてあった。

・幼稚園：効果がある。すごく頼ってくれるようになった。

・司会：事業所ではどうか。

・事業所保育士：共通のものはないが、「できたね」とや「やった」といったり、たくさん触れ合っている。触れ合うことについて、本人は嫌ではない様子。

・児発管：基本的には小さいことでもほめると言う事を職員間で共有している。

・司会：そのあたりを共有していくといいですね。

いつ、だれがということを決めていきたい。また、支援案に書いてあること以外に、ほめ方ということもでた。

事業所として、支援方法で、できそうな部分はどこか。

・児発管：どれもやっていることであるので、ほめ方も事業所の支援員に伝え共有していきたい。

・幼稚園：園でもどれもやっていける。

・保護者：基本的には全部やっている。

・司会：やっていく事が見えてきた。また、2月くらいにもう一度支援会議をしていきたい。このあたりが明らかになっていくと、入学に向けて、こんな風にするとうまくいくことが示せると、本人が新しい環境になれていくのに役に立つと思う。

### 3 感想

・児発管：園の様子は保護者から聞いていたが、直接具体的に先生から聞くことでイメージもついてきた。本人の困りというより、私たちの困りが多かったということに気づけた。そこが、明確になったことで、今からすぐにもできることがあがってきた。素敵な機会であった。

・事業所保育士：皆さんが挙げた情報をみてこんなにもたくさんいい所があるというのを改めて感じた。普段、できていることが本当にすごいことであることがわかった。子どもたちの頑張りを1つずつほめていけたらいいと思う。本児はとて素晴らしい力を持っていると感じた。

・幼稚園長：園内でも、今回の話を共有し、突然、本児の担当になった時に本児を共通理解することができていると、余裕ができ本児にあった対応ができと思うので、全職員で取り組んでいきたい。

・ほめ方を関係者で共有し統一することにした。



- ①やさしい言い方
- ②タッチなど、本児の触れ合いを入れる
- ③小さなことでもほめる

・情報を具体的に共有していくことで・・・



- ①自分たちの困り感が多かったことに気づいた。
- ②本児のできていることをたくさん見つけられた。



<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園先生：事業所の姿も聞け、楽しそうでいいなと思った。幼稚園ではやらされることが多いと感じた。</li> <li>・相談支援専門員：個人的には、誰にとつての課題かとなった時に「あ、自分が勝手に課題と<b>思っていただけか</b>」ということに気づけた。日ごろからほめることが、本児の成長につながっているということが聞けたのがよかった。</li> <li>・保護者：うちの子のために、みなさんいろいろ考えてもらい、ありがたく感じている。すごく見てくれているんだなと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援会議後には、子どもを見る目が変わり、支援方法もたくさんあがった。</li> <li>・本児の支援について、支援者は「困っている」から「支援ができそう」と気持ちに変化した。</li> </ul>
---	--

### 3 第2回支援会議で検討された「ストレスを伴う（作業）活動の遂行」に関する「うまくいく条件」「うまくいかない条件」

うまくいく条件	うまくいかない条件
<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きなこと(粘土や絵)を取り入れる</li> <li>・継続する、繰り返す</li> <li>・事前予告</li> <li>・支援者がゆとりを持って接する</li> <li>・具体的に1つずつほめる</li> <li>・楽しいと思うことを最初にやる</li> <li>・初めてのことは視覚情報を取り入れる</li> <li>・活動の流れを決めておく</li> <li>・みんなと同じ空間で過ごす</li> <li>・全体の流れを見せる</li> <li>・好きすぎるものは、事前にしまっておく</li> <li>・本児のタイミングでやる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・強制する</li> <li>・制止する</li> <li>・知らない状況</li> <li>・初めてのこと</li> <li>・見通しがもてないこと</li> <li>・怒られる</li> <li>・予測がたたない時（事前予告がない）</li> <li>・支援者とやりとりが少ない時</li> <li>・支援者がイライラしている時</li> </ul>

※支援者のゆとりを持つことがとても効果があったとの意見。また、これは本児のどの支援でも共通すると共通見解。

### 4 第2回支援会議後の感想（成果が出た理由も含む）

相談支援専門員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すごく効果が出た。他の活動と参加の項目でも効果が出たことが多くあった。支援会議で主語が本人に切り替わったので支援がよくなった。当初は支援者が困っていたから本児をどうしようとなっていた。本児が不安にならないようにという、意思統一ができたのが大きい。</li> <li>・本児はもともとやれることがいっぱいあった。支援者側ができる場面を共有し、支援方法を共有することがよかった。本児に寄り添って活動することもよかった。</li> <li>・担当した最初はどのように対応してよいかわからなかった。最初は、「年長なんだから」と考えてしまっていたが、支援会議で本児主</li> </ul>
児童発達支援	
幼稚園	

園長	<p>体なんだと気づき自分の心のゆとりにつながった。<u>本児のことも、自分のこともプラス思考で前向きに考えられるようになった。効果が絶大であった。</u></p> <p>・<u>加配の先生は、自分が支援しなければという孤独感がある。保護者も事業所の支援者も同様だと思う。みんな同じ悩みを抱えているが、一番困っているのは本児ということ</u>を共通理解できたことが、心に余裕をもてたのではないか。<u>1つ1つ検証し明確になり、支援方法も統一されたのでこれだけ効果が出たのだと思う。</u></p>
こども課(指導主事)	<p>・<u>加配の先生は一生懸命であるが故に、無理をさせてしまいがちである。このような会議で“子ども主体”と気づけ、支援にゆとりをもつてできる人が増えてくるといいと思う。</u></p>
保護者	<p>・<u>先生方のゆとりと、スキルアップが本児にとっても良い影響を与えたと思う。子どものことをとても理解していただけて、ありがたい取り組みであった。</u></p>

## 5 ケース2 概要

対象児	Bくん 小学校1年生（特別支援級）男児
診断名及び状況	注意欠陥・多動性障害 自閉症スペクトラム障害 保育園（年中）から相談支援員が関わっている児。友達とうまく行かない場面がある。各支援場面で友達に手が出てしまう。
関係機関	小学校、相談支援専門員、放課後等デイサービス（海）、児童クラブ
情報収集期間	7月下旬から8月下旬
支援会議日	①9月26日15時30分～17時10分 ②2月25日15時30分～17時10分
支援会議参加者	保護者、小学校教諭、相談支援専門員（司会）、放課後等デイサービス理事長、児童クラブ支援員、オブザーバー：福祉課発達支援係保健師、保育士
支援検討項目	1人でまたは誰かと遊ぶこと
第1回支援会議の結果等	<p>情報収集時には「ことばの習得と使用」に“困難なし”としていたが、支援会議で具体的に確認することで、実際には気持ちをうまく伝えることが難しいという課題があり、それが友達とのトラブルにつながっていることが見えてきた。支援会議の中で共有できたのが、「言葉をはっきり話し始めてからまだ2年目」であるということ。友達とのトラブルの時、上手く言えず手がでてしまうことも、原因はまだうまく伝えられないことにもあることに気づけた。それにより、支援者が本人に求めるレベルを下げる事ができた。</p> <p>多面的に情報が収集できたが、具体的な支援を立てるためには、まだまだ情報不足だった。強みとして捉えられることも具体的内容が記載できておらず、支援会議の中で現状把握確認に時間がかかった。</p> <p>学校の先生がしっかりと子どもの様子を把握していて参考になる事が多かった。</p>
第2回支援会議の結果等	<p>支援を行った結果、「本児の気持ちを代弁することで、うれしそうにし自分の気持ちを表すようになった」、「良い行動をほめたことで、その後もよい行動がみられるようになった」、「友達とのやり取りで“かして”“いれて”を繰り返すことで、すぐに言葉に出てくることは少ないがそのルールを意識しはじめた」「いつと違う流れはスケジュールを書くと、自分で動くことができた。できるようになれば口頭でも動けるようになった」「楽しい活動になると声が大きくなるので、声の大きさや話し方を伝えると一時的に対応できる」などの姿が見られるようになった。</p> <p>相手を呼ぶときの呼び名や、他児への関わりはじめの言葉についてなど、今後も支援が必要である。</p>

## 6 実際の第1回支援会議内容と解説等

実際の会議内容	会議の解説等
<p><b>【支援項目について】</b></p> <p>1 今回の支援項目検討内容の確認 『1人でまたは誰かと遊ぶこと』</p> <p>2 選択理由 他児とのトラブルがみられ、他者と楽しく遊べる環境で育つことの検討が必要であるため。</p> <p><b>【支援項目内容(1人でまたは誰かと遊ぶこと)の各機関での様子】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者：一緒に遊んでくれて、あまり本児のスペースに近づいてこない子がいい。自分のペースを保ちながら一緒に遊べる子がいい。</li> <li>・放デイ：年上（小3くらいの男児）の子に興味がある。放デイでは、その年上の子と別室に抜き出して支援し仲良くやっている。 興味がある子は、年上で本人と趣味（ポケモン、おえかき）が同じ子。興味に集中すると声はいらないが、具体的に伝えると少し落ち着く。人との距離感とは近いが、年上にお兄さんは嫌がらないのでよい。活動の中でトラブルになることはある。帰りに帰れない時もあるが、帰りたくない理由を言えるようになった。理由は遊び足りないこと。保護者の迎えが他の子より早いのが嫌だと、しっかり伝えることができた。保護者にあと15分待ってもらい、本児に15分タイマーをかけたら、さっと切替て帰れることができた。本児の思いを、お互いに妥協しあえるところで実現できるとうまくいく。<u>自由時間でトラブルになるのは、他の子が作ったものが欲しくなり取ってしまうこと。</u></li> <li>・学校：学校のペアのお兄さんも、本児のペースに合わせてくれる子なのでいい。休み時間にドッチボールの内野にいたのに、ボールが欲しかったため外野のボールを取ってしまい、他児に怒られ他児をたたいてしまった。<u>→ルールがわかっていない様子。</u>友達が作った折り紙や手裏剣が欲しくて、「貸して」といって貸してもらおうが、その後、「返して」と言われても返せなくてトラブルになる。本人的には欲しい、放したくないという思いだろう。</li> <li>・児童クラブ：夏休みの終わりころ、小3の子とレゴで遊び中、<u>本児が叩いたら叩きかえされ暴言を吐かれたので、本児が脱走したことがあった。</u>自分の気持ちが抑えられない。<u>本児は悪気がなくやったと思うが、それを相手が強く反応したのだろう。</u>本児がちょうど遊びがのってきた時に保護者が迎えに行くと、動かず帰れない。</li> <li>・福祉課B：そういう時に言葉で相手に思いを伝えることは難しいか？</li> <li>・事業所：「貸して」は言えるが、貸してくれない時は機嫌をそこねる。</li> <li>・福祉課B：「後で貸して」とかはでないか？</li> <li>・保護者：自分からは出ない。<u>言葉を組み立てて言うのは難しい。</u></li> <li>・福祉課B：負けて悔しいとかは？</li> </ul>	<p>会議の解説等</p> <p>・うまくいかない予測される原因</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>① ルールがわかっていない</p> <p>② 言葉を組み立てて言うのが難しい</p>

- ・保護者：言葉ではむずかしく態度であらわす。
- ・福祉課B：解決策も1人では難しいか？
- ・事業所：それを教えているところ。支援員が解決方法を提案すると、それをやることはできる。その時に、支援員が「今、あの子はあれで遊んでいるから駄目だよ」というとその言葉でワーッとになってしまう。その友達とどういう風に遊べるかを考えたほうがよいと思っている。支援員の声かけも「ちょっと待って」というのはよくない。
- ・福祉課A：いいお話しがいっぱいできていますが、もう支援方法に入っていますね。
- ・司会：順番にやっていきましょう。

### 【具体的な手がかりの追加や質問など】

- ・福祉課A：健康関連情報（作業療法士）に協調的に体を動かすことの苦しさがある。たくさん感覚刺激から必要な刺激を受けることが苦手という情報も手がかりとなるのではないか。  
また d540a)衣服や履物にマークを付けると正しく着ることができる。  
d220a)①～、②～と手順が書いてあると、行い忘れが減る。  
d 135) 学習する枚数を予め知らせゴールが見えると頑張れる。  
⇒事前予告や見る視点、ゴールや手順を示すなど、視覚で示したほうが、できたり、がんばれたりするのか。
- ・保護者：ゲームをやり続けてしまう時、視覚で「1番宿題、2番お手伝い、3番ゲーム」という風に書いて示したら、そのように行動できた。次からは、書いたものを見なくても行動できるようになった。
- ・事業所：順序が分かり、ゴールがどこで、それが終わればおもちゃで遊べるとなるとちゃんとやれる。ICFが始まってから、デイの中で大勢の中ではなく、3人くらいの少人数でやるようになったらできることが増えてきた。すごく見るようになった。視覚的なもの、きちんと順序立てて話すことはやっていて、とても効果がある。いつもストップウォッチをぶら下げていて、遊ぶ時間を自分で確認しながらやっている。
- ・保護者：家でもタブレットをやる時にタイマーを自分でかけてやっている。それでタイマーの把握もできる。
- ・学校：学校でも黒板にやることを張ってあり、やることがおわったらご褒美タイムがやってくる。①～、②～と書いてある。授業が終わる少し前にタイマーをかけ、タイマーがなったら終了とすると片付けができる。
- ・保護者：家では切替できないが、外でそんな風にできているならいい。
- ・福祉課A：本児の強みであり、支援に活かせるのではないか。  
d155) 他児を否定し怒っているとき、自身がされたらと問うても他児が反抗すると他害する場合がある。  
d 310 - b)相手の気持ちの理解を促すが、理解できず。

本児は、禁止、制止の言葉に反応し、状態が崩れる。

・支援会議のタイムスケジュールを事前に参加者に示しておく必要があった。

・課題への支援考案のために、情報収集した情報から手がかりとなる情報を事前にピックアップした。事前に事業所が支援会議資料に手がかりをあげており、それ以外の追加項目がないか検討した。

・頑張れたり、うまくいくとき

①視覚で示す

②手順を示す

③少人数

④タイマーの活用



・うまくいく場面(少人数だと、できる、みる)をホワイトボードなどに書かなかったので、会議の中で支援方法の考案にあまり活かされなかった。

・保護者が家以外の本児の姿を確認し、できている場面を知れた。

⇒相手の気持ちを推測させるような声かけは効果が少ないと出ているので、これも支援を考える時に念頭におくといいのではないかな。

- ・福祉課B：d155) 一番になれないルールとわかると怒れてしまうとあるが、遊んでいるときに、1番だとがんばれるとかそういうことはあるのか。
- ・事業所：1番になると気持ちがよさそう。
- ・学校：学校でも、1番や2番など順位が上の方が気分がいい。
- ・保護者：“1番”へのこだわりなくなった。保育園の時は1番にこだわっていた。
- ・学校：隣の席の子より、自分が進んでいると気分がいい。他の子と比べできていることで気分がいいが、1番にこだわるかというところでもない。テストの100点にこだわりそうになった時もあったが、保護者と学校で「がんばれば、いいんだよ」と伝えていた。
- ・福祉課A：がんばりということではほめてもらえれば、1番や100点にこだわらなくていいとなったのか。
- ・保護者：そうだと思う。

#### 【課題について】

- ・相談支援専門員：事業所と相談して、下記内容を課題の案として考えた。

#### 1 課題(案)

- ①他児と協調することが難しい。
- ②興味のあるおもちゃや人がいると近づきすぎる。
- ③興味を持つと声かけをしても入らない。

#### 2 支援の方向性(案)

本児がやりたい遊びを確認

#### 3 課題、支援の方向性についての意見交換

- ・司会：今、課題を3つあげてくれたがこれに対して意見はあるか。
- ・福祉課A：この課題は本児の苦手さの部分でもあり、なかなか難しい課題だと思うが、これ以外にも先ほど出ていた「言葉でうまく伝えられない」ということがあるのではないかな。もう少しスモールステップで低い課題から始めるといいのでは。
- ・福祉課B：ゴールがわかるとできるというのがあるので、スモールステップで友達関係も見れるといいのではないかな。言葉の組み立てがうまくいえるようになると、自分の気持ちが言えもう少しトラブルになるのではないかな。補足情報をみると、「や・ゆ・よ」が書けないとある。助詞などはわかっているか。
- ・保護者：すごく話す。自分はこうしたかったんだと訴える。普段は自分の好きなことをすごくしゃべる。
- ・学校：絵日記は自分では書けないので、担任が聞き取りながら文章にしている。

・相手の気持ちを推測させる声かけは効果が少ない。

・「頑張り」をほめてもらったことで、1番への執着が薄らいだことを共通理解。

・課題について、現状からもう少し低い課題を検討した。



「言葉でうまく伝えられない」ことが課題となるのではないかな。

・福祉課B：では、考えながら文章にして話すのは難しいのか。

・福祉課A：好きなポケモンの事を話すのはいいが、自分の気持ちなど表れてないものを言葉にするのが苦手なのか。

・保護者：そうだ。

・事業所：2～3日前のことはしゃべる。とっさの時のことは話せない。

・保護者：家では妹と普通に話す。

・事業所：感情を話せないかというそうではなく、「疲れた、やりたくない」と言える。

・司会：それは信頼している家族とか、慣れた人には言えるということなんですね。

・一同：そうだ。

・福祉課B：相手の言葉に感情的に反応してしまっているのか。

・保護者：家族以外では、そんなにひどいことでなくても悲観的に感じてしまう。

・福祉課A：そう思うと信頼関係の幅を広げるといいのか。仲良くなる子が増えていけば、その子たちと言い合っても大丈夫なのか。

・一同：そのとおり。

・事業所：事業所では、みな特性のある子が来ているので、なかなか信頼関係を築くのに難しい場合が多い。

・学校：学校も同じ。ぶつかり合うことが多い。

・福祉課B：本人の気持ちを代弁してあげるのがよいのか。

・事業所：止めて入らないといけない場面だと、支援員も「やめて」「だめだよ」と言ってしまう。禁止の言葉になってしまい、よけい本児の気持ちが乱れる。

・司会：課題のところでは、気持ちを場面であまくいえるように、まずはくみとってあげることからはじめ、だんだんと本児が言えるようになるといいか。

・福祉課A：支援の方向性として、気持ちの代弁とか気持ちを汲み取ることにしていくと、ハードルも低くなり、本児も気持ちが楽になるのではないか。情報をみると、だいぶストレスが溜まっていて苦しそうだという感じをうけていた。

・事業所：「大丈夫だよ、いつも見方だからね」というと、ニコニコしている。

**【支援方法について検討】**

・福祉課B：保育園のころから、本児は自分がうまくいかないということをしごく感じていて、わざとじゃないのにわかってくれないとストレスを感じていたと思う。

・福祉課A：そうすると、支援方法は「気持ちを代弁する」というのができましたね。

・福祉課B：「そんなつもりじゃなかったけど、でも強すぎたね」と加える

「言葉での課題」

①とっさの時に話せない。

②信頼した人以外では、言葉を悲観的に受け取る。また、感情をうまく伝えられない。

③トラブル時に支援者が禁止の言葉になる。



・禁止の言葉で本児が乱れる。⇒これも、ホワイトボードなどに記入しておかなかったので、支援方法にうまく活用できなかった

といい。

・事業所：そのタイミングがむずかしい。噛みつくのが早く、ワーツとなってしまう。その時にいっても終わってしまっている。

・福祉課A：そうならないようにするにはどうしたらいいかを考えるのが一番いい。

・福祉課B：ルールだったら先に確認するとか。

・学校：体育の授業などで先生がいる場面ならいいが、業間の友達だけの場面だと難しい。

・事業所：放デイは遊びの約束をラミネートして張ってある。1つの積み木遊びにも10項目くらいの約束がある。積み木遊びをしているときはいいが、他の子のやっている遊びに行ってしまう。

・司会：ルールの理解はできているが、やりたい気持ちが勝ってしまうのでは。

・保護者：頭ではわかっているが、衝動性が出てしまう感じである。

・事業所：遊びたいおもちゃがある時は自分で伝えることもできる。その時は、すごくほめている。

・福祉課A：学校の話にあったように、先生に「100点じゃなくても、がんばればいいんだよ」と褒められると、その行動が定着していくように、遊びたいおもちゃを自分で伝えられた時に必ず褒めるようにしていくと、その行動が定着していくのではないか。

・事業所：支援者によって、そういった行動をほめている人もいる。しかし、とっさの場合は、きつくいつってしまう支援者もいる。支援者は、子どもがいいことをした時よりも、悪いことをした時の方が目に付いてしまう。本児だけを見ているわけではないので、怒ってしまう人がいる。少ない人数の中では、ほめることができるなら伸びると思う。しかし、子どもの人数が多くて支援者が見ていられないと、何か起こった時にワツとなった時に、本児に目がいつってしまう。

・福祉課A：そうするといつも本児は怒られているような感じになってしまう。

・事業所：そうなんです。そうすると周りの子も「また怒られている」という風になってしまう。

・福祉課A：よけい悪循環ですね。学校ではほめられる場面など、どうか？

・学校：言われたことはきちんとやるので、パターンとして入るとききちんとやる。掃除なども本当は3人くらいでやるところを、他児が用事でいなくても1人できちんとできる。学習も言われたことをきちんとやる。友達との関係は、「かして」「いいよ」という言葉のやりとりの語彙を知らない、場面にあった言葉を知らないのではと思うことがあるので、教えている。ほめることでは、次の授業の教科書が出してあったら「準備できてたね」と、ほめるなど、当たり前と思うような小さなことでもほめるようにしている。

・一同：次の授業の準備をしているとはすごい。

・事業所支援者  
行動をほめる人もいるが、とっさ時はきつく叱ることもある。



・周りの子への本児の印象「怒られている子」⇒悪循環



・人数が少ないとほめることができる

・学校では言われたことはきちんとやる。パターンとして入るとよい。



・学校の先生がほめたことがよかったのではないか。

・福祉課A：先生が当たり前と思うような事でもほめていることで、積み重なったのではないか。

・事業所：成功体験を増やしてあげたいと思っている。

・福祉課B：もしかしたら、いっぱいしゃべるが、对人的場面で使う咄嗟的な言葉がわからないのかも知れない。

・学校：頭の中にたくさん言葉は浮かんでいるが、いざという時に、どの言葉を使っていいかわからないかもしれない。

・保護者：しゃべりだしてまだ2年。年中の時はしゃべっていなかった。

・福祉課A：それでは咄嗟の時に、言葉がでてこないのは当たり前か。

・福祉課B：日ごろ、母と状態のいい時に、「かして」「いいよ」などやりとりし、「言えたね」と言ったことがいい事という経験を積み重ねていくといいのでは。

・保護者：貸してもらう時に、「なんていうの?」と聞かないと、言葉が出てこない。

・福祉課A：聞いたら出てくるのであれば、それを積み重ねていくといいか。

・事業所：対大人であればできるが、子どもは難しい。

・福祉課A：段階的に出来ていくのではないか。まずは、心を許した大人ででき、次第に子どもでもできるようになるのでは。

・福祉課B：話はじめたのが2年目という、園の子たちでは自分のことが精一杯。言葉で言おうとしていた時に周りの子もワーツというので、ストレスを感じてしまう。そういったときにやり取りをさせようとすると、疲れてしまうのではないか。状態が落ち着いている普段に、貸し借りの言葉を知るのがいいのでは。

・事業所：事業所では時間が短いので難しいが、大人数から抜き出して、少人数で対応することで出来ることがある。

・福祉課A：まずは少人数からやるのはすごくいいのではないか。

・保護者：児童クラブの別館は1年生しかいないのか。

・児童クラブ：火曜日だけ1年生が行く。

・保護者：別館にお迎えに行くときすぐ帰る

・事業所：みんなが同じ時間に帰るからか。

・児童クラブ：別館(火曜日)は1年生だけなので、落ち着いて過ごせるのか。本館は1年生から6年生まで大勢きている。

・事業所：では、火曜日は児童クラブにしたほうがいいか。

・保護者：1年生同士でやりとりができるかもしれない。

・司会：今出た話だと、気持ちの代弁というのが1つある。特別なコミュニケーションを普段からやるのは難しいので、コミュニケーションを認めてあげるような関わりの中で本人の語彙を増やしていく。支援案の中で、「他児をほめることができた時は」とあるが、これはなかなか難しいので、普通のことでもできたことをほめる行動を繰り返し、よりよい行動に繋げていく。

・対人場面でのとっさ時の言葉の使い方



・話し初めてまだ2年(年長から話出す)  
・とっさ時に言葉が出ないのは当たり前。

・対人場面で言葉が出る時



①「なんていうの?」と聞いた時  
②大人が相手の時

・事業所では、少人数で対応が可能

支援方法

・気持ちの代弁  
・コミュニケーションの中で語彙を増やす  
・ふつうのことでもできたことをほめる

<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業所：具体的に小さいことでもほめていくのがいいですね。</li> <li>・児童クラブ：ほめるということが良いことと聞いたので、積極的にやっていきたい。</li> <li>・福祉課B：お友達とけんかになった時はどうする？など、1つ1つ、こんな場面はどうする？というのを、<u>落ち着いている時にやってみるといいかもしれない。</u></li> <li>・学校：本児は思っていることを口に出すのが苦手なので、<u>落ち着いているときにできるとよいと思う。</u></li> <li>・保護者：<u>落ち着いているときであれば言葉は出てくる。</u></li> <li>・福祉課A：練習することで叱嗟の時にも出てくるようになるかもしれない。<u>普段できないことは、叱嗟な時にもできないのではないか。</u>児童クラブに確認したいが、事業所、学校では事前予告やスケジュールを活用することでうまくいくということだが、児童クラブでは何か活用しているか。</li> <li>・児童クラブ：<u>日によってスケジュールが違うが、毎日、口頭では伝えていたが掲示はしていなかった。</u>今日、他のところの話を聞き、<u>掲示を考えていきたい。</u></li> <li>・司会：友達とのトラブルがなければスムーズに動いているのでは。</li> <li>・保護者：トラブルがなくても、迎えに行くと「なんで帰るんだよ」と騒ぐ。</li> <li>・司会：別館の火曜日はゆっくり遊べているのではないか。それでスムーズに帰れる。</li> <li>・児童クラブ：そのとおり。ちょうど遊びの取り掛かりの時にお迎えがある。</li> <li>・保護者：他の子が帰る4時帰りの時に迎えに行くとすんなり帰れるのかなと思う。</li> <li>・福祉課A：本児のぐずる理由を推測し、調整してみるのはいいのではないか。</li> <li>・司会：<u>支援方法をいつ、だれがやるか決めていきたい。</u></li> <li>・事業所：今、支援方法は5つか？ ①気持ちを代弁する。②生活の中で認める。③活動の流れを示す。④レベルアップカードを作る。</li> <li>・司会：①②は全員。③「活動の流れを示す」は事業所、学校ではやっているので児童クラブで、本児がわかっていない部分について、流れの掲示を工夫してくれるということでもいいか。</li> <li>・児童クラブ：大きく書いて掲示していこうと思う。</li> <li>・福祉課B：<u>どの程度言葉の理解ができているか、みんなで確認しておくといいのではないか。</u>本当はもしかしたら、「かして」「いいよ」がわからないかもしれないので、そこを共通認識しておくといいのではないか。</li> <li>・司会：本人理解のために、普段のかかわりの中で、確認したほうがよいということですね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ち着いている時に、友達との対応を確認する</li> <li>・児童クラブでもスケジュールの掲示を検討する</li> <li>・支援方法について誰がやるかを検討した</li> <li>支援案が1つ追加された</li> </ul>
---	--

・学校：友達が遊んでいるどの場面で声を掛けたらよいかという、タイミングを図るのが本人にはとても難しい。経験のある子は、感覚としてできるが、本児の中で言葉をかけるタイミングを迷っている感じを受ける。それも教えてあげたい。

・事業所：特性のある子たちの中では、難しい。

・福祉課A：先ほど学校の先生より、パターンがわかるとできるとあったので、まずはパターンを教えてそれから応用できていくといいのではないか。学校ではそんな場面があるか。

・学校：それを教えるという場面は特別ないが、日常の場面ごとに1つずつ教えていつている。

・事業所：SSTなどに通うことはしていないのか。

・保護者：言語訓練はどことも満員。結局そこに行きつく。言語聴覚士が足りない。

・事業所：予約できる場所があればしたらどうか。

・福祉課A：日常生活でのことなので、日々の生活でやっていけるとよいのではないか。保護者や先生方が十分やっているのだからそれを継続していくのがよいのでは。

・司会：そう思う。

・保護者：そうですね。年中の時のしゃべれなかった本児からすれば、すごく成長している。

・一同：そうだ。

・福祉課A：本当にそう思う。できていることに目を向けたほうが、希望も見え、伸びしろも感じるのではないか。

・事業所：そう思う。

(支援方法まとめ)

- ①気持ちの代弁
- ②できていることを認める関わり
- ③手順や活動の流れの表示
- ④レベルアップカードの作成（事業所）
- ⑤コミュニケーションや言葉の使い方の出来ている度合いを確認する
- ⑥日常場面でコミュニケーションスキルを伝える
- ⑦家族以外に慣れた友達関係をつくる

4 会議の感想

・児童クラブ：具体的な方法を教えてもらったので実践してみたいと思う。参加してよかった。

・事業所：情報の共有で子どもを共通理解し、支援を実践することで子どもの困り感を減らしていけるとよい。

・学校：4月から本児を見ているが、幼稚園年中まで言葉が出ていなかったとは知らず、今の姿からは信じられない。情報共有していくことで、本児も伸びていけると思う。

・本児は“他児に言葉をかけるタイミングがわからないかもしれない”ことを共有した。

・本児の2年間の言葉の成長を保護者が実感した。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉課B：年中から本児をしっているが、その時と比べるとこんなに成長したということに驚いている。保護者の表情も明るくなり、いろんな人に支えられてきたんだと感じた。</li> <li>・相談支援事業所：スモールステップでやっていくとよいと感じた。関係者で1つのことを共通認識していけてよかった。</li> <li>・保護者：障害がわかった時は未来への光がなかった。支援者でつながって、情報を出してくれて自分自身の気づきになったり、新しい支援者にも子どものことをわかってもらえた。光がなかった最初にくらべ、今は光を感じている。<u>将来への光が見えてくるICFだと思った。</u></li> </ul>	
--	--

### 7 第2回支援会議で検討された「1人でまたは誰かと遊ぶこと」に関する「うまくいく条件」「うまくいかない条件」

うまくいく条件	うまくいかない条件
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴールや終わりが見えるなど見通しがつくこと</li> <li>・できたことをほめる</li> <li>・繰り返す</li> <li>・共感する</li> <li>・事前予告をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉の意味が理解できていない時</li> <li>・本人の思いが通らない時</li> <li>・そのことへの理解ができていない時</li> <li>・見通しが持てない時</li> <li>・失敗した時</li> </ul>

### 8 第2回支援会議後の主な感想

相談支援専門員 放デイ 学校  児童クラブ 福祉課  保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本児が、<u>各場面で姿が違うことがわかりよかった。</u></li> <li>・<u>支援者が集って話せるのがよかった。</u></li> <li>・学校だけの姿しか見ていなかったが、<u>他の場所の姿がわかったのがよかった。</u></li> <li>・<u>他の支援員にも内容を伝えたい。</u></li> <li>・<u>本児の成長が目に見えてよかった。</u></li> <li>・保護者が明るくなった。それを見れてよかった。</li> <li>・自分の知らない情報がつまっていたので新発見が多かった。<u>ICFがあるからたくさん話せる。</u>支援者は大変だったと思うが、親にとってはとてもよかった。<u>トラブルがあっても、次にどうしたらよいかわかりよかった。</u></li> </ul>
---	---

## 9 ケース3 概要

対象児	Cくん 小学校6年（普通級）男児
診断名及び状況	<p>診断名：自閉スペクトラム症、注意欠陥多動症</p> <p>できることが多く一見すると問題がないように見えるが、尋ねることの苦手さがあった。「頑張れば出来る子」というふうにつえられ、それが本人の辛さになっていた。アナログ時計を見て時間を把握することが苦手で、授業や放課後の終わりがわからず不安感が強くなっていた。</p>
情報収集機関等	保護者（母親）、小学校担任、放課後デイサービス(海)、相談支援専門員
情報収集期間	7月下旬から8月下旬
支援会議日	<p>第1回目：9月17日16時～17時45分</p> <p>第2回目：2月20日16時～17時45分</p>
支援会議参加者	保護者（母親）、主治医(2回目のみ)、小学校担任、放課後デイサービス、相談支援専門員、福祉課発達支援係(司会)、オブザーバー学校教育課、企画・推進委員長(2回目)
支援検討項目	時間など日常生活の中で必要な計算をすること
第1回支援会議の結果等	<p>学校は、本人の時計の課題をわかっていなかったが、ICFシステムの活用で、本児の時計にかかわる問題が課題化できた。またアナログ時計が読めないで、次の行動への不安が高いこと、不安を取り除く支援が必要ということなどを共通認識し、支援方法を検討できた。また、5年生まで嫌がっていた勉強をやるようになったのは、学校の先生の“やれていることは認めほめ、できていないことは、はげまさずに方法を教えた”結果であり、その方法を今回の支援にも取り入れることにした。また、学校では頼られることが減り、自信がなくなっている事を共通理解し、それについての支援も検討した。</p> <p>普段の担当者会議では、学校や事業所の状況を確認するだけで支援方法の検討はできておらず、結論までたどりつけていなかった。今回のICFシステムの活用で一つの課題を掘り下げての検討ができた。</p>
第2回支援会議の結果等	<p>「教室にデジタル時計を設置することで、時間に関する不安感が減少しトイレにも行けるようになった」「通級指導で時間の長さを反復練習することで、アナログ時計を読む力がついた」「毎日の時間割を書く係をまかされたことで、1日のタイムスケジュールを理解することができた」など、時計を読むことに関しては大きな効果があった。</p> <p>しかし、4月から中学校に進級することもあり、現在、本児が不安な状態があることも共通理解した。主治医から本児の抑うつ状態への治療方針を伝えて頂き、支援者が本児の気持ちを推測し、各機関でできることを検討した。</p> <p>中学校への支援の引継ぎの必要性を共有した。</p>

## 10 実際の会議内容と解説等

実際の会議内容	会議の解説等
<p><b>【支援項目について】</b></p> <p>1 今回の支援項目検討内容の確認 『時間など日常生活の中で必要な計算をすること』</p> <p>2 選択理由</p> <p>①時間の把握や管理が出来るようになることで、学校での放課を充実して過ごせたり、安心して活動に参加できる。</p> <p>②中学進学に向けて時間の管理ができるようになるとうい。</p> <p><b>【支援項目内容(時間に関する事)の各機関での様子】</b></p> <p>(学校担任)担任の認識として、時計が読めていないという認識はなかった。集団生活の中で守らなければいけないことはわかっている子である。普段から6年生は時計を見て行動しチャイムがなった時は全員座ってないといけないが、Cくんは周りの雰囲気を感じて、声かけがあつてやれていたのだと思う。それだけ学校生活の中でやれるように頑張っていたのが今回わかつた。</p> <p><b>【支援項目内容(時間に関する事)の情報収集時以降の様子】</b></p> <p>(保護者)夏休み明けは、学校に行く時間を気にするようになった。「間に合わないから」と今まで以上に登校時間が早くなつた。夏休み前の登校時間の40分前に行つたほうがよいかと確認してくる。何かやるこゝが増えたのか? どうしてなのか?</p> <p>(学校担任)特に増えてない。</p> <p>(学校教育課)早く行つた事で良い結果があつたなどポジティブな理由なのか、遅れると困るなというネガティブな理由なのかを考えていけないといけない。時計が読めて見通しが立つことが必要。時計が読めるというのは2~3年生で行う。学習面ではそれを通級の先生にやってもらつたほうがよい。もう一つは量的なこゝ(5分はこれくらい)を伸ばしてあげる必要がある。</p> <p>(司会)その支援方法を今からみんなで考えていきたい。</p> <p>(保護者)絶対に間に合うから安心するのかもしれない。</p> <p>(司会)その辺りのこゝも、よい方法が出てくると良いと思うので皆さんの意見を頂きたいと思う。</p> <p><b>【具体的な手がかりの追加や質問など】</b></p> <p>(学校教育課)一番気になるのは、時計のこゝより、医師の診断所見に書いてあるように本人に負担感があるということである。通級で本人の様子を見たときに、通級の先生がどうするかを何回かゆつくり確認し、ほとんど100点がとれていて、すごくよく確認していると思つた。本当は困っているこゝはそこなのかと思つた。</p> <p>(司会)情報のd161)にあがつているこゝと同じ内容ですね。またd150)の内容も同じようなもので、手がかりになるのではと思う。他</p>	<p>学校担任が本児の頑張りや苦勞に気づく。</p> <p>情報収集時以降のこゝの確認の時間が相談になりかける。</p> <p>本日の支援項目以外に気になる項目が抽出される。</p>

に何か補足情報への質問や追加の手かかりなどはあるか。

(意見特になし)

(司会) 補足情報で「放課に外遊びにいけない」とあるが、Cくんは何をすると放課が楽しく過ごせるのか。

(保護者) 本人が6年生になった時に、「誰もしゃべる子がいない、遊ぶ子がいないから行きたくない。」といていた。6月くらいに消しゴム飛ばし遊びに入れてくれるようになった。しかし、放課が終わるチャイムがいつなるかわからないから、声をかけられない。

(司会) 放課の残り時間がわかれば声をかけられるのか？

(保護者) 時間の長さがわかっているかどうか。家では、あと30分がどのくらいの長さがわからないので、声かけがないとわからない。

(司会) 友達と遊ぶのが楽しいのか。

(保護者) そのようだ。

(放デイ) 事業所でも好きなレゴを出し、同じくレゴが好きな子と楽しそうに作り合いをしている。チャイム着席ではなく音楽がなったら片付けることにしており、それをするとスムーズにできる。

(司会) 時間の感覚がわからないのであれば、チャイムが鳴る前に座っているのはむずかしい。

(学校担任) 昨年度まで音楽付きであったが、時計を見て動ける子どもを育てたいと、今年から短い放課での音楽はなくした。20分の放課はある。

(保護者) だから不安が出てきて短い放課は遊ばないのは、そういうことか。長い放課は室内にいると音楽が聞こえる。外からみんなと一緒に走って教室に戻るのが苦手なので、そこも時間がかめないので抵抗がある様子。

(放デイ) 帰り仕度時間を15分とり、15分前になると音楽を鳴らしていたので、それがCくんにとっていい切り替えになっていた。

(保護者) 学校ではそうはいかない。

(司会) だんだん状況が見えてきたように思う。

もう一点、確認したい点がある。d230) 忘れ物が頻回とあるが、どのように持ち物を覚えてきているのか。

(保護者) 毎日、教科書は全部持って行っている。仲のよい保護者がいつもおたよりを写真送付してくれる。それで学校の行事や予定を知る。また、必要な用具(絵の具や習字道具)も教えてくれる。

(司会) 連絡帳は書いているのか。

(保護者) 連絡帳は書くが、学校に忘れてくる。

(学校担任) 連絡帳は毎日チェックするので、記入はしている。

(保護者) 夜、連絡帳を忘れたことに気づいた時点で何度か学校に取りに行ったことはあるが、時間が遅いとあきらめる。宿題を学校に忘れた翌日は、わかるとこだけでもやりたいと、「朝早く行く」という。

アナログ時計が読めないため、放課の終わりがわからず、次の行動(友達に声をかける)ができないこと、時間の長さがわかっていないことを共通理解した。

本人は時計が読めないので、音楽で放課の終わりを把握していたことを共通理解した。

忘れ物の原因は連絡帳を学校忘れてしまうことである。

門が開く時間を知っている。

(司会) 忘れ物で早く行く事もあるのか。

(保護者) そういう日は、前夜から早く行くという。

(司会) 他に何か確認したいことはあるか。

(学校教育課) 今、「忘れ物」と「時間」の2つの事に絞られてきている。時間のことは、時間という事だけでなく、時間の中で、人がどう判断し、そして自分はどうやって動くと安心し人にも迷惑をかけないのかというような経験をしているのではないか。単純に時間が読めればいいのか音が聞こえてこうなればいいのかということだけでなく、いい課題に挑戦している。

(放デイ) 周りの様子はすごく伺っている感じはあり、職員のこともよく見ており、お手伝いをしてくれる。低学年の子の面倒をみしてくれる。短時間で、流れが決まっているのでその中であれば、人のことをわかっている。

(司会) いろんな手がかりや、いいところもたくさん出していただいた。

時間の事に関して、いきなり全てできるわけではないため、スモールステップでやっていく事になると思うが、どこからやっていったらよいかを議論していきたい。

#### 【課題、支援の方向性について】

(保護者) 毎朝、学校で授業以外の行事で何があるというのを聞いて登校する。それを自分(母)がわからずに教えてあげられない時は、本人は足取りが重い。全校朝会など、長時間同じ場所にいるのが大変なようである。避難訓練なども、実施することはわかるが、いつやるか、何をやるかわからないので不安になっている。

(司会) 事前にわかっていると安心するのか。

(保護者) そのとおり。その日の自分の流れがわかっていると安心する。

(司会) 学校の先生と本人だけでなく、保護者もわかっているとサポートできるということによいか。

(保護者) そのとおり。

(学校担任) 行事がのっている学年たよりを本人が家に持っていけないのが課題となっている。本人を通して保護者に伝えるのも、伝わらない可能性が大きい。学年便りを出すタイミングでアップしているので、小学校のホームページを見るのが一番よいのではないか。

(司会) それは、もう支援方法に入っている。保護者が学校のホームページをみるということがいいのではないかということである。

#### 【支援案について】

(司会) 相談員と事業所が出した案について確認したい。

(放デイ) 支援案を説明。支援案の③ではタイムスケジュール表をみ

課題が「忘れ物」と「時間」にあること、そして本人はどう動くかと安心し、人に迷惑をかけないためにはどうすればよいかを考えているのではと本人の状況を推測し、共有した。

短時間で、流れがわかっていたらお手伝いをしてくれる。

本人はその日の流れがわかっていると安心する。

母が学校行事を把握できれば、本児へ事前に伝えられる。連絡帳を忘れることに対して、ホームページを活用することの提案

生活の流れを理解するため、デジタルとアナログ時計の活用について

<p>るのが負担感があるなら、時計でも良いと思う。事業所のタイムスケジュール表はデジタルとアナログの時計の絵を書いて表示している。</p> <p>母が3年生まで家で使用していたと聞いている。</p> <p>(司会) 家でスケジュール表をやめた原因は何か。</p> <p>(保護者) 下の子がはがしていってしまうから。本人の通りにやることを見える化していた。何時になったら朝のトイレなども書いていくことで、習慣化でき、できることが増えてやめた部分もある。</p> <p>(司会) できることが増えてやめていくのはいいこと。</p> <p>(放デイ) やらないといけない時間までをタイマーをかけることでうまくいく。</p> <p>(保護者) 音楽や歌が好き。音にいい影響があるのかわからないが何でもタイマーでお知らせしている。目覚まし時計を使って、ゲームの時はこの音などと音の区別で時間を管理している。</p> <p>(司会) 学校では、他の児童もたくさんおり事業所のようにはいかないこともあると思うが、この案を聞き、何かやれそうなことはあるか。</p> <p>(学校担任) Cくんが学校で頑張っている状況で、言葉は悪いが自分には困り感を感じていない。それと反比例するように、Cくんの不安感が高まっている状況。結果としてはできているが、その分Cくんは不安感を感じているため、不安を取り除く支援をするというのかなと思った。何がいいかという具体的な思い浮かばないが。</p> <p>(司会) 先生がすごくいいことを言ってくれた。実は主治医の先生が本日参加予定であったが、所用で欠席となったが、みなさんへの伝言を賜っていた。いいタイミングなので、この状況で伝えたい。</p> <p>4つあり、1つ目は、発達に凸凹のある子は一瞬は頑張れるが、長くは頑張れない。その特性をわかってほしい。2つ目、普通のできる子は20の力でやれていることを、この子達は120の力を出さないとできない。それだけがんばらないとできない。結果だけではなく、どういう具合で頑張っているかをみて欲しい。3つ目は、今回のことでもそうだが、生活年齢で考えず、時計が今読めなくても5年後にはできそうだから、それでいいという風に少し広いスタンスでみて欲しい。最後は、普通の事でもできたらほめてほしい。と、言われていました。</p> <p>それを今、先生が感じられてすごいなと思った。</p> <p>本児も結果としてはできているが、120の頑張りをしていたのだとこれまでの話を聞いていて思った。だから、学校が大変なところと考えてしまったのではないか。時間の事も1つの要因だと思う。だから、こういう時間のことで少しでも不安を取り除いたり、がんばっているんだと支援者が知る事で、何か変わってこないかなと思う。</p> <p>(学校教育課) 先生は何が一番不安か聞いた事はあるか。そういう話を本人としたことはあるか。</p>	<p>てそれぞれの方法を確認</p> <p>家や事業所ではタイマーの活用で時間管理しうまくいっていることを共通理解した。</p> <p>学校担任が、本人の不安を取り除く支援の必要性に気づく。</p>
---	---

(学校担任) トラブルがあった時は何が一番嫌だったか、とは聞く。  
(学校教育課) 「何に困っている？」とか、「今日、何か嫌な事あった？」という声かけはどうか。  
(学校担任) そういう声かけはしたことがない。  
(学校教育課) それが強化になってしまうといけませんが・・・。  
(司会) そうですね。今回のこの一例の時間のことだけでいうと、支援者や保護者の方から情報を出してもらった中で、まず1つ目はアナログの時計をみるのに苦労して、頑張っていることがわかった。  
(保護者) 4時から5時になる時などの短針が特にわからない。ご飯がでると、「これって何ご飯？夜ご飯？昼ごはん？」と聞く。「夜ご飯だよ」と聞き、それで「じゃあ、今から5時になるんだ」と判断するようだ。そのため家では、アナログとデジタルを同じ所においている。  
(司会) それだけで、アナログをみてもデジタルで答えがわかり、安心するのかもしれないですね。不安を取り除く一案になるのか？  
(保護者) そのとおり。  
(司会) 学校では、デジタルの時計を置くのはむずかしいか？  
(学校担任) タイマーもおいているので、本人がみえるところに、デジタル時計を固定する事は可能。  
(学校教育課) デジタル時計をテレビの横においている教室もある。また、タイマーは、自分も時間管理でいつも使っている。夢中になってしまう時に役立つ。本児も家でそういうことをやってくれている方向性の中に、学校があるといいと思う。デジタルをおいてどうなるか、実験してみてもいいと思う。  
(保護者) よければ家にたくさんあるので、置いても良いというのであれば家の時計を持ってくる。  
(司会) おいてみてどうなるか、状況をみたらどうか。  
(一同) それがいい。  
(保護者) 本児が不安な授業は、授業の始まりからできないことがあると、アナログの時計では、あと何分あるかわからず、授業に集中できず時間が長く感じて苦痛になる。家でも宿題がわからないと同様になる。そのため、時間の目安をデジタルとアナログ時計で頑張る時間を決め、その時間やってもわからなかったら先生にできなかったことを言おうと提案している。だから、授業の早い段階でわからないことが来て、先生に「寝ちゃダメだよ」と声をかけられると「わからなくて僕は頑張っているのに、先生が怒ってきた」と、捉えてしまう。先生はそういうつもりでないと本児に伝えてもわからない。時計があって、頑張る時間のメドを教えてもらえれば、そこまではやるのではないかと感じている。できる時は、きちんと座っている。  
(司会) デジタル時計を使って、どういう風になるか様子をみながら

本人がどのくらいアナログ時計を読むことに苦慮しているのかを共通理解した。

学校の教室にデジタル時計を置くことを試みることになる。

組み立てていくといいのでは。

(学校教育課) すごくいいアイデアだと思う。時計をかしてくれる際に、本人が決めたかのようにやってくれるといい。思春期前期に入ってくるので、自主的に自分が持ってきたという風になるとよいと思う。保護者の方がすごく上手に子どもさんの意見を吸い上げたり、様子をつぶさに吸い上げているから、画期的にいろんなことがわかった。すごいと思う。

(放デイ) 本児だけ、デジタルの腕時計を持たせるのはどうか。

(保護者) 修学旅行の際、時計の係りではなかったが、腕時計を自らつけていったが、それで安心して行動できたのだと思う。しかし、学校では本人だけつけるというのは、難しいと思う。

(学校担任) 腕時計はちょっと難しい。

(司会) では、教室にデジタル時計を置く事で、どうなるかみていけるといいか。また、先ほど出ていたタイマーがいいという案がでており、家や事業所では活用しているということであったが学校では使えそうな場面はあるか。

(学校担任) 毎時間使っている。

(学校教育課) タイマーがあることで、他の児童もよくわかる。

(保護者) それを2個とかはできないか。5分前に1回なると、本人は安心してできるが、1回しかならないと、それが気になりできない。あと15分後とかがわからない。

(学校教育課) 学校では、そんなに長くやらない。3分とか、5分とかの間隔でタイマーを使う。

(保護者) それなら大丈夫。

(学校教育課) それでできない子もいる。一般的にも課題が5分とかで出来なくても一旦区切りなさいというのが一般的な指導法である。あくまで一般的だが、その5分で3割くらいの子はできない。そのため、その5分で絶対できなくてもいいということが、本人に伝わればいいのではないか。

(司会) そこが本人は絶対やらなければならないと考えてしまうと、不安になるということか。

(一同) そのとおり。

(学校教育課) 保護者からのいいアイデアで、そういう言葉がけをすると少し不安が解消するのではないか。

(保護者) それと、先生が「あと残り30秒とか」と言っていると思うが、それが時計と先生の声かけとタイマーの音があると少しは不安がやわらぐのではないか。また、最近はや領がよくなった。以前は、問題をとにかく埋めなきゃいけないが、埋められないところがあるととにかく不安と自己嫌悪で、「やらない」となり、テストも書かなかったが、6年生が始まって、最初はできないところがあると提出しな

タイマーの活用について検討

家庭でのタイマーの活用方法を共有

学校での現在のタイマーの活用方法を共有

声かけの具体的な方法についても検討

かったが、先生が上手に声かけしてくれたり、周りも優しい子が多いおかげで、全部うまらなくてもいいということがわかってきて、漢字テストも頑張っって繰り返してやっていた。

昨年までは解答欄が埋まらなくてやらずにいた。繰り返し、埋まらなくてもいいということを感じた。

(司会) それは、6先生になってからよくなったのか。

(放デイ) そのとおりで、6年生になってから勉強するようになった。

(保護者) 先生の「大丈夫」という声かけで、安心して取り組めるようになった。

(学校担任) そういってもらえるとうれしい。

(保護者) 昨年は宿題の回答欄に「死ぬ、死ぬ、死ぬ」と書いて学校に持っていったり、それを持っていくと注意されるから、次は鉛筆でそれを黒くぬって持っていったりしていた。学校だけでなく、塾でも空欄な部分があることがダメだったが、だんだんと、わからないところは空白にして出す事ができるようになった。

(司会) 先生の声かけはどのようなものが有効だったのか共有したい。

(学校担任) 宿題に対して、提出しない事はいけないが、出したものに対しては何もいわない。学校にくと、答えがはってあるので、それを赤で本人が書いている。真っ赤な時もあるが自分は何もいわない。それで十分かなと思っている。自分の声かけというより、本人の成長の中で許容が0か100から、70でもいいとなったのが大きいと思う。

(司会) 70でよくなったのは、先生の関わりが影響しているのではないか。

(保護者) そのとおり。今までの先生は、宿題を提出しても、丸付けができていないと返ってきてしまい、本人が不安になっていた。今までの先生は空欄の部分を『一応、ここも解こうよ』と言われたが、本人には『書きなさい』としか聞こえないらしい。「これ以上わからない」となって、イライラしたのかもしれない。しかし、現在の先生の『答えを見て書いておいていい』という言い方が本人には負担がなかった。わからないところは、赤で書けばいいんだとなった。

(司会) 今の保護者の話を伺うと、杉原先生は100ではなくてもやったことを認めてくれているので、そこがすごくいいなと感じた。できてなくても、やったことを認めてくれたので、「ぼく、できた」となった。次に、できないところは答えを写すという方法を教えてくれたのが素晴らしいと思った。

(放デイ) 昨年までは、絶対に宿題をやらなかったのが、6年生になってから、先に宿題をやるようになって驚いていた。何が起こったの

6年生になって、宿題をするようになった背景を掘り下げて確認



現在の学校担任が、宿題でできないところがあっても出したことを認め、できないところはどうしたらよいかという方法を教えてくれた。それが本人支援には効果があった。

事業所に通うことの本人の好影響について共通理解した。(学校では頼られることが減り、自信がなくなる) 本人の友達に対する気

かと思っていた。

(保護者) 頼られる事は好きだが、できない事が多いので、学年が上がってくると頼ってもらえることが減ってきて自信がなくなってきた。しかし、事業所では頼ってもらえるので、自分の自信には繋がっていたので事業所には通わせたいと思っている。学校でも、今年、支援級から戻ってきたし、4年生(普通級)の時は突然怒りだしていたので、周りの子も最初声をかけるのに抵抗があったよう。

これまで一緒に登校していた子も、周りの子に「(本人と)何しゃべっていたの」といわれるので一緒に登校できないといわれた。本人の中でも声かけが苦手になっていた部分もあった。しかし、周りの子が「消しゴムを貸して」といわれたことがすごく嬉しくて、ちょっと頼られているという思いが出てきたよう。おそらく、借りた子はそこまでの思いはなかったと思うが、本人的にはとてもうれしかったようだ。それもあって、学校にいけない。

(司会) そうですね。今日の時間の話しとは少しずれてしまうが、先ほど保護者が言われたようにお手伝いが得意なので、それを活かせる事は何かないか。

(放デイ) 本当にお手伝いは得意。何か係りとか。

(司会) さっき主治医の先生の言葉でほめられることになり、学校生活が少しでも楽しいものに繋がるといいと思うがどうか。そこを最後決めて、今日は終わりにしたい。

(学校教育課) プリントを机の中に置いてきてしまうようだが、例えば、帰りの会で、机の中に残ってないか声掛けする係りとかどうか。それで「上手に声かけてくれたね。」など上手に伝え、本人が机を見るのを癖になり、しかも頼られるといいのではないか。保護者からも、「担任の先生から連絡があって、係の仕事をちゃんとやっているんだってね」などと伝えてもいいのではないか。

(司会) その子の長所が生かせる係がいいですね。

(学校教育課) きちんといろんな事が読めるお子さんなので、行事を読む係とか、いろいろある。

(放デイ) 学校の先生といろいろ相談するといいい。

(司会) こちらが良かれと思っても、本人が苦手なことだといけないので、本人も交えて考えられるといいいのか。

時間の事に関しては、デジタル、タイマー、声かけの3点セットはとても良いとのことだったので、支援方法に付け加えていくといいいですね。

(学校教育課) 時間や時間の見通しは、通級の先生にやってもらえるといいい。

持ちを共有した。

本日の課題とはずれるが本人の自信への支援について検討

時間に関しては、デジタル時計、タイマー、声かけを中心に支援を確認。時計を読むこと、時間感覚については、通級で支援を実施する。

## 1 1 第2回支援会議で検討された「時計を読むこと」に関する「うまくいく条件」「うまくいかない条件」

うまくいく条件	うまくいかない条件
<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人に余裕がある</li> <li>・見通しを持つ</li> <li>・繰り返し行う</li> <li>・見える化</li> <li>・継続する</li> <li>・周りの子の様子が見れる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人に余裕がない時</li> <li>・継続しない</li> <li>・がまんさせる</li> <li>・見通しが持てない</li> <li>・不安な状態</li> </ul>

## 1 2 支援会議後の主な感想(抜粋)

主治医	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院では本児の一部の姿しか見ることができないが、普段支援してくださっている方の見方や姿勢、困り事が聞けた。今後より一層、本児を取り巻く環境を踏まえた助言、介入を考えられるようになった。<u>支援者が、本児を大切にしてくれていることがわかりうれしかった。</u></li> </ul>
相談支援専門員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分も相談支援をやっているが、<u>表面的なことしか分かっていなかったな</u>と思った。保護者の話を聞き、家ですごく頑張っていたということが改めてわかり、感動した。初めは新しい取り組みなので不安感があったが、<u>話し合える時間が有意義であった。</u></li> </ul>
放デイ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>本児の立場にたて考えられたのがよかった。</u>事業所での様子を保護者だけでなく、学校や他機関に伝えられたのがよかった。</li> </ul>
学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここで情報共有させてもらい、<u>本人がどう思っているかひしひしとわかり、それが一番よかった。</u>本児の苦手さが見えてきた。放デイでの様子や対応がわかり、どんな支援だとできるかということを知り、学校でできそうな支援を考えられた。学校、放デイ、それぞれのできること、役割がわかりよかった。・支援機関の連携、情報共有の大切さを実感した。<u>中学校への引継ぎをしっかりとやっていく必要があると実感した。</u></li> </ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みなさんでこのようにいろいろ考えて過ごしやすくしてもらえることは、本当に助かることであり感謝している。 <u>今まで1人でがんばってきたことを、支援者の方と共有できたことがありがたかった。</u>他の子にも是非役立ててほしい。</li> </ul>

### < 3 ケース全体のまとめ >

【視点の変化】・ICF システムの情報に基づいた支援会議を実施する中で、支援者が本人視点で考え本人の困り感を推測するようになった。

・子どもの姿だけでなく、環境との関係を考えられるようになった。

【支援方法の考案】・うまくいっている場面から支援方法を考えられるようになった。

【他機関との連携】・他機関の役割を知り、本人の生活の中で、支援者それぞれが役割分担を考えられた。

・支援に対する考え方の統一ができた。

【支援者保護者の意識の変化】・子どもの対応に困っていた支援者が「支援できそう」という意識に変化した

・情報や支援方法の共有ができ、保護者も支援者も孤立感の解消につながった。



(子どもへの効果)
・これまで個別で、保護者と学校、保護者と支援施設は調整しているが、それではなく全員が集まることで、いかに劇的に子どもを変えたかがよくわかるすばらしい実践である。
・ICFを活用することで全体のコミュニケーションがよくなり、子どもの問題の起こり方も変わってくる。
・環境調整、合理的配慮を提供することで、伸びしろが伸びてくる。
(保護者支援)
・学校で問題がないと言われると、家庭の困り感だから保護者としては伝えにくいですが、ICFシステムの活用で保護者は困り感を出しやすくなる。
・支援会議で情報共有でき、保護者の孤立感が解消される。
(地域支援体制の充実)
・現状として他機関と支援会議をする機関が少ない。子どもの上手くいく条件、上手くいかない条件を引き継ぐことは、ICFシステムに限らず、普段の支援に重要なことである。
・現状は各支援者の子ども理解の違い、まなざしの違いがある。支援者同士の意見の違いをぶつけていくためにICFを活用できるとよい。
・現在多くの支援者は困難性の根は、子どもの中にあると染み付いているが、ICF研修やICFシステムの活用で場面や環境との関係で子どもを捉えられるようになるとよい。
(課題や工夫点)
・情報は具体的な記載が必要で、過去についての情報も大事。それぞれの項目に対する記録が時系列に積み重なっていくとよい。
・個別の支援計画とどのようにリンクさせていくかが気になる。
・とてもよい方法であるが、今後どのように継続していくかが課題。
・支援者が変わってもICFの情報を引き継いでいく体制づくりが必要。
・ICFを使っても、次に繋がっていかないといけない。成人期まで繋がれるとよい。

図6-5b ICF研修の効果と課題、ICFシステムを活用したモデルケースの効果と課題(2)

(7) 考察

ア ICF研修とICFシステム活用により支援者のスキルアップにつながった。

(ア) 情報収集の質の向上

ICF研修の実施により、情報収集の際のポイント(具体的に、ポジティブに記入する、場面とセットで把握する)や支援考案のポイント(具体的な情報に基づき考える)を学ぶことができた(表5-1、表5-2より)。ICFシステムの

活用で、子どもに対しての新たな発見や気づきを得られた（表5-7、表5-8より）。情報収集の際のポイントは、ICFシステムの活用に限ったことではなく、普段の支援に重要なことである。また、共通の網羅された子どもの情報（ICFシステム）の収集方法を研修で学び、それを実践で活用することにより、子どもの姿を見る視点のスキルが向上した。

#### (イ) 支援会議の質の向上

今回のモデルケースは全てこれまでも担当者会議を実施していたが、各機関の状況報告をするだけで終わることが多かった。しかし、ICFシステムを活用し共通の網羅された情報内容で支援会議を実施することで、意見を十分にかわすことができ、子どもの困り感やどの場面で支援が必要なのかに気づき、それに対する支援方法を考案できるようになるなど、支援会議の質が向上した（支援会議の議事録内容の分析、図5-2、表5-9より）。

#### (ウ) 支援計画、支援の質の向上

子どもの強みや苦手、困り感に気づくことで、支援計画が作りやすくなった（図5-2より）。支援計画の質が以前よりも向上し、支援者間で共通に思い描けるようになり、より具体的で生活適応の改善に役立ち、評価しやすい内容になり、合理的配慮に記載も増えるなど支援計画の質が向上した（表5-9、表5-11、図5-5より）。本人視点にたって考えられるようになり、環境と結び付けた支援や助言ができるようになるなど、支援の質も向上した（図5-5より）。

### イ 多領域連携（家庭・教育・福祉の連携）に効果があった。

ICFシステムを活用することで、立場や職種が違っていても支援者側が子どものできる場面と支援方法の共有、意思統一ができ、多職種連携が効果的に実現された（支援会議の議事録内容の分析、表5-4、表5-7、表5-8より）。これまでは家庭・教育・福祉のそれぞれの場所での問題としてとらえやすかったが、ICFシステムを活用し一同に会することで問題が何かがわかった（図5-5より）。

#### ウ 子どもに対してよい効果があった。

5 か月間の支援の実行で、支援課題、生活の改善がある程度解決、改善した（表 5－10 より）。

ICF を活用することで全体のコミュニケーションがよくなり、子どもの問題の起こり方がかわってくる。環境調整、合理的配慮を提供することで、伸びしろが伸びてくる。ICF を活用した支援会議を実施した結果で子どもの姿が大きく変化した（図 5－5 より）。

#### エ 保護者支援に効果があった。

ICF の情報を見て、保護者が子どものできていることに気づき、子どもの見方が変化した。ICF システムの活用で精神的なゆとりが生まれ、考え方が前向きになり、明るくなるなどの変化があった。また、保護者自身も支えられていると感じ、支援者への感謝の念がわいた（図 5－1 より）。

ICF システムの活用で、家庭だけの問題ではないことが関係者で共有され、保護者が 1 人でがんばってきたことを、支援者と共有でき保護者の孤立感の解消につながった（支援会議の議事録内容の分析より）。

#### オ 地域の支援体制づくり

現在、多くの支援者に染みついている“困難性の根は、子どもの中にある”という考えから、ICF 研修、ICF システムの活用により、支援者が子どもを見る視点が変わり、場面や環境との関係で子どもを捉えられるようになってきた。また、情報収集のスキルアップや支援会議の質の向上、多領域連携の強化、保護者支援の充実にもつながるなど、地域の支援体制の充実が図られた。「共通の網羅された子どもの情報（ICF システム）の活用」と「共有する場（支援会議）」の設置が、今回の結果に奏功したと考えられる。

## カ 課題と今後の展望

今回のモデル事業においては、成果も多かったが課題もまだいくつか残されている。以下はその課題と対応策を示したものである。

### ICFシステムの普及への課題と対応策

課題	対応策
①普及の広げ方や規模	①5年間限定で、普及事業を展開（活用する事業所へアセスメント料として費用の支弁） ②対象児は少しずつ増やし、支援者側も「やってよかった」という実績を作り徐々に広げていく。
②対象児の選定	・5年間は対象児の選定基準を決める (①～③を満たしている児) ①市内に住所を有し、児童発達支援または放課後等デイサービスを活用している ②不適応行動などがあり、関係機関の協力体制を得たい児 ③保護者の同意がある
③システムを活用する事業所のICFへの理解促進	福祉課が実施するICF研修(3日間)に参加する。 (事業所がICFシステム活用する際の条件とする。)
④情報量が多い	①ICF発達障害コアセットの活用 ②事業所等で、 <u>日々の記録用紙の工夫</u> ③ICF研修に保護者への <u>聞き方のスキル</u> も盛り込む
⑤支援会議時間が長い	① <u>情報を具体的に書いておく</u> （確認時間の削減になる） ②ファシリテーターの仕方の工夫（ICF研修の前半にいれる）
⑥医療関連情報、健康関連情報の依頼の仕方 (医師やコメディカル)	・事業所、碧南市連名の依頼文を保護者が病院等へ持参し、依頼する。 ・文書料はでない。

## 付録

### 1 企画・推進委員会の実施状況等

#### (1) 企画・推進委員会開催時期及び検討内容

表 7 - 1 企画・推進委員会第 1 回～第 3 回の開催日時及び検討内容項目

	日時	検討内容
第1回	令和元年6月14日 13時30分～15時	(1) 昨年度のモデル事業の成果報告 (2) 今年度のモデル事業計画案策定 ア 今年度のモデル事業案 イ ICF研修実施時の留意点について ウ ICFを幼稚園、学校、福祉サービス事業所で活用する際の課題および解決方法の検討
第2回	令和元年11月22日 13時30分～15時	(1) 令和元年 ICF研修 実施結果 (2) 今後の研修会のあり方について (3) モデルケースのICFシステム活用報告(第1回支援会議まで) (4) 今後の進め方について
第3回	令和2年3月16日 13時30分～15時	(1) 第2回支援会議の実施報告 (2) 全体経過の振り返り (3) 来年度以降の取組みについて

#### (2) 検討内容の概要

##### < 第 1 回企画・推進委員会 検討概要 >

#### (1) 昨年度のモデル事業の成果報告

- ・ 現在の相談支援では、具体的な話が難しいが、ICFを活用すると、具体的な話ができる
- ・ 環境面に目を向けることができる
- ・ 保護者の目が、“できないところ”から“できること”になり、子どもにも良い影響がある

#### (2) 今年度のモデル事業計画案策定

##### ア 今年度のモデル事業案

- ・ 医学的情報だけでなく、全体像の中で色々な情報を得ている。そこに関わってくるバラバラの支援ではなく、一人の子どもを全体像の中で見ていくことができるのではないか。
- ・ 支援項目は、専門性をこえて共有していく。見ている子どもの状態をクロスして場面の中で子どもを見ていく。項目を絞り込み、上手くいったことをつなげていくのがこのシステムである。

#### イ ICF研修実施時の留意点について

- ・ 小中学校は、個別の教育支援計画がある。医学的モデルだけでなく、環境の大切さを感じている。色々な場面から考えることができる。研修から良い方法を見つけていきたい。

#### ウ ICFを幼稚園、学校、福祉サービス事業所で活用する際の課題および解決方法の検討

- ・ 解決すべき課題が多いので、運動して行なっていけると良い。
- ・ 10年間の動きとして、社会福祉は、計画にそって支援は良いが、バラバラな支援で困っている子もいる。1日の生活を情報共有できていない。ライフステージだけでなく、1日の中で、見ていけると良い。ICFのツールが総合的なツールになっていけると良い。
- ・ 負担感が強いようだが、必要な情報を支援計画の中に取り入れていくと良いのではないか。実際に効果として現われると結果的に良くなる。
- ・ 学齢期の子どもに良い環境になるか楽しみである。

#### エ 事業効果判定の方法

事務局案で異議なし

### <第2回企画・推進委員会 検討概要>

#### (1) 令和元年 ICF研修 実施結果

- ・ 研修参加の職員とそうでない職員の差がある。環境を見て、考えることにつながった。職員の意識が変わってきている。

- ・研修参加やモデル事業を行なうことで、子どもを見る力がついてきた。
  - ・困っているのは、職員ではなく、子どもであるが、職員の困り感になりやすい。
- 今後も研修に参加し、ICFの考え方を身につけていきたい。
- ・参加していく中で、ポジティブに色々な視点から、気軽に子供たちを捉えて、こどもたちがみえてくる、支援者が振り返り、細工できることがわかった。
  - ・子どもをどのような視点でみていくと良いかわかった。研修を通して、たくさん支援者が子どもの強みを知っていけると良い。
  - ・普段の業務の中で、様々な支援機関とやり取りや情報共有する中で、ICF研修のツールができたが、支援者がツールを使いこなせないと難しいと感じた。継続的にやっていかないと、浸透してしかないと思う。
  - ・項目のボリュームが多いのが、課題。相当時間がかかると思う。環境因子が入っているので、合理的配慮を考えていくには、使っていないといけない。結局、ICFを使っていくには、連携が大切。
  - ・各支援者の子ども理解の違い、まなざしの違いのベースをどう捉えていくと良いか。支援者同士の意見の違いをぶつけていったほうが良いので、そういう意味では、ICFをつかっていくと良い。

(2) 今後の研修会のあり方について

- ・ICFは、多すぎると言われている。昨年度、ASDやADHDの子どもを対象としたコアセットができた。コアセットを導入すると、チェック項目が40項目になる。WHOと現場を繋いでいき、環境と子どもをセットで見ていくことで、地域の普及が一步進む。
- ・現場に沿わせていく難しさはある。上手く研修実施を含めて、トータルとして、効果として現れると良い。

(3) モデルケースのICFシステム活用報告(第1回支援会議まで)

- ・素晴らしい実践だと思った。これまで個別で、保護者と学校、保護者と支援施設は連絡調整は行っているが、一同に会してやるのが、いかに劇的に子どもをかえていったかが、よくわかる実践だと思う。これ本当にとっても良いやり方だと思う。これをつづけられるかどうか、問題。

・家庭・教育・福祉のそれぞれの場所で問題と捉えやすいが、全体のコミュニケーションが良くなることで、この子どもの問題の起こし方も本質的に変わってくると思われる。この支援会議は、すばらしい実践だと思う。成功事例を積み重ね、定着できると良い。

・立場によって、捉え方が違うので、一緒に会議することで共通認識できたことは、メリットだと思う。

・ICFのシートは専門職も医師の意見も横並びで見ることができる。専門職の偏った見方でなくなる。

・事業所は、個別の支援計画などの書類があり、それぞれを抱えると業務も煩雑になる。また、書類の重みが薄くなるので、個別の支援計画とどのようにリンクさせていくのかが気になる。

・支援会議で情報共有でき、保護者の孤立感が解消されたのではないか。学校で問題がないと言われると、家庭の困り感だから、保護者としては伝えにくい。家の困り感は、家で解決しなくてはいけないと思い抱え込んでしまう保護者もいる。家庭の困り感を呼び起こす意味でも、ICFは有効だと思った。

・ICFは、プラットフォームで、子どもに関わる支援者達が、親子さんを含めてデータベースに積み上げて同じ目線で見えていく。その中に環境がある。支援者が変わっても、次に繋がっていかないと連携できない。

・引き継いでいくには、地域の支援体制のしくみが必要。研修で伝えられることはあるが、実感を伴うかということ、困難性の根は、子どもの中にあると染み付いているので、自分がやっていることが、地域で動いていることと違うかもと感じられるようになると良い。

・子どもを捉えるのは、価値観の違いになる。それでも、動かしていくしくみとしては、ICFは、使える。工夫していくと良い。

・支援会議に参加した人は、子どもの視点が変わったと言われていた。1の事例は顕著である。その子どもを中心とした支援を獲得するには、研修を通じても獲得できるのか、会議をしないと獲得できないのか。ICFのメリット、視点の変化は、会議なのか、データベースなのか、他にあるのかを合わせて考えていかないといけないと思った。

#### (4) 今後の進め方について

- ・情報共有する意味では、チームで意見をまとめておくと良い。
- ・1回目の支援会議で子どもを捉える支援を持ちながら、子どもの様子を見て、こうすると快適に感じていることを2回目の支援会議に繋がると良い。上手くいく条件、上手くいかない条件も入ってくるので、その子どもを理解していく、特性を理解する、どのように環境に反応していくのか、すべて繋がっていけると良い。

### <第3回企画・推進委員会 検討概要>

#### (1) 第2回支援会議の実施報告

- ・できることはたくさんあるが、支援者側がどう対応していくかが、幼稚園でも家庭でも事業所でも課題だった。気付きの中で、困りごとが支援者だったことだったが会議の中で全員わかった。参加した全員が共有できたことでこんなに支援がうまくいくことがわかり良かった。
- ・加配の先生の孤独感があることがわかった。親の立場でも、支援をしていく中で孤立感や孤独感をいつも感じている。ゆとりがないことに繋がっていると今回の資料を読んで感じた。情報共有する中で、孤立感をなくしていけると思った。
- ・園の先生は一生懸命がゆえに、無理をさせてしまう。以前より「その子に合わせればいい。」と上司が言っても上手く入っていかなかった。しかし会議をすることで、ずっとそのことが入り大変良かった。とても素敵な会であったと思う。
- ・ICFの項目リストがあると視野がひろがるというか、色々な情報を参照しながら進めていかれることができている。ただ、項目だけでは手掛かりしかでない。項目があがった後で、具体的な記載や情報があることは、その通りだと思う。それぞれの項目に対する記録が計時的に積み重なっていくと良いと思った。
- ・保護者は、ICFがあるからたくさん話せるといっていたが、ICFの項目を使いながら、具体的な育ちを増やしていき、歴史的な積み重ねを合わせてできると、効率的に支援や話し合いにつながっていくと思った。
- ・今回の資料を見させてもらって、本人がどう感じているか考えていくことが結構あった。それがすごく良かった。本人がどう感じているか結局推測しかできないが、その推測妥当性をもつためには、情報が大切だが、そういう意味で言うと、

ICF で得られた沢山の情報に基づいて、本人の世界を推測することによって、本人の視点にたった支援ができていくんだと思った。

・環境調整、合理的配慮を提供することで、伸びしろが伸びてくる。環境調整支援合理的配慮を提供することで、その子自身が、できる感覚、本来できないものが、学習していく準備段階で最高の環境調整の提供の中で、培われてくると思う。環境調整をすることで、この子の伸びしろがどう変わっていくかを見ていく。

## (2) 全体経過の振り返り

・情報を取るのが多く大変と言う意見が昨年より今年度のほうがそういう意見が減ってきたように思うが、どうか。

・研修にでたことで、視点を事前に学べたことが、具体的な記入方法、がわかり、注目する場面の気づきにもなった。

・項目は、頭に入った状態で、支援しているため、個別の支援計画に役立てられている。

・支援会議に保護者が参加して、支援者とフラットな形で、子どものことを考えることが良いことが改めて思った。保護者さんも子育てパワーをもらえるし、支援者も保護者から情報をもらえるため、すごくよかったと思う。

## (3) 来年度以降の取組みについて

・来年度の事業所が対象となっているか、研修を園や学校、保護者の会にしていくのか。⇒研修については、今年度同様、市内の全員の支援者に広く周知していく。

・支援会議は、今年、福祉課の職員が入ってくれたため、色々な気づきができたので、引き続きお願いしていきたい。

・厚生労働省の事業から始まって、碧南で3年目に入り、こころみとしては、行政が先進的にやっていく例がなかった。そういった中で、今度小児科や児童精神の医者にこういった動きがあることを何かの形で周知していくことはできないか。

## (3) 企画・推進委員会及び事務局名簿

表7-2 企画・推進委員会委員名簿及び事務局名簿

No.	役職	職業(役職)	委員氏名
1	委員長	北海道大学大学院教育学研究院 教授	安達 潤
2	委員	愛知県医療療育総合センター中央病院児童精神科医長	吉川 徹
3	〃	日本福祉大学子ども発達学部子ども発達学科 教授	渡邊 顕一郎
4	〃	親子の会 カラフル代表	鈴木 由記
5	〃	合同会社 祐愛 代表社員 りはくる(児童発達支援事業所、保育所等訪問支援事業)	小幡 一美
6	〃	碧南市学校教育課 教育相談室 臨床心理相談員	二宮 直樹
7	〃	碧南市学校教育課 指導主事	藤浦 一
8	〃	碧南市学校教育課 教員研修指導員	杉浦 あさの
9	〃	碧南市保健センター 母子保健係長	羽佐田 美和子
10	〃	碧南市こども課 指導主事	伊藤 寛美
11	〃	碧南市こども課 指導保育士	神谷 しづえ
12	〃	碧南市にじの学園 保育士	宮本 碧
13	オブザーバー	社会福祉協議会ふれあい相談支援事業所 相談支援専門員	古川 裕隆
14	〃	特定非営利活動法人 ARTIST JAPAN 理事長 ゆり学園(児童発達支援事業所、放課後等デイサービス)	森脇 友理
15	〃	合同会社 Win 代表 ぷちま〜る(児童発達支援事業所)	藤原 直子

## &lt;事務局&gt;

福祉こども部長	遠山 隆夫
福祉課長	杉浦 浩二
福祉課 発達支援係長 (発達障害児者地域生活支援モデル事業マネージャー)	鈴木 信恵
福祉課 発達支援係 主任保育士	鈴木 佳代子

## 2 成果の公表実績・計画

### (1) 成果の公表実績

ア 令和元年度発達障害支援の地域連携に係る全国合同会議(令和2年度2月12日)にて実施内容と成果を報告

イ 碧南市自立支援協議会こども部会(令和2年2月18日)にて実施内容と成果を報告

### (2) 成果の公表計画

碧南市役所のホームページにて実施内容や成果等の報告